HP OpenView Smart Plug-in for BEA WebLogic Application Server

For HP-UX and Solaris OpenView Operations Management Servers

ソフトウェア バージョン : A.04.00

設定ガイド

2005 年 12 月

ご注意

保証について

Hewlett-Packard 社は、この文書に関して市場性および特殊目的への適合性の暗黙の保証を含む一切の保証を行わないものとします。Hewlett-Packard 社は、この文書内の欠陥に対して、およびこの文書の提供、実行、または使用に関連する直接損害、間接損害、実損害、偶発損害、および結果損害に対して責任を負わないものとします。

ご使用の Hewlett-Packard 製品に適用される個別の保証条項の複写は、お近くの営業所で入手できます。

法律上の権利の制限について

合衆国政府による使用、複製、および開示に関しては、国防総省機関については DFARS 252.227-7013 の「技術データおよびコンピュータソフトウェアにおける権利」条項の (c)(1)(ii) 項で定める制限事項がそれぞれ適用されます。

Hewlett-Packard Company
United States of America

その他の機関に対しては FAR 52.227-19 (c)(1) および (c)(2) で定める制限事項がそれぞれ適用されます。

著作権について

© Copyright 2001-05 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

当社の事前の書面による承諾なく、本書のコピー、改変、または別の言語への翻訳を行うことは禁じられています。この情報は予告なしに変更されることがあります。

商標について

UNIX® は、The Open Group の登録商標です。

Microsoft®、Windows NT®、および Windows® は、Microsoft Corporation の米国内での登録商標です。

Java™ は、Sun Microsystems の米国内での登録商標です。

Linux は、Linus Tovalds 氏の米国内での登録商標です。

その他の製品名は各社の商標またはサービス マークです。

サポート

次の HP OpenView Web サイトを参照してください。

http://www.hp.com/managementsoftware/support (英語)
http://www.hp.com/jp/openview (日本語)

HP OpenView で提供する製品、サービス、サポートに関する詳細情報をご覧いただけます。

HP OpenView ソフトウェア サポート オンラインではセルフソルブ機能を提供しています。お客様の業務の管理に必要な対話型の技術支援ツールに素早く効率的にアクセスいただけます。サイト のサポート 範囲は次のとおり です。

- マニュアル類の検索
- エンハンスメント要求 (英語)
- ソフトウェア パッチのダウンロード
- サポート ケースの登録とトラッキング
- サポート契約の管理
- HP サポートの連絡先の確認
- 利用可能なサービスの確認
- フォーラムへの参加
- ソフトウェア トレーニングの確認と登録

各種サポートのご利用の際は、ほとんどの場合、HP Passport ユーザーとしてご登録いただき、ログインしていただく必要があります。また、サポート契約も必要です。

アクセス レベルの詳細は、次の URL のサイトを参照してください。

http://www.hp.com/managementsoftware/access_level

HP Passport ID の登録は、次のサイトで行うことができます。

http://www.managementsoftware.hp.com/passport-registration.html

日本語マニュアルは、次の Web サイトで参照いただけます。

http://www.hp.com/jp/manual

目次

1 WLS-SPI の概念 11
WLS-SPI の紹介 11
Smart Plug-in の統合 11
Smart Plug-in のデータ 11
Smart Plug-in の使用とカスタマイズ 12
WLS-SPI の動作の仕組み 12
WLS-SPI によるサーバーのパフォーマンスおよび可用性の情報の収集と解釈の方法 12
WLS-SPI による情報の表示方法 13
HP OpenView Reporter を使用したレポートの生成 14
OpenView Performance Manager によるデータのグラフ作成 14
カスタマイズ 15
コンポーネント 16
アプリケーション 16
WLSSPI Admin アプリケーション 16
WebLogic アプリケーション 17
WLS-SPI のレポート 18
JMX Metric Builder アプリケーション 19
テンプレート グループとテンプレート 19

2 WLS-SPI のインストール、削除、およびアップグレード 21
WLS-SPI のインストール方法 21
WLS-SPI のバンドルとファイルセット 22
WLS-SPI の削除方法 22
タスク 1: 管理サーバーから WLS-SPI ソフトウェアを削除する 22
タスク 2 : ノード グループおよび管理対象ノードから WLS-SPI ソフトウェアを削除する 23
タスク 3 : WLS-SPI テンプレートおよびテンプレート グループを削除する 23
タスク 4 : WLS-SPI アプリケーションを削除する 24
タスク 5 : WLS-SPI メッセージおよびノード グループを削除する 24
タスク 6 : WLS-SPI ディレクトリを削除する 24
タスク 7 : レポート パッケージを削除する (オプション) 24
タスク 8: グラフ作成パッケージを削除する (オプション) 24
以前のバージョンからアップグレードする方法 25
タスク 1: 管理サーバーから WLS-SPI ソフトウェアを削除する 26
タスク 2: WLS-SPI テンプレートを削除する 26
タスク 3: WLS-SPI アプリケーションを削除する 26
タスク 4: 管理サーバーをアップグレードする 27

タスク 5: opc_adm のオペレータ作業範囲を割り当てる 27
タスク 6: テンプレートを割り当てる 27
タスク 7: テンプレートを分配する 28
タスク 8: テンプレートをカスタマイズする 28
タスク 9: 新しいノード グループにノードを移動する 28
タスク 10: ノード グループを削除する 28
タスク 11: アクション、モニター、コマンド、およびテンプレートの分配 29
タスク 12: Discovery アプリケーションを実行する 29
タスク 13: 新しいレポート パッケージをインストールする (オプション) 30
タスク 14: 新しいグラフ作成パッケージをインストールする (オプション) 31

3 WLS-SPI の設定 33

前提条件となる設定 33
タスク 1: 管理サーバーを設定して Web ブラウザを起動する 33
タスク 2: opc_adm のオペレータ作業範囲を割り当てる 34
タスク 3 : テンプレートを割り当てる 34
タスク 4 : テンプレートを分配する 36
タスク 5 : remactconf.xml ファイルを更新する (OVO 8.x のみ) 36
WLS-SPI の設定 (管理対象ノード) 37
タスク 1 : アプリケーション サーバーのステータスを確認する 37
タスク 2 : WebLogic Server ユーザーを設定する 37
WebLogic Server バージョン 6.1 38
WebLogic Server バージョン 7.0 以上 38
WLS-SPI の設定 (管理サーバーから) 39
タスク 1: WLSSPI-Messages テンプレートを指定する 39
タスク 2: テンプレート、アクション、モニター、コマンドを分配する 41
タスク 3: Discovery を実行する 42
タスク 4: 追加のプロパティを設定する 44
タスク 5: 検出プロセスを確認する 45
タスク 6: ノードを WebLogic ノード グループに追加する 46
タスク 7: WLS-SPI テンプレートを分配する 46
タスク 8: 設定を完了する 46
タスク 9: WLS-SPI 設定を確認する 46
WLS-SPI のその他の設定 47
条件付きのプロパティ 47
条件付きプロパティの設定 48
UNIX 管理対象ノードでの非 root HTTPS エージェントの設定 (OVO 8.x のみ) 48

4 WLS-SPI の使用方法とカスタマイズ方法 51

テンプレートの基本的なカスタマイズ 51
メトリック テンプレートの変更 51
警告通知生成の変更 53
テンプレートの高度なカスタマイズ 54
カスタマイズするメトリックの選択 55

パラメータを用いて WLS-SPI コレクタ / アナライザのコマンドを使用 55
WebLogic Server コマンド パラメータの使用方法 56
すべてのメトリックの収集間隔の変更 57
選択したメトリックの収集間隔の変更 58
個々のサーバーのしきい値のカスタマイズ 58
タグ付きのカスタム テンプレートの作成 59
テンプレート変数 60
WLS-SPI のテンプレートの再インストール 60
テンプレート / アプリケーションを使用して注釈レポートとグラフを表示する方法 61
自動アクション レポート 62
レポートが生成されたことを知る方法 62
レポートの表示方法 62
自動生成レポートと手動生成レポートの違い 63
登録アプリケ—ションのレポート 64
レポートのサンプル 65
サポートされていないプラットフォーム上の WebLogic を監視する方法 66
リモート ノード (WLS-SPI がサポートしていないプラットフォーム上で動作) を監視するための要件 . . . 66
概要 66
リモート監視 : 動作の仕組み 66
リモート システムの監視の設定 67
タスク 1: リモートの WebLogic Server を設定する 68
タスク 2: OpenView Performance Agent を統合する (オプション) 68
タスク 3: ローカル ノードを WebLogic ノード グループに割り当てる 68
ログファイル用のリモート監視の設定 (オプション) 69
リモート ログファイル用のログファイル テンプレートの設定 69
リモート監視の制限 70
ライセンス数に対する WLS-SPI ノードの確認 70

5 WLS-SPI で HP OpenView のレポート作成 / グラフ作成の製品を使用 71
CODA の使用方法 72
HP OpenView Reporter との統合 72
WLS-SPI Reporter のレポート 73
WLS-SPI OVPI のレポート 76
HP OpenView Performance Manager との統合 77
データ ソースの説明 77
警告通知条件を示すグラフの表示 78
過去 / 現在の状態を示すグラフの表示 78
グラフで利用可能な WLS-SPI メトリック 78
グラフを生成するオペレータ アクションを用いて Web ページの表示を開始 81
日付の範囲の指定 81
統合の例 81

6 基本的なトラブルシューティングとエラー メッセージ 91
Self-Healing Info アプリケーションの使用. 91
検出プロセスのトラブルシューティング 91
Java ホーム ディレクトリの確認. 93
設定のトラブルシューティング 94
アプリケーションのトラブルシューティング 95
エラー メッセージ. 95
その他のすべてのエラー 137

A ファイルの位置 139
OVO 管理サーバーのファイルの位置 139
管理対象ノードのファイルの位置 139

B 設定 141
構造 141
グローバル プロパティ 141
GROUP ブロック 141
NODE ブロック 142
サーバー固有のプロパティ 142
プロパティ優先順位 142
設定エディタの使用法 143
Config WLSSPI - ツリー 143
Config WLSSPI - ボタン 145
Config WLSSPI - アクション 145
Add Application Server 146
Add Group 147
Add Node 147
Remove Application Server/Remove ALL App Servers 148
Remove Group/Remove ALL Groups 148
Remove Node/Remove ALL Nodes. 149
[Set Configuration Properties] タブ. 149
[View Current Configuration] タブ 150
設定プロパティ 152
プロパティの定義 153
サンプル設定 166
例 1: 単一のノード /2 つのサーバー 166
例 2: 複数のノード / 繰り返されるプロパティ 167
例 3: 複数の WebLogic Server バージョン. 169
例 4: 仮想 IP アドレスを持つ WebLogic Server 170
例 5: デフォルト以外の WebLogic Server の起動場所. 171

C アプリケーション 173
WLSSPI Admin 173
Config WLSSPI 174

目的 174
機能 174
実行方法 174
Discovery 175
目的 175
機能 175
実行方法 175
Init Non-Root 177
目的 177
機能 177
実行方法 177
Self-Healing Info 178
必要な設定 178
目的 178
機能 178
実行方法 180
Start/Stop Monitoring 181
目的 181
機能 181
実行方法 181
Start/Stop Tracing 182
目的 182
機能 182
実行方法 182
Verify 182
目的 182
機能 182
実行方法 185
View Error File 185
目的 185
機能 185
実行方法 185
View Graphs 186
必要な設定 186
目的 186
機能 186
実行方法 186
WebLogic 187
Check WebLogic 187
目的 187
機能 187
実行方法 187
Start WLS Console 187
必要な設定 187

目的 188
機能 188
実行方法 188
Start/Stop WebLogic 188
必要な設定 188
目的 188
機能 188
実行方法 188
View Deployed Apps 188
目的 189
機能 189
実行方法 189
View WebLogic Log 189
目的 189
機能 189
実行方法 190
View WebLogic Servers 190
目的 191
機能 191
実行方法 191

1 WLS-SPI の概念

Smart Plug-in for BEA WebLogic Server (WLS-SPI) は、HP OpenView Operations (OVO) のコンソールから WebLogic Server を管理できるようにするための全機能を搭載した SPI です。この章では、その基本的な概念について紹介します。WLS-SPI のインストールおよび設定を行う前に、この章をお読みください。以下のトピックを取り上げます。

- WLS-SPI の紹介
- WLS-SPI の動作の仕組み
- WLS-SPI のコンポーネント

WLS-SPI の紹介

WLS-SPI は、WLS-SPI なしでは OVO で利用できない監視機能を追加します。

Smart Plug-in の統合

WLS-SPI は OVO と共に使用することにより、WebLogic Server を使用したシステムの監視および管理に役立つ集中ツールを提供します。OVO コンソールから、オペレータは使い慣れた同じ HP OpenView パフォーマンスおよび問題管理プロセスを適用し、WebLogic Server を使用してシステムを監視することができます。WLS-SPI のメトリックは自動的に OVO エージェントに送信され、警告通知を有効にすることができるほか、レポートおよびグラフにも統合でき、サーバーの使用率、可用性、パフォーマンスの傾向を分析するのに役立ちます。WLS-SPI を HP OpenView Reporter および HP OpenView Performance Manager (いずれの製品も別途購入する必要があります) に統合すると、レポートとグラフをより柔軟に作成できるだけでなく機能も拡大します。

Smart Plug-in のデータ

WLS-SPI のインストールが完了すると、以下の領域を対象とするサーバー関連の主要なメトリックが多数利用できます。

- サーバーの可用性
- サーバーのパフォーマンス
- メモリの使用率
- トランザクション率
- サーブレットの実行時間、タイムアウト、要求率
- JDBC の接続状況
- Web アプリケーションの処理
- Java メッセージ サービス処理
- クラスタ処理
- 予定された WLS アクションの例外数

Smart Plug-in の使用とカスタマイズ

WebLogic Server の管理者は、WLS-SPI テンプレートを変更することによって WebLogic Server の運用上最も重要なメトリックを選択できます。テンプレートに含まれる設定によって、着信データは事前定義済みのルールと照らし合わされて評価され、その結果、有益な情報を含む*メッセージ*が生成されます。重要度レベルで色分けされたメッセージを調べて、問題の分析と解決に役立てることができます。特定のイベントやしきい値の違反に対して事前に定義されている修復アクションが自動的に実行されるか、またはオペレータによって開始されます。

WLS-SPI の動作の仕組み

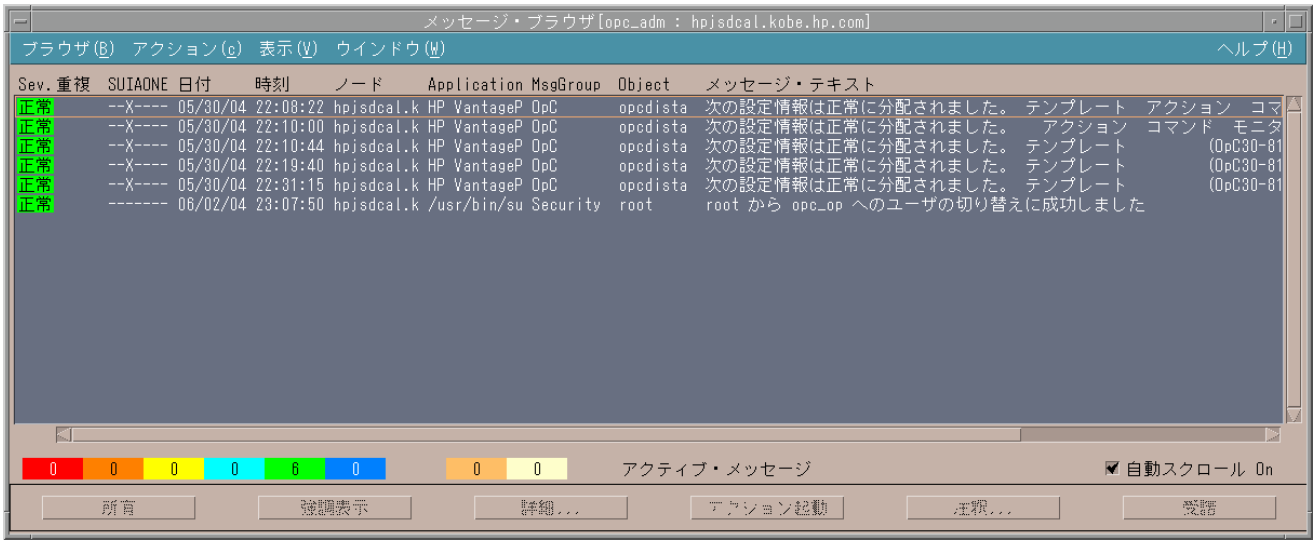
WLS-SPI のメッセージ生成、レポート作成、アクション実行の各機能は、OVO のテンプレートの概念を基にしています。このテンプレート内の設定によって、WebLogic Server 内のさまざまな条件が定義されます。WLS-SPI テンプレートを使用すると、情報が OVO 管理サーバーに送り返されるため、この情報を利用して潜在的な問題や現存する問題に予防的に働きかけ、Web トランザクション処理に深刻な悪影響が出ないようにすることができます。

WLS-SPI によるサーバーのパフォーマンスおよび可用性の情報の収集と解釈の方法

WLS-SPI を設定し、管理対象ノードに配布すると、WLS-SPI は配布済みのテンプレート内の設定に従ってデータを収集します。このデータは解釈され、それに基づいてアクションが実行されます。これらのテンプレートは、キューのスループット率、キャッシュの使用の割合、タイムアウト率、平均トランザクション時間など、WebLogic Server 内で発生する条件を定義します。テンプレート内に設定されているデフォルトのしきい値はこれらの条件を監視し、しきい値を超えるとコンソールにメッセージを生成します。

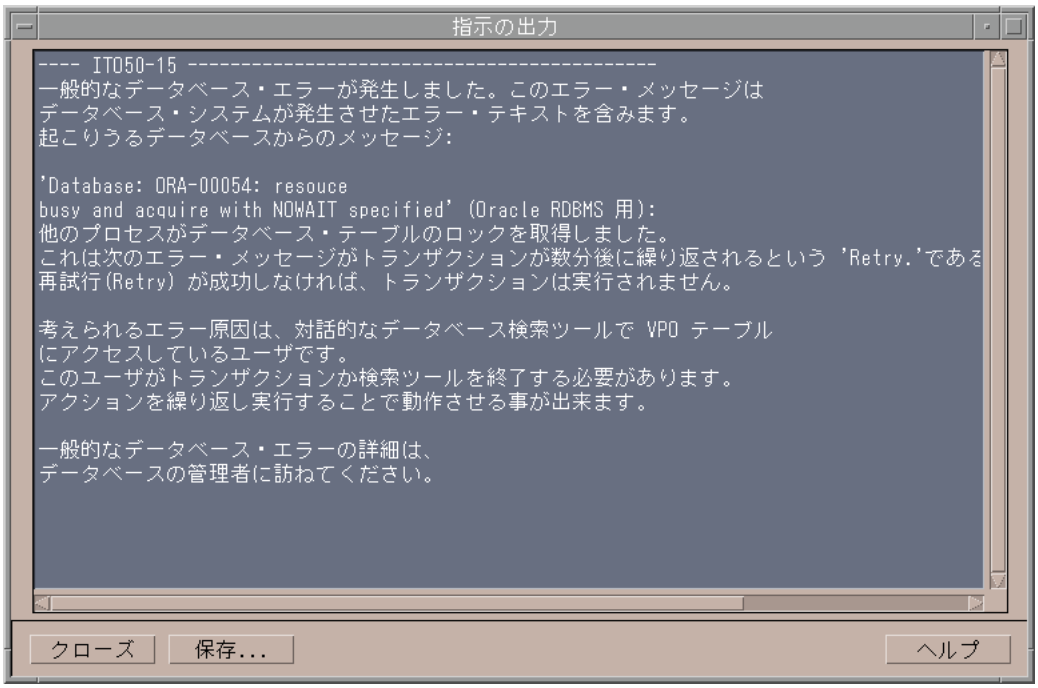
WLS-SPI による情報の表示方法

- メッセージ ブラウザのメッセージ - OVO エージェント ソフトウェアは WebLogic Server のパフォーマンスおよび可用性について収集した値を、その該当領域に関連する監視テンプレートの設定に対して比較し、適切なメッセージを OVO コンソールに転送します。これらのメッセージは、OVO メッセージ ブラウザでは重要度レベルで色分けされて表示されます。



- 指示 - WLS-SPI プログラムによって生成されたメッセージには、問題を診断し修復するための指示が含まれています。イベントに対して事前に設定された修復アクションが自動的に実行されるか、またはオペレータによって手動で実行されます。

  通常はメッセージの詳細に指示が表示されますが、この指示は『HP OpenView Smart Plug-in for BEA WebLogic Server SPI Reference』マニュアルのメトリックの定義でも参照できます。

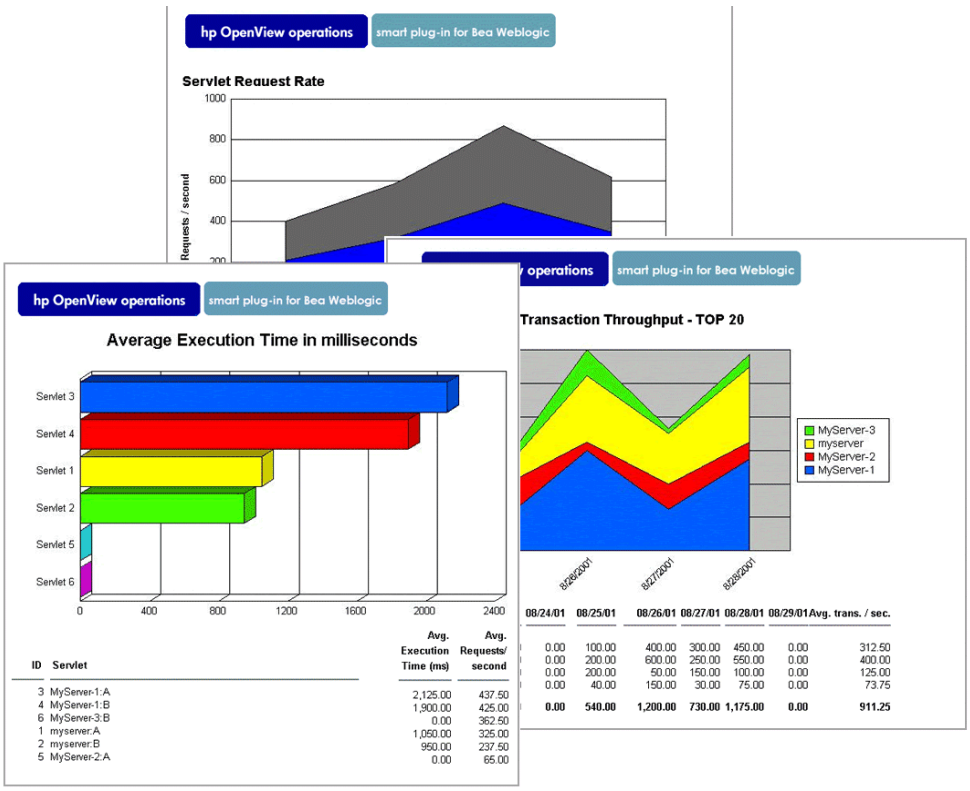


- ASCII テキスト レポート - 上記の指示に加え、一部のメッセージでは自動アクション レポートも 生成されます。このレポート には、特定の WebLogic Server インスタンスの状態が表示されます。レポート が利用できる場合は、指示と 同じよう に、[メッセージ詳細] の中の [注釈] の領域に表示されます。

HP OpenView Reporter を使用したレポートの生成

WLS-SPI は HP OpenView Reporter とも統合して、管理用の Web ベースのレポートを生成します。WLS-SPI には、レポート パッケージ内のレポートを生成するための、Reporter Windows システムにインストールできるテンプレートが含まれています。この製品をインストールして設定手順を完了すると、夜間に生成されたデータを要約して統合した新しいレポートが作成され、WebLogic Server が長時間にわたってどのように実行されているかを評価するのに役立ちます。

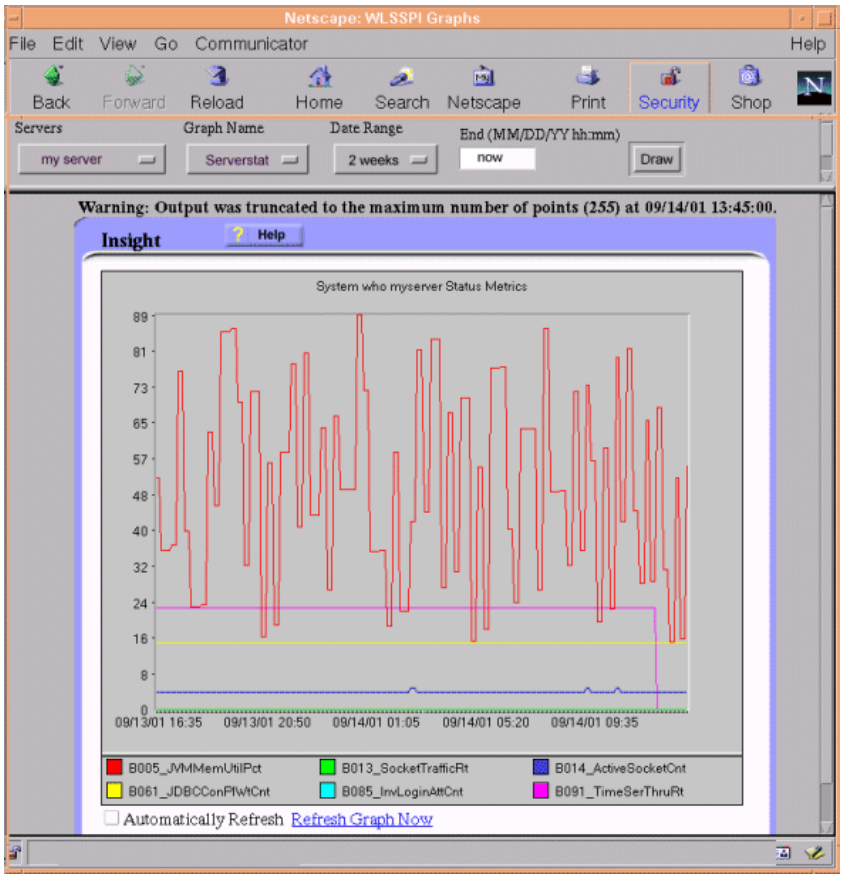
WLS-SPI レポートは WLS-SPI データを使用して、生成されるレポートを少し挙げただけでも、サーブレットの要求率、トランザクションのスループット率、平均トランザクション実行時間などを鮮やかに描き出します。



OpenView Performance Manager によるデータのグラフ作成

HP OpenView Performance Manager (OVPM) で WLS-SPI を使用すると、WLS-SPI の収集したメトリック値を示すグラフを作成できます (**WLSSPI Admin** → **View Graphs** アプリケーションを使用して)。OVPM では、多くの WLS-SPI 警告通知メッセージで **[アクション起動]** ボタンを押すことによって、WLS-SPI のデータをグラフで表示できます。このボタンは、メッセージ ブラウザにもメッセージの詳細にもあります (詳細を表示するには、メッセージをダブルクリックするか、**[詳細 ...]** ボタンを選択します)。このアクションにより Web ブラウザが起動され、そのメッセージを生成したメトリック、およびそれと関連するその他のメトリックの値を示すグラフを選択できます。

WLS-SPI によって収集されたメトリックはグラフ化できます。値を表示してトレンドの分析に使用できます。



カスタマイズ

WLS-SPI テンプレートはカスタマイズせずに使用することも、必要に応じて変更することもできます。少しの変更と大きなカスタマイズを以下に示します。

- デフォルト テンプレート の変更 - テンプレート の中で、以下のデフォルト 設定を変更できます。
  - a 収集間隔
  - b しきい値
  - c メッセージ テキスト
  - d 期間
  - e 条件の重要度レベル
  - f 条件に割り当てられたアクション (自動またはオペレータによる)
- カスタム テンプレート グループの作成 - デフォルト テンプレートを出発点としてカスタム テンプレート グループを作成します。詳細は、第 4 章、「WLS-SPI の使用方法とカスタマイズ方法」を参照してください。
- カスタム メトリック - ユーザー独自のメトリックやユーザー定義メトリック (UDM) を定義するための強力な機能を使用して、WLS-SPI の監視機能を拡張できます。UDM の詳細については、『HP OpenView Smart Plug-in User Defined Metrics User Guide』を参照してください。

コンポーネント

WLS-SPI のコンポーネントには、データをメッセージ、注釈、メトリック レポートの形式で設定および受信するためのアプリケーション (レポートを含む) とテンプレートがあります。これらのメッセージ (メッセージ ブラウザに表示)、注釈 (メッセージ プロパティを通じて使用可能) およびメトリック レポート (アプリケーションまたはメッセージの詳細を通じて使用可能) は、特定の管理対象ノード上で実行中のサーバーの現在の状態についての情報を提供します。

WLS-SPI 設定アプリケーションを使用して、特定の管理対象ノード上の指定されたサーバー インスタンスへの管理サーバーの接続を設定できます。接続の設定完了後、ノードにテンプレートを割り当てることができます。管理対象ノードで OVO エージェント ソフトウェアが実行されていれば、WLS-SPI のレポート アプリケーションを使用してメトリック レポートを生成できます。さらに、WLS-SPI のデータを示すグラフも生成できます (メッセージ プロパティを通じて)。

アプリケーション

WLS-SPI アプリケーションには、設定、トラブルシューティング、レポート生成ユーティリティがあります。[登録アプリケーション] ウィンドウでは、WLS-SPI アプリケーションは、*WLSSPI Admin*、*WebLogic*、*WLSSPI Reports* の 3 つのカテゴリに分類されます。

WASSPI-UDM-BUILDER ソフトウェア バンドルをインストールすると、JMX Metric Builder アプリケーション グループで追加のアプリケーションが使用できます。

WLSSPI Admin アプリケーション

WLSSPI Admin アプリケーションでは、WLS-SPI の設定、制御およびトラブルシューティングが行えます。これらのアプリケーションでは「root」ユーザー権限が必要であるため、このグループは OVO 管理者に割り当てることをお勧めします。

このグループには以下のアプリケーションがあります (各アプリケーションについての詳細は、付録 C「アプリケーション」を参照してください)。

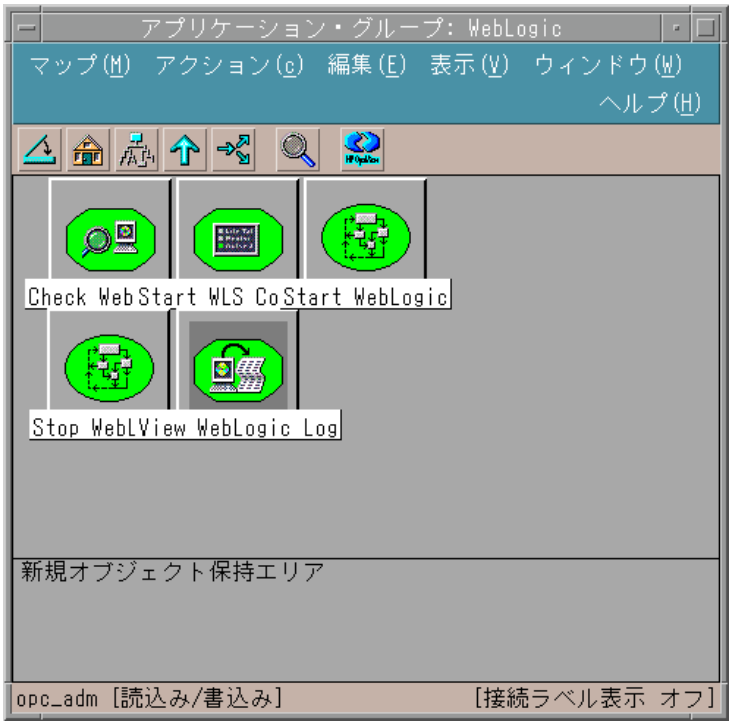
- **Config WLSSPI** - 設定エディタを起動し、WLS-SPI の設定を管理します。
- **Discovery** - 検出に必要な基本的な設定プロパティを設定します。

- **Init Non-Root** - UNIX 管理対象ノードで非 root HTTPS エージェントを簡単に設定できるようにします (OVO 8.x のみ)。UNIX 管理対象ノードでの非 root HTTPS エージェントの設定に必要な手順については、48 ページの「UNIX 管理対象ノードでの非 root HTTPS エージェントの設定 (OVO 8.x のみ)」を参照してください。
- **Self-Healing Info** - HP のサポート担当者に送信されるデータを収集します。
- **Start/Stop Monitoring** - 管理対象ノード上の 1 つのアプリケーション サーバーまたはすべてのアプリケーション サーバーのメトリックの収集を、開始または停止します。
- 監視機能が開始されているか、停止されているかを判定するには、**Verify** アプリケーションを実行します。デフォルトでは、監視機能は有効になっています。
- **Start/Stop Tracing** - メトリックのファイルへの収集のトレース記録を開始または停止します。このアプリケーションは、HP のサポート担当者に指示された場合のみ実行するようにしてください。
- **Verify** - WLS-SPI がサーバーまたは管理対象ノード上に正しくインストールされているかどうかを確認します。
- **View Error File** - WLS-SPI エラー ログ ファイルの内容を表示します。
- **View Graphs** - Web ブラウザの OpenView Performance Manager に WLS-SPI メトリック データを表示します (追加の設定が必要です。詳細は、33 ページの「タスク 1: 管理サーバーを設定して Web ブラウザを起動する」を参照してください)。

WebLogic アプリケーション

このグループのアプリ ケーション は、WebLogic Server の諸機能への便利なアクセスを提供します。

WebLogic アプリケーションを開くには、[登録アプリケーション] ウィンドウで **[WLSSPI]** → **[WebLogic]** の順にダブルクリックします。



このグループには以下のアプリケーションがあります。

- **Check WebLogic** - WebLogic Server の対話型のステータス チェックを実行します。

- **Start WLS Console** - Web ブラウザを起動し、WebLogic Server Admin Console を表示します (設定が必要)。
- **Start WebLogic** - OpenView Operations ユーザーによる WebLogic Server の起動を可能にします (設定が必要)。
- **Stop WebLogic** - OpenView Operations ユーザーによる WebLogic Server の停止を可能にします (設定が必要)。
- **View Applications** - WebLogic のドメイン設定、クラスタ情報、物理コンピュータをユーザーが参照できるようにします。
- **View WebLogic Log** - ユーザーが指定した WebLogic Server のログファイル全体を参照できるようにします。
- **View WebLogic Servers** - WebLogic Server インスタンスに配布されている全アプリケーションの名前とバージョンをユーザーが参照できるようにします。

WLS-SPI のレポート

サーバーの WebLogic の状態に関する情報を表示します。これらのレポートは、レポート アプリケーションのレポートに管理対象ノードをドラッグすることによって手動で生成します。各レポートはメトリックに関連する管理対象ノード上に*設定されているすべてのサーバー インスタンス*の状態を表します。

WLS-SLI 登録アプリケーションのレポート : [登録アプリケーション] ウィンドウでレポートに管理対象ノードをドラッグすることによって、そのノードのすべてのサーバーに関するレポートを生成できます。

警告通知から生成された登録アプリケーションのレポート

WLSSPI レポートは、警告通知条件によっても生成されます。そのような状況が発生すると、レポートは*自動的に*生成されます。このレポートはコンテキストに基づいており、管理対象ノード上の 1 つのサーバーにのみ関連しています。レポートはメッセージの [注釈] の中にあります。

S 列を表示するようにメッセージ ブラウザを設定した場合、S 列 (メッセージに隣接) の下にフラグが付いている場合は、レポートが正常に生成され、メッセージの [注釈] で待機中であることを示します。

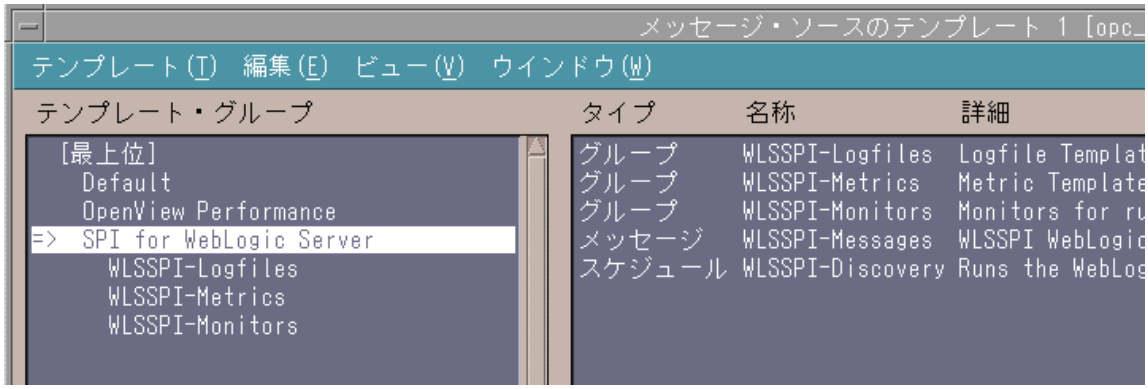
JMX Metric Builder アプリケーション

WASSPI-UDM-Bldr ソフトウェア バンドルをインストールすると、以下のアプリケーションがインストールされます (これらのアプリケーションおよび WASSPI-UDM-Bldr ソフトウェア バンドルのインストール方法の詳細については、『HP OpenView Smart Plug-in User Defined Metrics User Guide』を参照してください)。

- **Deploy UDM** - UDM ファイルを配布します。
- **Gather MBean Data** - JMX Metric Builder で使用する MBean 情報を収集します。
- **JMX Metric Builder** - UDM を作成し、MBeans を表示するのに使用する JMX Metric Builder アプリケーションを起動します。
- **Trace JMB** - トレース機能を有効にして JMX Metric Builder アプリケーションを起動します。
- **UDM Graph Enable/Disable** - UDM グラフ用のデータの収集を開始または停止します。また、OVO サブエージェントの開始または停止も行います。

テンプレート グループとテンプレート

WLS-SPI のテンプレート グループには、さまざまな OVO テンプレートを編成する方法が用意されています。



主要な SPI for WebLogic Server テンプレート グループには、以下のテンプレート グループと個々のテンプレートがあります。

- WLSSPI-Logfiles - ログ ファイル別のメッセージと、WebLogic Server ログ ファイルおよび WLS-SPI ログ ファイルの両方で検出されたエラー テキストを生成するテンプレートが含まれます。これらのログ ファイルから取り込まれた情報には、WebLogic Server または WLS-SPI の操作中に発生したエラーや WebLogic Server 設定の変更が含まれます。
- WLSSPI-Metrics - パフォーマンス レベルおよび WebLogic Server の可用性を監視するメトリック テンプレートが含まれます。

  各メトリック テンプレートは、監視対象のメトリック、しきい値を超えた場合に OVO メッセージ ブラウザに送信されるメッセージ テキスト、実行するアクション、および表示される指示についてのしきい値の条件を決定します。

- WLSSPI-Monitors - メトリック テンプレートの収集間隔を指定するコレクタ テンプレートが含まれます。各コレクタ テンプレートの名前には、収集間隔が含まれています。たとえば、テンプレート WLSSPI-81-1h の収集間隔は 1 時間です (1h は 1 時間を表しています)。各コレクタテンプレートには、5 分、15 分、1 時間のいずれかの収集間隔が指定されています。

  コレクタテンプレートを開くと、指定された間隔に収集されるメトリックがリストされています (メトリックはコレクタ / アナライザ用コマンド `wasspi_wls_ca` の -m オプションの後に番号で指定されます)。

  各コレクタ テンプレートは、いつどのようなメトリックを収集するかを制御します。具体的には、コレクタ テンプレートは以下を実行します。

  — 各収集間隔でコレクタ / アナライザを実行する

  — どのメトリックを収集するかを指定する

- WLSSPI-Messages - OVO メッセージ ブラウザの WLS-SPI メッセージを遮断するのに使用される単一のテンプレート。
- WLSSPI-Discovery - OVO 管理サーバーおよび管理対象ノードの設定を更新する単一のテンプレート。

上のメッセージ ブラウザでは、テンプレートによって生成された最後の 3 つのメッセージは WebLogic および WLSSPI メッセージ グループに属しており ([MsgGroup] というタイトルの列を参照)、それぞれどこで生成されたかを示しています。WebLogic メッセージは WebLogic Server で発生している状態を示しており、WLSSPI メッセージは WLS-SPI で発生している状態を示しています。

2 WLS-SPI のインストール、削除、およびアップグレード

この章では、OpenView Operations 用に Smart Plug-in for BEA WebLogic Server (WLS-SPI) のコンポーネントをインストール、削除、およびアップグレードする方法について説明します。

以降のセクションでは、次の手順について説明します。

- WLS-SPI のインストール方法
- WLS-SPI の削除方法
- 以前のバージョンからアップグレードする方法

WLS-SPI のインストール方法

OpenView Operations (OVO) 管理サーバーおよび検出パッケージは、WLS-SPI をインストールする前にインストールする必要があります。WLS-SPI のインストールを始める前に OVO セッションを停止する必要はありません。

検出パッケージと WLS-SPI は「HP OpenView Smart Plug-ins for OVO/UNIX」の CD に収録されています。

ソフトウェア要件の詳しいリストは、『Smart Plug-in for BEA WebLogic Server Release Notes』を参照してください。

➤ 以降の手順では、swinstall のコマンド行の使用法について説明します。HP-UX システムではグラフィカル ユーザー インタフェース (GUI) も使用できますが、GUI 方式はサポートされていません。

➤ UDM を作成する予定がある場合は、`WASSPI-UDM-Bldr` ソフトウェア バンドルもインストールしてください。このソフトウェア バンドルの詳細については、『HP OpenView Smart Plug-in User Defined Metrics User Guide』を参照してください。

HP-UX 11.0 管理サーバーの場合、次のように入力します。

```
swinstall -s /cdrom/OV_DEPOT/11.0HPUX.sdtape WLSSPI
```

Solaris 管理サーバーの場合、次のように入力します。

```
swinstall -s /cdrom/OV_DEPOT/SOLARIS.sdtape WLSSPI
```

WLS-SPI のバンドルとファイルセット

前のセクションの swinstall コマンドは、すべての管理対象ノード プラットフォーム用のファイルセットをインストールします。1 つのプラットフォームだけで管理対象ノードが実行されている場合、そのプラットフォームだけに必要なファイルセットをインストールすることをお勧めします。swinstall コマンドで「WLSSPI」を指定する代わりに、以下のバンドル名を 1 つまたは複数指定できます。

ファイルセット	バンドル名	説明
SPIWebLogicHPUX	WLSSPI-CORE WLSSPI-HPUX	HP-UX 上で実行中の管理対象ノードに必要なファイルセット
SPIWebLogicLXx86	WLSSPI-CORE WLSSPI-LXx86	Linux 上で実行中の管理対象ノードに必要なファイルセット
SPIWebLogicSOL	WLSSPI-CORE WLSSPI-SOL	Solaris 上で実行中の管理対象ノードに必要なファイルセット
SPIWebLogicNT	WLSSPI-CORE WLSSPI-NT	Windows 上で実行中の管理対象ノードに必要なファイルセット
SPIWebLogicAll	WLSSPI-CORE WLSSPI-HPUX WLSSPI-LXx86 WLSSPI-SOL WLSSPI-NT	HP-UX、Linux、Solaris、および Windows 上で実行中の管理対象ノードに必要なファイルセット

WLS-SPI の削除方法

WLS-SPI を完全に削除すると、すべての WLS-SPI コンポーネントが削除されます。

以下のタスクをこの通りの順序で実行します。

- タスク 1: 管理サーバーから WLS-SPI ソフトウェアを削除する
- タスク 2 : ノード グループおよび管理対象ノードから WLS-SPI ソフトウェアを削除する
- タスク 3 : WLS-SPI テンプレートおよびテンプレート グループを削除する
- タスク 4 : WLS-SPI アプリケーションを削除する
- タスク 5 : WLS-SPI メッセージおよびノード グループを削除する
- タスク 6 : WLS-SPI ディレクトリを削除する
- タスク 7 : レポート パッケージを削除する (オプション)
- タスク 8: グラフ作成パッケージを削除する (オプション)

タスク 1: 管理サーバーから WLS-SPI ソフトウェアを削除する

1. ターミナル ウィンドウを開き、root としてログオンします。
2. ターミナル ウィンドウで、以下のいずれかを入力します。
   /usr/sbin/swremove WLSSPI または
   /usr/sbin/swremove SPIWebLogicAll

swremove コマンドは、ファイルシステムからのみファイルを削除します。WLS-SPI テンプレートがまだ OVO データ リポジトリに残っているため、手動で削除する必要があります。テンプレートを削除する前に、WLS-SPI テンプレート（および WLS-SPI ソフトウェア）は管理対象ノードへの指定を解除しておく必要があります。

3 /opt/OV/wasspi/wls/bin/ ディレクトリに SPI ファイルがある場合は削除します。次のコマンドを入力します。

```
cd /opt/OV/wasspi/wls/bin
find . -name "wasspi_wls*" -exec rm {} \;
```

これで、/opt/OV/wasspi/wls/bin の配下にあるすべてのディレクトリの wasspi_wls で始まるすべてのファイルが削除されます。

タスク 2 : ノード グループおよび管理対象ノードから WLS-SPI ソフトウェアを削除する

1 [登録ノード] を開き、[アクション] メニューから **[エージェント]** → **[テンプレートの指定]** を選択します。

2 WebLogic ノード グループと WebLogic テンプレートが指定されているすべての管理対象ノードを選択します。

3 **[ノード / グループの削除]** ボタンを押します。

4 [登録ノード グループ] を開き、WebLogic ノード グループを選択します。

5 [アクション] メニューから **[ソフトウェアと設定のインストール / 更新]** を選択し、以下のチェックボックスをオンにします。

- [テンプレート]
- [アクション]
- [モニタ]
- [コマンド]

6 **[ノード・リスト中のノード]** オプション ボタンを選択します。

7 **[強制アップデート]** オプション ボタンを選択します。

8 **[OK]** をクリックして、管理対象ノードからテンプレート、アクション、コマンド、モニタを削除します。メッセージ ブラウザに次のメッセージが表示されます。

次の設定情報は正常に分配されました。テンプレート アクション コマンド モニタ

タスク 3 : WLS-SPI テンプレートおよびテンプレート グループを削除する

SPI for WebLogic Server テンプレート グループから始めて、すべてのテンプレートとテンプレート グループを削除します。これらのテンプレートおよびテンプレート グループを削除したら、SPI for WebLogic Server テンプレート グループ自体を削除します。

1 [メッセージ ソースのテンプレート] ウィンドウを開き、**[SPI for WebLogic Server]** テンプレート グループをダブルクリックします。

2 **[Shift]** キーを押しながら**クリック**して、SPI for WebLogic Server テンプレート グループのすべてのテンプレートとテンプレート グループを選択します。

3 **[全てから削除 ...]** ボタンをクリックします。

4 次のメッセージが表示されたら **[はい]** を選択します。

テンプレートを削除します。いいですか？

5 追加の WLS-SPI テンプレートやテンプレート グループが SPI for WebLogic Server テンプレート グループに入っている場合は、SPI for WebLogic Server テンプレート グループからすべての WLS-SPI テンプレートおよびテンプレート グループを削除するまで、ステップ 2 ～ 4 を繰り返します。

6 1 つ上のレベルに進んで、SPI for WebLogic Server テンプレート グループを削除します。

他の OVO テンプレート グループに属するテンプレート (WLS-SPI のデフォルト テンプレートのコピー) をカスタマイズしている場合、そのテンプレートも削除する必要があります。

タスク 4 : WLS-SPI アプリケーションを削除する

テンプレートとは異なり、アプリケーションは 1 ステップですべて削除できます。

1 [登録アプリケーション] を開きます。

2 WLSSPI アプリケーション グループを右クリックし、**[削除]** を選択します。

3 次のメッセージが表示されたら **[はい]** をクリックします。

アプリケーションまたはアプリケーション グループを削除します。いいですか？

タスク 5 : WLS-SPI メッセージおよびノード グループを削除する

1 [ウィンドウ] メニューから **[登録メッセージ グループ]** を選択します。

2 [登録メッセージ グループ] ウィンドウで **[WLSSPI]** グループを右クリックし、**[削除]** を選択します。

3 **[WebLogic]** グループについてもこの操作を繰り返します。

4 [ウィンドウ] メニューから **[登録ノード グループ]** を選択します。

5 [登録ノード グループ] ウィンドウで、WLS-SPI および WebLogic Server グループを右クリックし、**[削除]** を選択します。

タスク 6 : WLS-SPI ディレクトリを削除する

1 コマンド行から、次のように入力して WLS-SPI ディレクトリを削除します。

```
rm -rf /var/opt/OV/wasspi/wls
```

タスク 7 : レポート パッケージを削除する (オプション)

WLS-SPI レポート パッケージを (Reporter を実行する Windows システムに) インストールしていた場合は削除します。

1 Reporter を実行する Windows システムで、[コントロール パネル] から **[アプリケーションの追加と削除]** アイコンをダブルクリックします。

2 WLS-SPI レポート パッケージを強調表示し、**[削除]** を選択します。

タスク 8: グラフ作成パッケージを削除する (オプション)

WLS-SPI グラフ作成パッケージを (OVO 管理サーバーおよび OVPM を実行するシステムに) インストールしていた場合は削除します。

OVO 管理サーバー上で、以下のコマンドを実行します。

/usr/sbin/swremove WLSSPI-GRAPHS

OVPM を実行している Windows システムで、以下の手順を実行します。

1 [コントロール パネル] から **[アプリケーションの追加と削除]** アイコンをダブルクリックします。

2 WLS-SPI グラフ作成パッケージ (`HP OpenView SPI for WebLogic Server - Graphing Component Integration`) を強調表示し、**[削除]** をクリックします。

OVPM を実行している、OVO 管理サーバー以外の HP-UX システムで、以下の手順を実行します (OVPM が OVO 管理サーバーにインストールされている場合、ファイルは 22 ページの「タスク 1: 管理サーバーから WLS-SPI ソフトウェアを削除する」で削除されます)。

1 グラフ作成パッケージがインストールされていることを確認します。
swlist | grep WLSSPI-GRAPHS と入力します。

2 **swremove WLSSPI-GRAPHS** と入力します。

OVPM を実行している、OVO 管理サーバー以外の Solaris システムで、以下の手順を実行します (OVPM が OVO 管理サーバーにインストールされている場合、ファイルは 22 ページの「タスク 1: 管理サーバーから WLS-SPI ソフトウェアを削除する」で削除されます)。

1 グラフ作成パッケージがインストールされていることを確認します。
/usr/bin/pkginfo HPOvSpiWlsGc と入力します。

2 **/usr/sbin/pkgrm HPOvSpiWlsGc** と入力します。

以前のバージョンからアップグレードする方法

以前のバージョンからアップグレードしても、設定エントリはすべて保存されます。

WLS-SPI をアップグレードするには、以下の手順を実行します。

- タスク 1: 管理サーバーから WLS-SPI ソフトウェアを削除する
- タスク 2: WLS-SPI テンプレートを削除する
- タスク 3: WLS-SPI アプリケーションを削除する
- タスク 4: 管理サーバーをアップグレードする
- タスク 5: opc_adm のオペレータ作業範囲を割り当てる
- タスク 6: テンプレートを割り当てる
- タスク 7: テンプレートを分配する
- タスク 8: テンプレートをカスタマイズする
- タスク 9: 新しいノード グループにノードを移動する
- タスク 10: ノード グループを削除する
- タスク 11: アクション、モニター、コマンド、およびテンプレートの分配
- タスク 12: Discovery アプリケーションを実行する
- タスク 13: 新しいレポート パッケージをインストールする (オプション)
- タスク 14: 新しいグラフ作成パッケージをインストールする (オプション)

タスク 1: 管理サーバーから WLS-SPI ソフトウェアを削除する

1 ターミナル ウィンドウを開き、root としてログオンします。

2 ターミナル ウィンドウで、以下を入力します。

```
/usr/sbin/swremove WLSSPI
/usr/sbin/swremove SPIWebLogicAll
/usr/sbin/swremove WLSSP-GRAPHS
```

3 `/opt/OV/wasspi/wls/bin/` ディレクトリに SPI ファイルがある場合は削除します。次のコマンドを入力します。

```
cd /opt/OV/wasspi/wls/bin
find . -name "wasspi_wls*" -exec rm {} \;
```

これで、`/opt/OV/wasspi/wls/bin` の配下にあるすべてのディレクトリの `wasspi_wls` で始まるすべてのファイルが削除されます。

タスク 2: WLS-SPI テンプレートを削除する

SPI for WebLogic Server テンプレート グループの下にあるすべての WLS-SPI テンプレートおよびテンプレート グループを削除し、さらに SPI for WebLogic Server テンプレート グループ自体を削除します。グループ内の下位の個々のテンプレートから始めて、最上位の SPI for WebLogic Server グループまで上に進みます。デフォルト テンプレートをカスタマイズしている場合は、その変更をメモしておきます (カスタマイズは保存されません)。

1 [メッセージ ソースのテンプレート] ウィンドウを開き、**[SPI for WebLogic Server]** テンプレート グループを選択します。

2 その下にある WebLogic グループをダブルクリックし (WebLogic 8.1、7.0、6.1、6.0、5.1)、個々のテンプレートが表示される最下位のレベルまでテンプレート グループを続けてダブルクリックしていきます。

3 **[Shift]** キーを押しながら**クリック**して、すべてのテンプレートを選択します。

4 **[全てから削除 ...]** ボタンをクリックします。

5 次のメッセージが表示されたら **[はい]** を選択します。

テンプレートを削除します。いいですか？

6 1 つ上のレベルに進み、次のグループをダブルクリックします。[メッセージ ソースのテンプレート] ウィンドウから個々の WLS-SPI テンプレートおよびテンプレート グループをすべて削除してしまうまで、同じ方法を繰り返します。

タスク 3: WLS-SPI アプリケーションを削除する

テンプレートとは異なり、すべての WLS-SPI アプリケーションは 1 ステップで削除できます。

1 [登録アプリケーション] を開きます。

2 WLSSPI アプリケーション グループを右クリックし、**[削除]** を選択します。

3 次のメッセージが表示されたら **[はい]** をクリックします。

アプリケーションまたはアプリケーション グループを削除します。いいですか？

タスク 4: 管理サーバーをアップグレードする

WLS-SPI ソフトウェアは「HP OpenView Smart Plug-ins for OVO/UNIX」の CD に収録されています。

以降の手順では、swinstall のコマンド行の使用法について説明します。HP-UX システムではグラフィカル ユーザー インタフェース (GUI) も使用できますが、GUI 方式はサポートされていません。

HP-UX 11.0 管理サーバーの場合、次のように入力します。

```
swinstall -s /cdrom/OV_DEPOT/11.0HPUX.sdtape WLSSPI
```

Solaris 管理サーバーの場合、次のように入力します。

```
swinstall -s /cdrom/OV_DEPOT/SOLARIS.sdtape WLSSPI
```

タスク 5: opc_adm のオペレータ作業範囲を割り当てる

1. 管理者 (opc_adm) として OVO にログオンします。
2. [登録ユーザ] ウィンドウで opc_adm ユーザーを右クリックし、**[変更]** を選択します。
3. [ユーザの変更 : opc_adm] ウィンドウで、**[作業範囲]** をクリックします。
4. [WLSSPI] および [WebLogic] メッセージ グループについて、すべてのボックスがオンになっていることを確認します。
5. [WLSSPI] ノードまたはメッセージ グループを他の適切なオペレータに割り当てます。
6. **[クローズ]** をクリックします。

タスク 6: テンプレートを割り当てる

WLSSPI-Discovery テンプレートおよび WLSSPI-Messages テンプレートを管理サーバーに指定します。

1. [登録ノード] ウィンドウを開き、管理サーバーを強調表示します。
2. [アクション] メニューから、**[エージェント]** → **[テンプレートの指定]** を選択します。[ノード / テンプレート の指定] ウィンドウが表示されます。
3. **[追加]** をクリックします。[ノード / テンプレートの追加] ウィンドウが表示されます。
4. **[テンプレート ウィンドウ]** をクリックします。[メッセージ ソースのテンプレート] ウィンドウが表示されます。
5. [メッセージ ソースのテンプレート] ウィンドウの [テンプレート グループ] ペインで、**[SPI for WebLogic Server]** テンプレート グループを選択します。
6. [メッセージ ソースのテンプレート] ウィンドウの右ペインで、**[WLSSPI-Discovery]** テンプレート グループと **[WLSSPI-Messages]** テンプレートを選択します。
7. [ノード / テンプレートの追加] ウィンドウから **[選択テンプレートの取得]** をクリックします。WLSSPI-Messages テンプレートおよび WLSSPI-WebLogic-Discovery テンプレートが右ペインに表示されます。
8. [ノード / テンプレートの追加] ウィンドウから **[OK]** をクリックします。

タスク 7: テンプレートを分配する

WLSSPI-Discovery テンプレートおよび WLSSPI-Messages テンプレートを管理サーバーに分配します。

1 [登録ノード] ウィンドウを開き、管理サーバーを強調表示します。

2 [アクション] メニューから、**[エージェント]** → **[ソフトウェアと設定のインストール / 更新]** を選択します。

3 [ターゲット ノード] セクションで **[ノード リスト中で要アップデートのノード]** を選択します。

4 [ソフトウェアと設定のインストール / 更新] ウィンドウで **[テンプレート]** チェックボックスをオンにします。

5 **[強制アップデート]** を選択します。

6 **[OK]** をクリックします。

   メッセージ ブラウザに次のメッセージが表示されます。

   次の設定情報は正常に分配されました。テンプレート

WLSSPI-Discovery テンプレートおよび WLSSPI-Messages テンプレートが管理サーバーに分配されました。

タスク 8: テンプレートをカスタマイズする

26 ページの「タスク 2: WLS-SPI テンプレートを削除する」でカスタマイズをメモした場合は、デフォルト テンプレートのコピーを作成し、そのコピーも同じようにカスタマイズします。このバージョンの WLS-SPI では、テンプレートはもう WebLogic のバージョン番号ではグループ化されません。

タスク 9: 新しいノード グループにノードを移動する

SPI for WebLogic Server ノード グループ内のすべての管理対象ノード (サポートされているバージョンの WebLogic Server を実行している) を新しい WebLogic ノード グループに移動します。サポートされているバージョンの WebLogic Server を実行している管理対象ノードは、WebLogic 8.1、WebLogic 7.0、WebLogic 6.1 の各ノード グループ内にあります。

1 [登録ノード] を開き、**[SPI for WebLogic Server]** ノード グループを選択します。

2 **[WebLogic 8.1]** ノード グループをダブルクリックし、その中の管理対象ノードをメモします。**[WebLogic 7.0]** および **[WebLogic 6.1]** ノード グループについてもこのステップを繰り返します。

3 登録ノードの最上位 (WebLogic ノード グループが表示される) まで戻ります。

4 ノード (ステップ 2 でメモした) を IP サブマップから **[WebLogic]** ノード グループにドラッグ & ドロップまたはコピー & ペーストします。

タスク 10: ノード グループを削除する

SPI for WebLogic Server ノード グループ内のすべてのバージョンのノード グループを削除します。これには、WebLogic 8.1、WebLogic 7.0、WebLogic 6.1、WebLogic 6.0、WebLogic 5.1 が該当します。

1 [登録ノード] を開き、**[SPI for WebLogic Server]** ノード グループを選択します。

2 任意のバージョンの WebLogic ノード グループを選択し、[編集] メニューから **[削除]** を選択します。

3 次のメッセージが表示されたら **[はい]** をクリックします。

ノード グループを削除します。いいですか？

4 すべてのバージョンの WebLogic ノード グループが削除されるまでステップ 2 と 3 を繰り返します。

タスク 11: アクション、モニター、コマンド、およびテンプレートの分配

1 OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウから WLS-SPI のインストール先のノードまたはノード グループを選択します。

2 [登録ノード] の [アクション] メニューから、**[エージェント]** → **[ソフトウェアと設定のインストール / 更新]** を選択します。

3 [ソフトウェアと設定のインストール / 更新] ウィンドウで、以下のコンポーネント チェックボックスをオンにします。

- [テンプレート]
- [アクション]
- [モニタ]
- [コマンド]

このダイアログを使用して、アップデートされたコンポーネントを管理対象ノードに配布します。

4 [強制アップデート] チェックボックスをオンにします。

5 [ノード・リスト中のノード] ボタンを選択します。完了すると、次のメッセージが管理対象ノードごとにメッセージ ブラウザに表示されます。

次の設定情報は正常に分配されました。テンプレート アクション モニタ コマンド

➤ メッセージ ブラウザに WLS-SPI エラーが表示されることがありますが、これは無視してかまいません (これらのエラーは更新されたプログラムへの移行によるものです)。WLS-SPI テンプレートおよびプログラムは管理サーバーおよび選択した管理対象ノードで更新されます。アップグレードが完了すると、これらのエラーは解消します。

タスク 12: Discovery アプリケーションを実行する

Discovery アプリケーションを実行する必要がありますが、WLS-SPI 設定データは再入力する必要はありません (すべての設定データは保存されています)。複数のノードを 1 度に、ノード グループ、または単一のノードをドラッグ & ドロップして、ファイルを再配布することができます。ファイルを再配布すると、関連する情報も更新および転送され、ノードに格納されます。

1 OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。

2 [ウィンドウ] メニューから **[登録アプリケーション]** を選択します。

3 [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[Discovery]** を選択します。
(上記のように表示されない場合は、**[マップ]** → **[再ロード]** を選択します。)

4 [Introduction] ウィンドウが表示されます。

[Next] を選択します。

5 2 つ目の [Introduction] ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、検出プロセスが機能するために必要と思われるプロパティについての情報が表示されます。

この情報を読んでから **[Next]** を選択します。

6 設定エディタで、変更を行います。

GRAPH_SERVER プロパティを設定している場合、このプロパティはもう WLS-SPI ではサポートされていないことに注意してください。代わりに、GRAPH_URL プロパティを設定してください。

UDM_DEFINITIONS_FILE プロパティを設定した場合は、WLS-SPI の今後のバージョンではこのプロパティはサポートされないことに注意してください。管理対象ノードの UDM ファイルの場所をメモし、UDM_DEFINITIONS_FILE プロパティが設定されていればそれを削除します。

管理対象ノードの UDM を個別に設定した場合は、/opt/OV/wasspi/wls/conf/wasspi_wls_udmDefnintions.xml ファイルで管理サーバーにこれらの UDM を設定する必要があります（または別のファイルを使用する場合は UDM_DEFINITIONS_SOURCE プロパティを設定します）。

管理サーバーに UDM を統合したら、古い UDM ファイルを管理対象ノードから削除し、Deploy UDM アプリケーションを使用して新しい UDM ファイルを管理対象ノードに分配します。

7 **[Next]** を選択することによってあらゆる変更を保存し、エディタを終了します。

8 [Confirm Operation] ウィンドウが表示されます。**[OK]** を選択します。

[Cancel] を選択して設定に変更を加えた場合、それらの変更は管理サーバー上の設定に残ります。選択した管理対象ノードの設定に変更を加えるには、[登録ノード] ウィンドウでそれらのノードを選択し、Discovery アプリケーションを起動し、設定エディタで **[Next]** を選択してから **[OK]** を選択します。

検出プロセスが完了するまで、Discovery アプリケーション ウィンドウを閉じないでください。検出プロセスの完了までには数分かかる場合があります。

タスク 13: 新しいレポート パッケージをインストールする (オプション)

旧バージョンの WLS-SPI レポート パッケージを (Reporter を実行する Windows システムに) インストールしていた場合は、それをアンインストールして新しい WLS-SPI レポート パッケージをインストールする必要があります。

1 Reporter を実行する Windows システムで、[コントロール パネル] から **[アプリケーションの追加と削除]** アイコンをダブルクリックします。

2 WLS-SPI レポート パッケージを強調表示し、**[削除]** を選択します。

3 72 ページの「HP OpenView Reporter との統合」の手順に従って WLS-SPI レポート パッケージをインストールします。

タスク 14: 新しいグラフ作成パッケージをインストールする (オプション)

旧バージョンの WLS-SPI グラフ作成パッケージを (OVPM を実行しているシステムに) インストールしていた場合は、それをアンインストールして新しい WLS-SPI グラフ作成パッケージをインストールする必要があります。

OVPM を実行している Windows システムで、以下の手順を実行します。

1 [コントロール パネル] から **[アプリケーションの追加と削除]** アイコンをダブルクリックします。

2 WLS-SPI グラフ作成パッケージ (`HP OpenView SPI for WebLogic Server - Graphing Component Integration`) を強調表示し、**[削除]** をクリックします。

3 77 ページの「HP OpenView Performance Manager との統合」の手順に従って WLS-SPI グラフ作成パッケージをインストールします。

OVPM を実行している、OVO 管理サーバー以外の HP-UX システムで、以下の手順を実行します (OVPM が OVO 管理サーバーにインストールされている場合、SPI ソフトウェアのインストール時にファイルは自動的に更新されます)。

1 グラフ作成パッケージがインストールされていることを確認します。
`swlist | grep WLSSPI-GRAPHS` と入力します。

2 **`swremove WLSSPI-GRAPHS`** と入力します。

3 77 ページの「HP OpenView Performance Manager との統合」の手順に従って WLS-SPI グラフ作成パッケージをインストールします。

OVPM を実行している、OVO 管理サーバー以外の Solaris システムで、以下の手順を実行します (OVPM が OVO 管理サーバーにインストールされている場合、SPI ソフトウェアのインストール時にファイルは自動的に更新されます)。

1 グラフ作成パッケージがインストールされていることを確認します。
`/usr/bin/pkginfo HPOvSpiWlsGc` と入力します。

2 **`/usr/sbin/pkgrm HPOvSpiWlsGc`** と入力します。

3 77 ページの「HP OpenView Performance Manager との統合」の手順に従って WLS-SPI グラフ作成パッケージをインストールします。

これでアップグレードは完了しました。

3 WLS-SPI の設定

この章では、OpenView Operations (OVO) 用に Smart Plug-in for BEA WebLogic Server (WLS-SPI) を設定する方法について説明します。WLS-SPI を正しく設定するには、前提条件となる設定すべて、WLS-SPI の設定 (管理対象ノードおよび管理サーバー用)、およびユーザー自身の環境に基づいたその他の設定をする必要があります。

前提条件となる設定

WLS-SPI を設定する前に、以下のタスクを実行します。

- タスク 1: 管理サーバーを設定して Web ブラウザを起動する
- タスク 2: opc_adm のオペレータ作業範囲を割り当てる
- タスク 3 : テンプレートを割り当てる
- タスク 4 : テンプレートを分配する
- タスク 5 : remactconf.xml ファイルを更新する (OVO 8.x のみ)

タスク 1: 管理サーバーを設定して Web ブラウザを起動する

WLS-SPI は WebLogic Administration Console を起動し、グラフ メトリック (HP OpenView Performance Manager が必要) を表示するために、ovweb ユーティリティを使用して Web ブラウザを起動します。OVO コンソールから WebLogic Administration Console を起動する必要がない場合は、OpenView Performance Manager (OVPM) は使用しないで、このタスクも省いてください。

1 `ovweb.conf` ファイルに Web ブラウザ起動コマンドを入力します。ブラウザ起動コマンドが `ovweb.conf` ファイルにない場合、ovweb は Netscape Navigator (バージョン 6.0 以上であることが必要) を起動しようとします。

➤ `ovweb.conf` ファイルは環境変数 `$OV_CONF` (OVO で使用) で指定されたディレクトリに配置する必要があります。管理サーバーで OVO ディレクトリ構造を見つけるには、`/opt/OV/bin/ov.envvars.sh` ファイルを開いて `$OV_CONF` 定義を検索します。

WLS-SPI がブラウザに URL を渡すことができるように、ブラウザ起動コマンドには *%s* を含める必要があります。ファイルを開き、以下に示す入力構文と例に従ってコマンドを挿入します。

構文 : **`Browser: <ブラウザ コマンド> %s`**
例 : `Browser: /opt/netscape/netscape %s`

2 Web ブラウザの設定をチェックします。WLS-SPI のグラフを表示するには、ブラウザが JavaScript 有効であることを確認してください。ブラウザの [Preferences] 内の設定を確認します。

3 42 ページの「タスク 3: Discovery を実行する」で、条件に応じて以下のプロパティを設定します。

- OVO コンソールから WebLogic コンソールを起動したい場合は、ADMIN_HOST プロパティと ADMIN_PORT プロパティを設定します。
- OVPM を使用している場合は、GRAPH_URL プロパティを設定します。

OpenView Operations でのブラウザの起動についての詳細は、man ページで ovweb、ovweb.conf および ov.envvars を調べてください。グラフ表示を有効にするための手順については、コマンド プロンプトから **man ovweb** と入力します。

タスク 2: opc_adm のオペレータ作業範囲を割り当てる

1 管理者 (opc_adm) として OVO にログオンします。

2 [登録ユーザ] ウィンドウで opc_adm ユーザーを右クリックし、**[変更]** を選択します。

3 [ユーザの変更 : opc_adm] ウィンドウで、**[作業範囲]** をクリックします。

4 [WLSSPI] および [WebLogic] メッセージ グループについて、すべてのボックスがオンになっていることを確認します。

5 [WLSSPI] ノードまたはメッセージ グループを他の適切なオペレータに割り当てます。

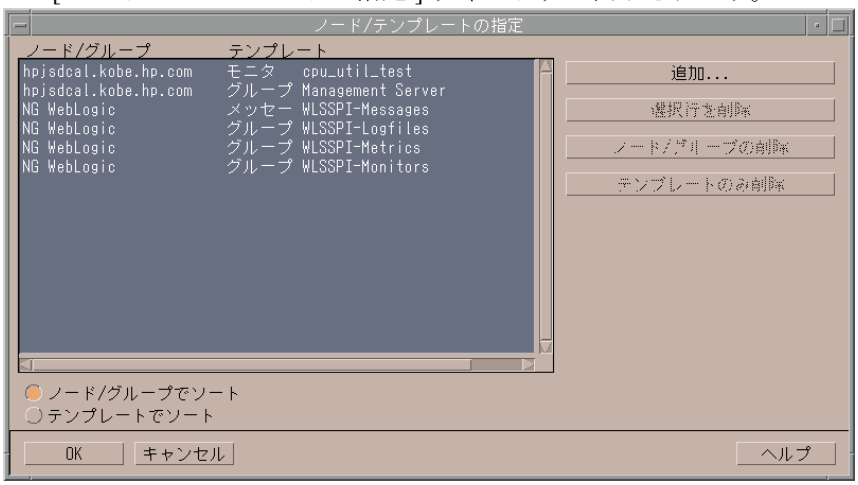
6 **[クローズ]** をクリックします。

タスク 3 : テンプレートを割り当てる

WLSSPI-Discovery テンプレートおよび WLSSPI-Messages テンプレートを管理サーバーに指定します。

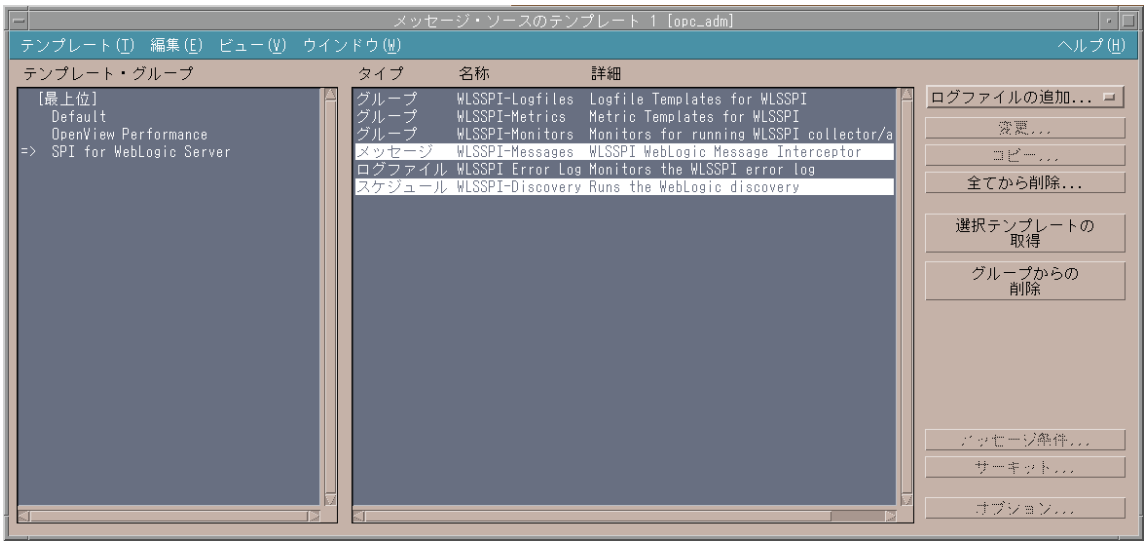
1 [登録ノード] ウィンドウを開き、管理サーバーを強調表示します。

2 [アクション] メニューから、**[エージェント]** → **[テンプレートの指定]** を選択します。[ノード / テンプレートの指定] ウィンドウが表示されます。



3 **[追加]** をクリックします。[ノード / テンプレートの追加] ウィンドウが表示されます。

4 **[テンプレート ウィンドウ]** をクリックします。[メッセージ ソースのテンプレート] ウィンドウが表示されます。



5 [メッセージ ソースのテンプレート] ウィンドウの [テンプレート グループ] ペインで、**[SPI for WebLogic Server]** テンプレート グループを選択します。

6 [メッセージ ソースのテンプレート] ウィンドウの右ペインで、**[WLSSPI-Discovery]** テンプレートと **[WLSSPI-Messages]** テンプレートを選択します。

7 [ノード / テンプレートの追加] ウィンドウから **[選択テンプレートの取得]** をクリックします。WLSSPI-Discovery テンプレートおよび WLSSPI-Messages テンプレートが右ペインに表示されます。

8 [ノード / テンプレートの追加] ウィンドウから **[OK]** をクリックします。

タスク 4 : テンプレートを分配する

WLSSPI-Discovery テンプレートおよび WLSSPI-Messages テンプレートを管理サーバーに分配します。

1 [登録ノード] ウィンドウを開き、管理サーバーを強調表示します。

2 [アクション] メニューから、**[エージェント]** → **[ソフトウェアと設定のインストール / 更新]** を選択します。

3 [ターゲット ノード] セクションで **[ノード リスト中で要アップデートのノード]** を選択します。

4 [ソフトウェアと設定のインストール / 更新] ウィンドウで **[テンプレート]** チェックボックスをオンにします。

5 **[強制アップデート]** を選択します。

6 **[OK]** をクリックします。

メッセージ ブラウザに次のメッセージが表示されます。

次の設定情報は正常に分配されました。テンプレート

WLSSPI-Discovery テンプレートおよび WLSSPI-Messages テンプレートが管理サーバーに分配されました。

タスク 5 : remactconf.xml ファイルを更新する (OVO 8.x のみ)

1 台以上の管理対象ノードで DCE ベースのエージェントを実行する場合、管理サーバーで自動アクションを実行できるように検出プロセスを設定する必要があります。以下を実行します。

1 `/etc/opt/OV/share/conf/OpC/mgmt_sv/remactconf.xml` を更新済みの場合はこのファイルを `/opt/OV/wasspi/wls/OV/remactconf.xml` ファイルとマージし、更新済みでない場合は前者のファイルを後者のファイルに置き換えます。

2 OVO 管理サーバーを再起動します。再起動するには、**`opcsv -start`** を実行します (`remactconf.xml` を変更する場合、管理サーバーの再起動が必要です)。

`remactconf.xml` ファイルを更新しない場合、検出プロセスは失敗します。

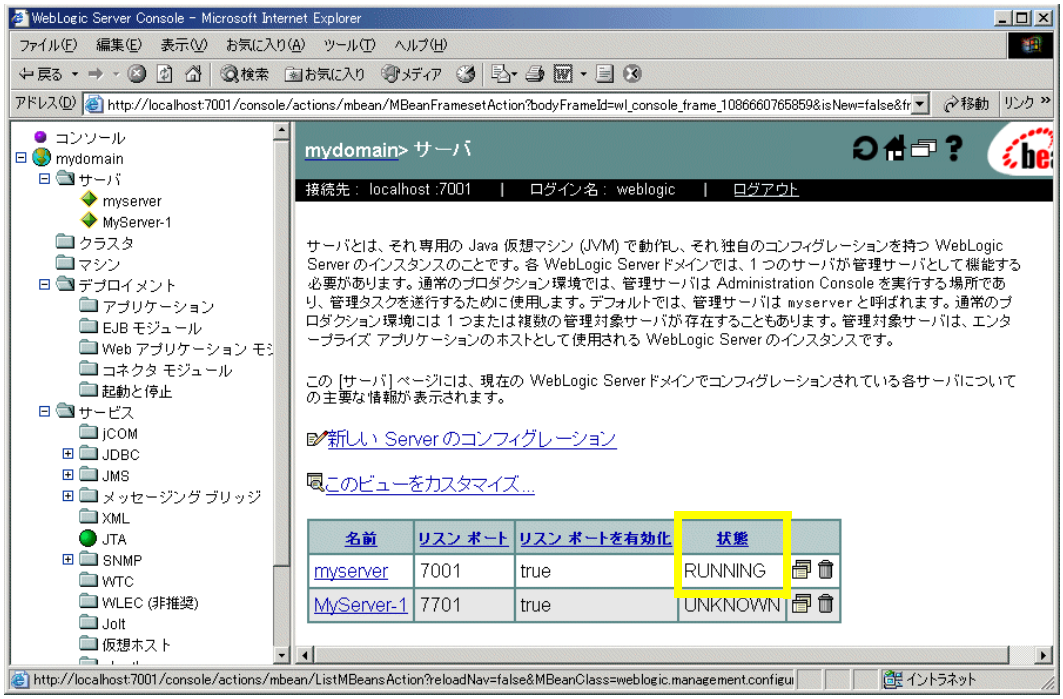
WLS-SPI の設定 (管理対象ノード)

WLS-SPI を設定するには、以下のタスクを実行します (各管理対象ノードについて)

- タスク 1 : アプリケーション サーバーのステータスを確認する
- タスク 2 : WebLogic Server ユーザーを設定する

タスク 1 : アプリケーション サーバーのステータスを確認する

WebLogic Administration Console からサーバーのステータスを調べることによって、アプリケーション サーバーが動作していることを確認します。



タスク 2 : WebLogic Server ユーザーを設定する

各 WebLogic Administration Server の WebLogic ログインとパスワードを収集します。既存のログインとパスワードの使用を望まない場合は、ログインとパスワードを作成します。これらのログインとパスワードは、WLS-SPI 検出プロセスで基本設定情報を収集するときと、WLS-SPI データ コレクタでメトリックを収集するときに必要となります。

複数の WebLogic Administration Server にアクセスするために同じ WebLogic ログインとパスワードを使用すると、WLS-SPI の設定が簡単になります。

WebLogic Server バージョン 6.1

WebLogic Server のバージョン 6.1 を実行している場合、デフォルトの管理ユーザーである「system」を使用できます。

別のユーザーを設定したい場合は、以下を実行します。

1. WebLogic Administration Console で、WLS-SPI で使用する予定のユーザーとパスワードを作成します (まだ存在しない場合) 。
2. `weblogic.admin.mbean` という名前のアクセス制御リスト (ACL) を作成します (まだ存在しない場合)。
3. この ACL について access という名前の権限を作成します (まだ存在しない場合)。
4. 「access」権限 (ステップ 3 で作成) に対するユーザー (ステップ 1 で作成) をユーザーのリストに追加します。

WebLogic Server バージョン 7.0 以上

WebLogic Server バージョン 7.0 以上を実行している場合は、WebLogic Server のインストール時に設定した管理ユーザーか、WebLogic Administrators または Monitors グループに所属するユーザーを使用することができます。

Administrators または Monitors グループに所属するユーザーを設定する場合、WebLogic Administration Console を使用します。ユーザーの作成方法およびユーザーをグループに割り当てる方法の詳細については、『WebLogic リソースのセキュリティ』の「ユーザとグループ」を参照してください (`http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs70/secwlres/usrs_grps.html#199302` または `http://edocs.beasys.co.jp/e-docs/wls/docs81/secwlres/usrs_grps.html#1213764`)。

Monitors グループに所属するユーザーは、Start/Stop WebLogic アプリケーション (OVO コンソールから WebLogic Server を起動または停止する) を使用することも、JMX アクションを実装するときに JMX 呼び出し「set」(UDM を作成する場合に特定の属性に値を割り当てる) を実行することもできません。

WLS-SPI の設定 (管理サーバーから)

WLS-SPI を設定するには、以下のタスクを実行します (各管理サーバーについて)

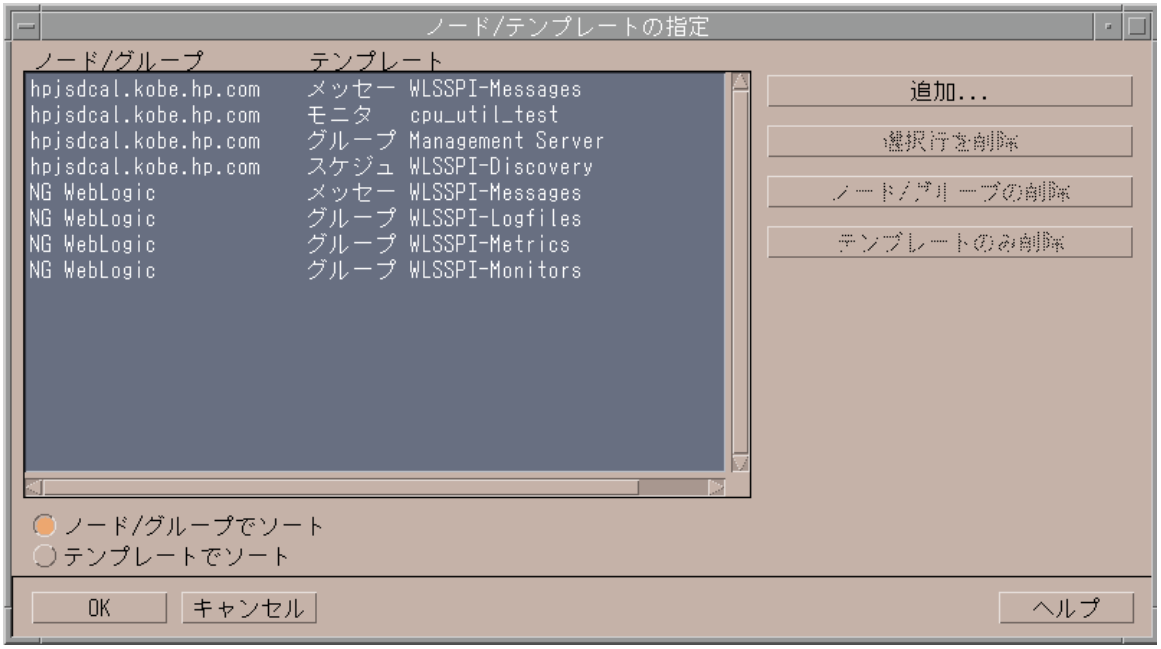
- タスク 1: WLSSPI-Messages テンプレートを指定する
- タスク 2: テンプレート、アクション、モニター、コマンドを分配する
- タスク 3: Discovery を実行する
- タスク 4: 追加のプロパティを設定する
- タスク 5: 検出プロセスを確認する
- タスク 6: ノードを WebLogic ノード グループに追加する
- タスク 7: WLS-SPI テンプレートを分配する
- タスク 8: 設定を完了する
- タスク 9: WLS-SPI 設定を確認する

タスク 1: WLSSPI-Messages テンプレートを指定する

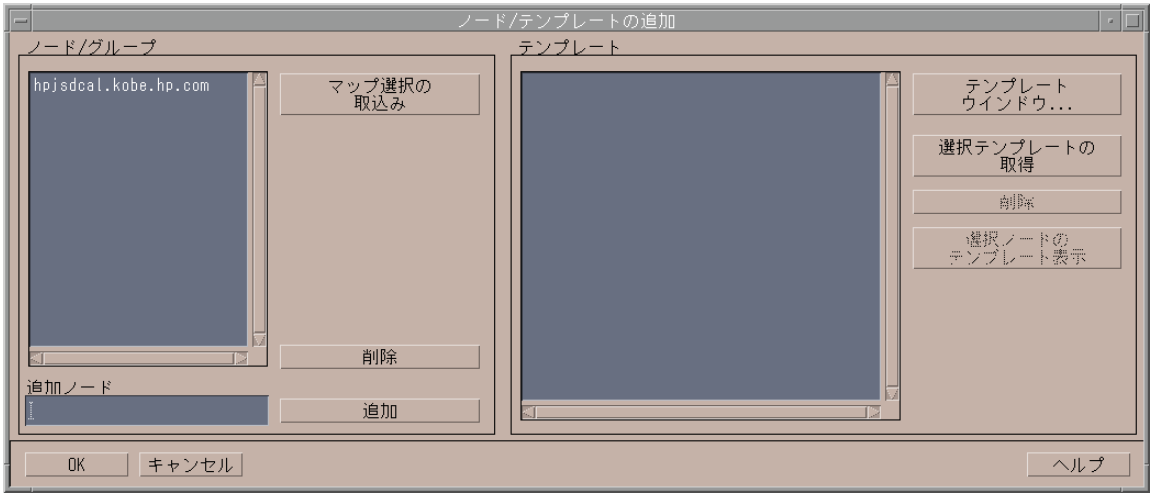
WLSSPI-Messages テンプレートを管理対象ノードに指定します。

1 [登録ノード] ウィンドウを開き、管理対象ノードを強調表示します。

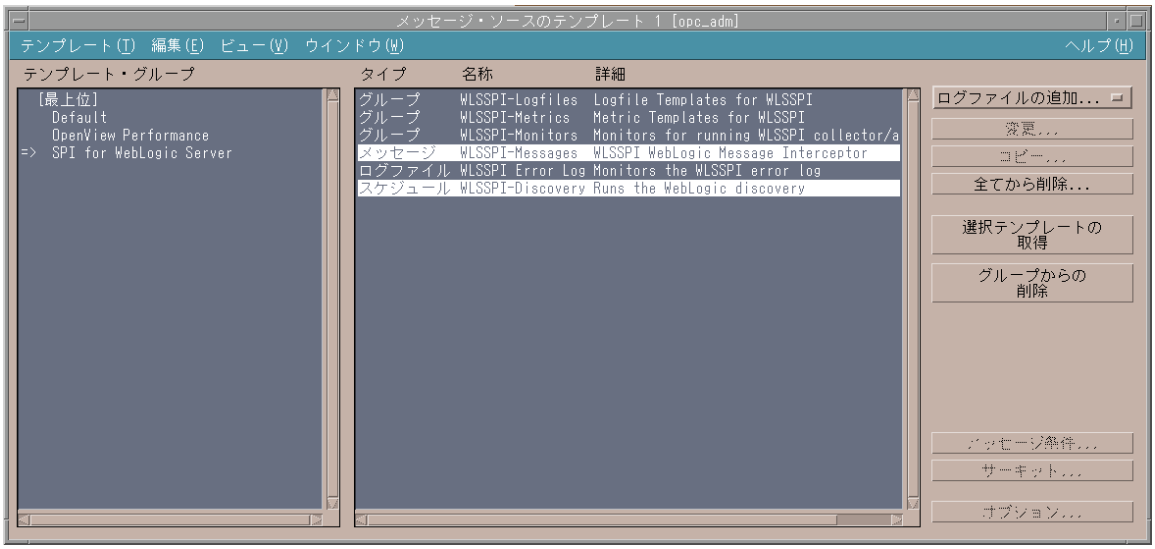
2 [アクション] メニューから、**[エージェント]** → **[テンプレートの指定]** を選択します。
[ノード / テンプレートの指定] ウィンドウが表示されます。



3 **[追加]** をクリックします。[ノード / テンプレートの追加] ウィンドウが表示されます。



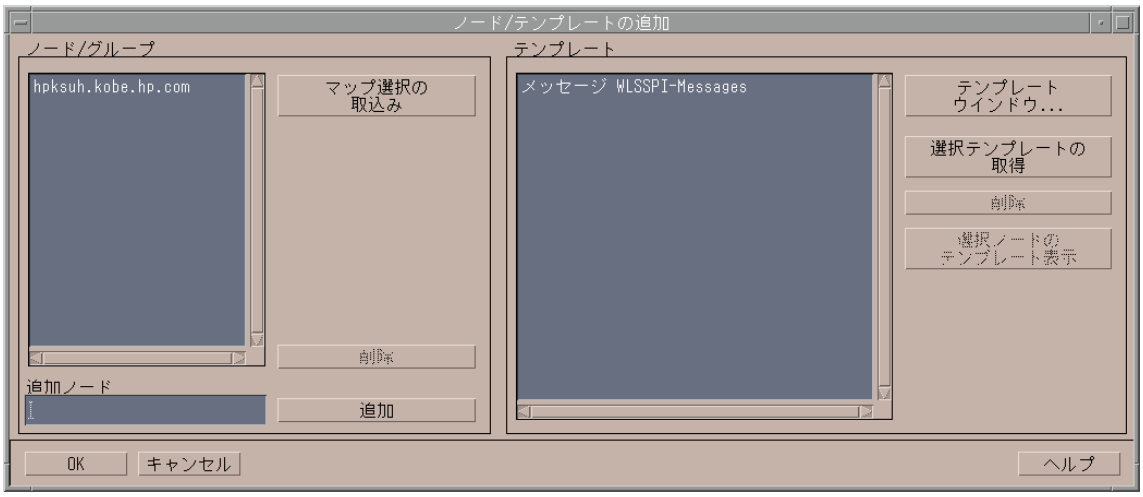
4 **[テンプレート ウィンドウ]** をクリックします。[メッセージ ソースのテンプレート] ウィンドウが表示されます。



5 [メッセージ ソースのテンプレート] ウィンドウの [テンプレート グループ] ペインで、**[SPI for WebLogic Server]** テンプレート グループを選択します。

6 [メッセージ ソースのテンプレート] ウィンドウの右ペインで、**[WLSSPI-Messages]** テンプレートを選択します。

7 [ノード / テンプレートの追加] ウィンドウから **[選択テンプレートの取得]** をクリックします。右ペインに WLSSPI-Messages テンプレートが表示されます。



8 [ノード / テンプレートの追加] ウィンドウから **[OK]** をクリックします。

タスク 2: テンプレート、アクション、モニター、コマンドを分配する

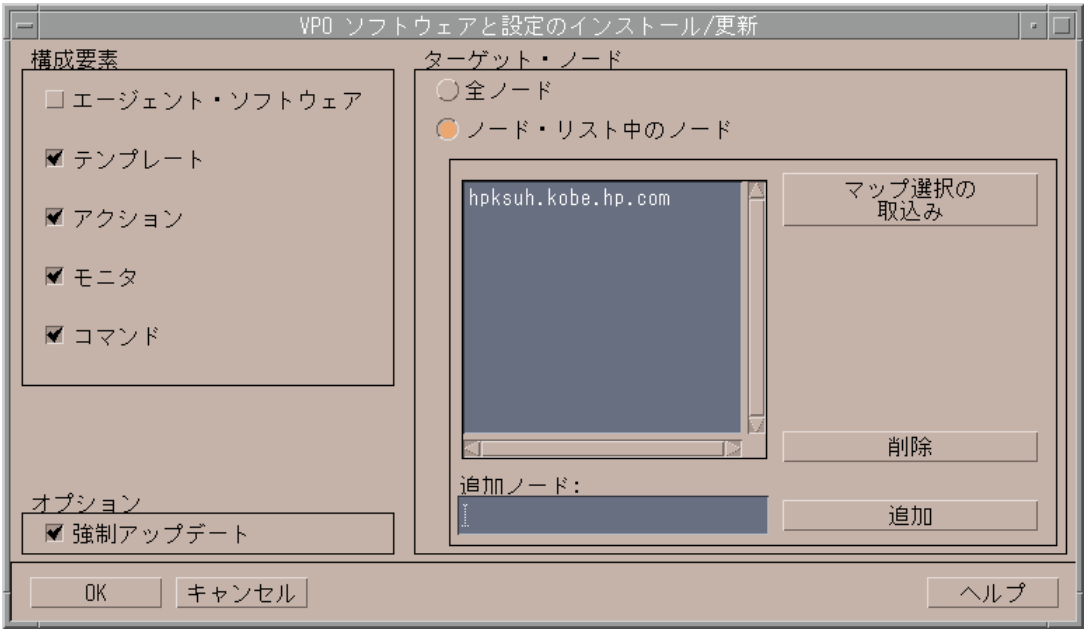
1 WLS-SPI をインストールするノード (1 つまたは複数) を強調表示します。

2 [登録ノード] の [アクション] メニューから、**[エージェント]** → **[ソフトウェアと設定のインストール / 更新]** を選択します。

3 [ソフトウェアと設定のインストール / 更新] ウィンドウで、以下のコンポーネント チェックボックスをオンにします。

- [テンプレート]
- [アクション]
- [モニタ]
- [コマンド]

このダイアログを使用して、プログラム コンポーネントを管理対象ノードに配布します。



4 **[強制アップデート]** チェックボックスをオンにします。

5 **[ノード・リスト中のノード]** ボタンを選択します。
完了すると、次のメッセージが管理対象ノードごとにメッセージ ブラウザに表示されます。

次の設定情報は正常に分配されました。テンプレート アクション コマンド モニタ

これで、WLS-SPI が選択した管理対象ノードにインストールされました。

タスク 3: Discovery を実行する

1 OVO コンソールの [登録ノード] ウィンドウでノードを選択します (1 度に 1 つずつのノードで Discovery アプリケーションを実行することをお勧めします)。

2 [ウィンドウ] メニューから **[登録アプリケーション]** を選択します。

3 [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** を選択し、**[Discovery]** をダブルクリックます。
(上記のように表示されない場合は、**[マップ]** → **[再ロード]** を選択します。)

4 [Introduction] ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、Discovery アプリケーションについての簡単な情報が記載されています。

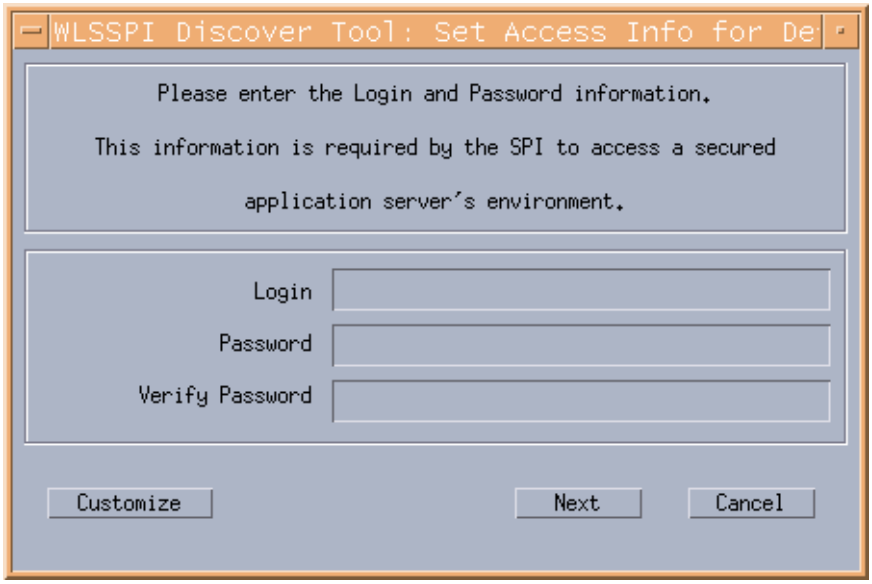
[Next] を選択します。

5 2 つ目の [Introduction] ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、検出プロセスが機能するために必要と思われるプロパティについての情報が表示されます。

この情報を読んでから **[Next]** を選択します。

6 `LOGIN` と `PASSWORD` のプロパティをすでに設定してある場合、設定エディタが表示されます。
44 ページの「タスク 4: 追加のプロパティを設定する」に進みます。

LOGIN と PASSWORD プロパティを設定していない場合、[Set Access Info for Default Properties] ウィンドウが表示されます。



LOGINと PASSWORDのプロパティを、37 ページの「タスク 2 : WebLogic Server ユーザーを設定する」で設定した WebLogic のログインとパスワード に設定します。デフォルト のログイン / パスワード (WebLogic バージョン 6.1)、または WebLogic Server のインスト ール時に設定したログイン / パスワード (WebLogic バージョン 7.0 以上) を使用している場合であっても、LOGIN と PASSWORD を設定する必要があります。

このウィンドウで設定した LOGIN と PASSWORD のプロパティは、デフォルトの WebLogic のログインとパスワードとして使用されます (これらはグローバル プロパティのレベルで設定されます)。つまり、NODE レベルやサーバー固有の LOGIN と PASSWORD のプロパティが設定されていない場合、WLS-SPI は、すべての WebLogic Administration Server にアクセスするのにこの WebLogic のログインとパスワードを使用するということです。設定構造の詳細については、141 ページの「構造」を参照してください。

*WebLogic Administration Server のログインとパスワードが、すべての OVO 管理対象ノード上のすべての WebLogic のインスタンスについて同じである場合、*以下の手順を実行します。

a [Set Access Info for Default Properties] ウィンドウで [LOGIN] および [PASSWORD] プロパティを設定します。

b 44 ページの「タスク 4: 追加のプロパティを設定する」に進みます。

*WebLogic Administration Server のログインとパスワードが、管理対象ノード間では異なるが、各管理対象ノード上では WebLogic Administration Server のすべてのインスタンス間で同じであるという場合は、*NODE レベルで LOGIN と PASSWORD のプロパティを設定して WLS-SPI 設定をカスタマイズする必要があります (設定構造の詳細については、141 ページの「構造」を参照してください)。

a [Set Access Info for Default Properties] ウィンドウで、[LOGIN] および [PASSWORD] プロパティを、最もよく使用される WebLogic のログインとパスワードに設定します。

b **[Customize]** をクリックして設定エディタを起動し、NODE レベルで LOGIN と PASSWORD のプロパティを設定します。設定エディタの使用方法については、付録 B「設定」を参照してください。

c 44 ページの「タスク 4: 追加のプロパティを設定する」に進みます。

WebLogic Administration Server のログインとパスワードが、管理対象ノード間で異なり、かつ各管理対象ノード上の WebLogic Administration Server のインスタンス間でも異なるという場合は、サーバー固有レベルで LOGIN、PASSWORD、NAME、および PORT プロパティを設定して、WLS-SPI 設定をカスタマイズする必要があります (設定構造の詳細については、141 ページの「構造」を参照してください)。

a [Set Access Info for Default Properties] ウィンドウで、[LOGIN] および [PASSWORD] プロパティを、最もよく使用される WebLogic のログインとパスワードに設定します。

b **[Customize]** を選択して設定エディタを起動し、サーバー固有レベルで LOGIN、PASSWORD、NAME、および PORT のプロパティを設定します。設定エディタの使用方法については、付録 B「設定」を参照してください。

c 44 ページの「タスク 4: 追加のプロパティを設定する」に進みます。

タスク 4: 追加のプロパティを設定する

LOGIN および PASSWORD プロパティは、検出プロセスに必要な基本のプロパティです。ただし環境によっては、追加の設定情報が検出プロセスに必要です。

以下のプロパティの設定が必要かどうかを判断してください (これらのプロパティの詳細については、152 ページの「設定プロパティ」を参照してください)。

- ADDRESS - WebLogic Server が仮想 IP アドレスに設定されている場合に必要です。ADDRESS は、WebLogic Server がリスンしているドメイン名または IP アドレスです。
- ADMIN_PORTS - ドメイン設定ファイル (config.xml) がデフォルトのディレクトリにない場合に必要です。
  - *<WebLogic_Install_Dir>*/config/*<WebLogic_Domain>*/ (WebLogic 6.1 の場合)
  - *<BEA_Home_Dir>*/user_projects/*<WebLogic_Domain>*/ (WebLogic 7.0 または 7.0 SP1 の場合)
  - *<BEA_Home_DIR>*/user_projects/domains/*<WebLogic_Domain>*/ (WebLogic 7.0 SP2 以上の場合)

  ここで、*<WebLogic_Install_Dir>* は WebLogic Server がインストールされているディレクトリであり、*<BEA_Home_Dir>* は registry.xml ファイルを格納しているディレクトリであり、*<WebLogic_Domain>* は WebLogic のドメイン名です。

  ADMIN_PORTS は WebLogic Admin サーバーのポート番号のリストです。
- HOME_LIST - BEA の registry.xml ファイルが正確でない場合、あるいは見つからない場合 (これが起きるのは BEA のインストール スクリプトを使わずに WebLogic Server のソフトウェアとサービス パックをインストールした場合) に必要です。HOME_LIST は、WebLogic Server がインストールされているディレクトリのリストです。
- JAVA_HOME - Java がインストールされているディレクトリが複数存在する場合、またはユーザー独自の Java を使用している場合に必要です。JAVA_HOME は、Java がインストールされているデフォルトのディレクトリです。
- NODE_NAMES - リモートの WebLogic Server が仮想 IP アドレスでリスンしている場合に必要です。このプロパティを設定しないと、WebLogic Server は検出されません。
- EXCLUDE_SAMPLES - このプロパティは、デフォルトのプロパティ レベルで「true」に設定して、検出プロセスの実行にかかる時間を短縮することをお勧めします。このプロパティを「true」に設定すると、WebLogic Server のサンプル プログラムは検出プロセスから除外されます。検出プロセスの完了までには数分かかる場合があります。

追加のプロパティを設定する必要がない場合は、以下のいずれかを実行します。

- [Set Access Info for Default Properties] ウィンドウから **[Next]** をクリックします。

- 設定エディタから **[Next]** を選択して変更を保存し、エディタを終了します。[Confirm Operation] ウィンドウが表示されます。**[OK]** を選択します。

[Cancel] を選択して設定に変更を加えた場合、それらの変更は管理サーバー上の設定に残ります。選択した管理対象ノードの設定に変更を加えるには、[登録ノード] ウィンドウでそれらのノードを選択し、Discovery アプリケーションを起動し、設定エディタで **[Next]** を選択してから **[OK]** を選択します。

以上のプロパティ (1 つまたは複数) を設定する必要がある場合は、以下の手順を実行します。

1 設定エディタが起動されていない場合は、**[Customize]** を選択して設定エディタを開きます。

2 設定エディタで、プロパティを設定します。設定エディタの使用方法については、付録 B「設定」を参照してください。

3 **[Next]** を選択することによってあらゆる変更を保存し、エディタを終了します。

4 [Confirm Operation] ウィンドウが表示されます。操作が実行されるノードを確認します。**[OK]** を選択します。

[Cancel] を選択して設定に変更を加えた場合、それらの変更は管理サーバー上の設定に残ります。選択した管理対象ノードの設定に変更を加えるには、[登録ノード] ウィンドウでそれらのノードを選択し、Discovery アプリケーションを起動し、設定エディタで **[Next]** を選択してから **[OK]** を選択します。

次のタスクに進む前に、検出プロセスが完了するまで待ちます。検出プロセスの完了までには数分かかる場合があります。

タスク 5: 検出プロセスを確認する

環境内の管理対象ノードの数によっては、確認が完了するまで数分かかります。

1 [Discovery アプリケーション] ウィンドウに以下のメッセージが表示される (Discovery アプリケーションが正常に終了した) ことを確認します。

```
Discovery started on node: <ノード>
Finished running the Discovery application
```

Discovery アプリケーションが正常に終了しなかった場合は、アプリケーション ウィンドウに以下のメッセージが表示されます。

```
Failed to run discovery on node <ノード>
```

検出プロセスのトラブルシューティングの方法については、91 ページの「検出プロセスのトラブルシューティング」を参照してください。

2 各管理対象ノード のメッセージ ブラウザに以下のメッセージが表示されることを確認します。

```
WASSPI-602 - Updating the WLSSPI configuration data with discovered
information
```

環境内の管理対象ノードの数によっては、すべての管理対象ノードについてこれらのメッセージが表示されるのに数分かかります。

3 Service Navigator がすでに実行中である場合、**[ファイル]** → **[設定の再ロード]** を選択します。[サービス] ツリーで、[Application] ノードを開き、WebLogic サービスを探します。

4 **Config WLSSPI** アプリケーションを実行して、検出プロセスによって設定されたプロパティを確認します。設定エディタの詳細については、174 ページの「Config WLSSPI」を参照してください。

タスク 6: ノードを WebLogic ノード グループに追加する

WLS-SPI は、適切なテンプレート グループがすでに指定された 1 つのノード グループ (WebLogic) を自動的に作成します。WebLogic Server を実行するノードをこのノード グループに配置します。

1 OVO コンソールから [登録ノード グループ] と [登録ノード] の両方を開き、WebLogic ノード グループと管理対象ノードを (並べて) 表示します。

2 WebLogic Server を実行している管理対象ノードを WebLogic ノード グループにドラッグ & ドロップします。

タスク 7: WLS-SPI テンプレートを分配する

テンプレートを管理対象ノードに分配します。

1 [登録ノード グループ] ウィンドウを開き、WebLogic ノード グループを強調表示します。

2 [アクション] メニューから、**[エージェント]** → **[ソフトウェアと設定のインストール / 更新]** を選択します。

3 [ターゲット ノード] セクションで **[ノード リスト中で要アップデートのノード]** ラジオ ボタンを選択します。

4 [ソフトウェアと設定のインストール / 更新] ウィンドウで **[テンプレート]** チェックボックスをオンにします。

5 **[強制アップデート]** を選択します。

6 **[OK]** をクリックします。

メッセージ ブラウザに次のメッセージが表示されます。

次の設定情報は正常に分配されました。テンプレート

これで WLS-SPI テンプレートが WebLogic ノード グループに分配されました。WLS-SPI のモニターは、特定の収集間隔に従って実行を開始できます。

HP OpenView Reporter を使用する場合は、WLS-SPI を Reporter に統合して情報をさらに整理して表示する WebLogic Server のレポートを生成する方法について、第 5 章、「WLS-SPI で HP OpenView のレポート作成 / グラフ作成の製品を使用」を参照してください。

タスク 8: 設定を完了する

設定が完了する前に、管理サーバーと管理対象ノードの設定情報を更新する必要があります。以下のいずれかを選択できます。

- 自動設定テンプレートが実行されるまで 10 分待つ
- Config WLSSPI アプリケーション (管理サーバーと管理対象ノードの設定情報を更新する) を実行する。詳細については、174 ページの「Config WLSSPI」を参照してください。

タスク 9: WLS-SPI 設定を確認する

Verify アプリケーションを実行して WLS-SPI が正常にインストールおよび設定されていることを確認します (このアプリケーションの詳細については 182 ページの「Verify」を参照してください)。

1 OVO コンソールで、[登録ノード グループ] ウィンドウの WebLogic ノード グループを選択します。

2 [ウィンドウ] メニューから **[登録アプリケーション]** を選択します。

3 [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** を選択し、**[Verify]** をダブルクリックます。

WLS-SPI のその他の設定

WebLogic Server の設定とアプリケーションの要件に基づき、他の設定プロパティの設定、または他のコンポーネントのインストールおよび設定、あるいはその両方を WLS-SPI の設定の最後に行う必要があります。その他のプロパティの設定およびその他のコンポーネントの設定は、環境により異なります。

条件付きのプロパティ

WebLogic Server の設定とアプリケーションの要件によっては、1 つまたは複数の条件付きプロパティを設定する必要が生じる場合があります。条件に合致する場合は、条件の右にリストされているプロパティを設定します (これらのプロパティは検出プロセスで自動的には検出されません)。プロパティの詳細については、152 ページの「設定プロパティ」を参照してください。

表 1　　条件付きのプロパティ

条件	設定するプロパティ
WebLogic Server バージョン 7.x または 8.1 を実行する。	VERSION
システム上の WebLogic Server 間で同じ名前を共有する。検出プロセスは ALIAS プロパティを自動的に設定しますが、この値はメッセージ、レポート、およびグラフで使用される名前であるため、編集したほうがよい場合があります。	ALIAS
OVO コンソールから Start/Stop WebLogic アプリケーションを使用して WebLogic Server を起動または停止する。	START_CMD、STOP_CMD、および USER
OVO コンソールから Start WLS Console アプリケーションを使用して WebLogic Administration Console を起動する。	ADMIN_HOST および ADMIN_PORT
JMX Metric Builder アプリケーションの MBean 情報を利用して UDM を作成する。	COLLECT_METADATA
OVO コンソールから View Graphs アプリケーションを使用する (Performance Manager をインストールする必要があります)。	GRAPH_URL
WebLogic Server が仮想 IP アドレスに設定されている、リモート ノード上に設定されている、あるいはそのノードのプライマリ IP アドレスを使用していない。	ADDRESS
ログ ファイルの絶対パス名が WebLogic に設定されていない。	LOGFILE
絶対ログ ファイル名が WebLogic Server のバージョン 6.1 に設定されていない、または WebLogic Server のインストール ディレクトリと起動ディレクトリが異なる場所にある。	LAUNCH_DIR

条件付きプロパティの設定

1 OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。

2 [ウィンドウ] メニューから **[登録アプリケーション]** を選択します。

3 [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[Config WLSSPI]** を選択します。
(上記のように表示されない場合は、**[マップ]** → **[再ロード]** を選択します。)

4 [Introduction] ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、Discovery アプリケーションについての簡単な情報が記載されています。

[Next] を選択します。

5 2 つ目の [Introduction] ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、検出プロセスが機能するために必要と思われるプロパティについての情報が表示されます。

この情報を読んでから **[Next]** を選択します。

6 設定エディタで、プロパティを設定します。設定エディタの使用方法については、付録 B「設定」を参照してください。

7 **[Next]** を選択することによってあらゆる変更を保存し、エディタを終了します。

8 [Confirm Operation] ウィンドウが表示されます。**[OK]** を選択します。

[Cancel] を選択して設定に変更を加えた場合、それらの変更は管理サーバー上の設定に残ります。選択した管理対象ノードの設定に変更を加えるには、[登録ノード] ウィンドウでそれらのノードを選択し、Config WLSSPI アプリケーションを起動し、設定エディタで **[Next]** を選択してから **[OK]** を選択します。

UNIX 管理対象ノードでの非 root HTTPS エージェントの設定 (OVO 8.x のみ)

UNIX 管理対象ノードで非 root HTTPS エージェントを実行する場合、またはその予定の場合、以下の手順を実行します (OVO 8.x のみ)。

OS に対応した Sudo ソフトウェア パッケージを UNIX 管理対象ノードにインストールする必要があります。Sudo は、**http://www.sudo.ws** で入手可能な無償ソフトウェアです。各 OS に対応したソフトウェア パッケージは、ダウンロード ページ (**http://www.sudo.ws/sudo/download.html**) の下部から入手できます。インストールの詳細については、リリース ノートを参照してください。

1 HTTPS エージェントを非 root ユーザーに切り替えます。詳細については、『HTTPS エージェント コンセプトと設定ガイド』を参照してください。このドキュメントは、**http://h50146.www5.hp.com/doc/manual/openview/** で製品名 Operations for UNIX (OVOU)、バージョン 8.x を選択してダウンロードできます。

2 管理対象ノードで OV_SUDO 変数を設定します。root として、または OVO エージェント ユーザー権限を使用して、以下の手順を実行します。

   a OVO エージェントをすべて停止します。以下のコマンドを実行します。

   ```
   opcagt -kill
   ```

   b OV_SUDO 変数を設定します。以下のコマンドを実行します。

   ```
   ovconfchg -ns ctrl.sudo -set OV_SUDO <sudo_program>
   ```

   <sudo_program> は、絶対パス名を含む sudo のインストール先 (`/usr/local/bin/sudo` など) です。

c OVO エージェントを起動します。以下のコマンドを実行します。

opcagt -start

d OV_SUDO が設定されていることを確認します。以下のコマンドを実行します。

ovdeploy -cmd set | grep SUDO

以下のように表示されます。

OV_SUDO=*<sudo_program>*

3 管理対象ノードを設定します。非 root HTTPS エージェント環境で SPI を正常に実行するには、以下の手順を実行する必要があります。

a OVO 管理サーバーから、管理対象ノードにアクション、コマンド、およびモニターを配布します。

b [登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。

c [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[Init Non-Root]** を選択します。

4 sudo とともにインストールされる visudo エディタを使用して /etc/sudoers ファイルを編集します。

a 管理対象ノードで、root としてログオンします。

b /*<SPI_Config_DIR>*/wasspi_wls_sudoers ファイルを開きます。

<SPI_Config_DIR> は、管理対象ノードの SPI の設定ファイルの場所です。詳細については、139 ページの「管理対象ノードのファイルの位置」を参照してください。

c 別のウィンドウで visudo コマンドを実行します (たとえば、**/usr/local/sbin/visudo** と入力します)。

d wasspi_wls_sudoers ファイルの次の行をコピーし、sudoers ファイルに追加します。

```
Cmnd_Alias WLSSPI_ADMN = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl -S wasspi_wls_admin *
Cmnd_Alias WLSSPI_COLL = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl -S wasspi_wls_ca *
Cmnd_Alias WLSSPI_DISC = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl wasspi_wls_discovery.pl
Cmnd_Alias WLSSPI_LFEN = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl -S wasspi_wls_le *
Cmnd_Alias WLSSPI_SHSC = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl -S shs_collector.pl *

Cmnd_Alias WLSSPI_ADMNP = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl -S \
/var/opt/OV/bin/instrumentation/wasspi_wls_admin *
Cmnd_Alias WLSSPI_COLLP = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl -S \
/var/opt/OV/bin/instrumentation/wasspi_wls_ca *
Cmnd_Alias WLSSPI_DISCP = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl \
/var/opt/OV/bin/instrumentation/wasspi_wls_discovery.pl
Cmnd_Alias WLSSPI_LFENP = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl -S \
/var/opt/OV/bin/instrumentation/wasspi_wls_le *
Cmnd_Alias WLSSPI_SHSCP = /opt/OV/nonOV/perl/a/bin/perl -S \
/var/opt/OV/bin/instrumentation/shs_collector.pl *
```

```
<OV_Agent_username> <nodename> = NOPASSWD: WLSSPI_ADMN, WLSSPI_COLL, \
WLSSPI_DISC, WLSSPI_LFEN, WLSSPI_SHSC, WLSSPI_ADMNP, WLSSPI_COLLP, \
WLSSPI_DISCP, WLSSPI_LFENP, WLSSPI_SHSCP
```

<OV_Agent_username> は OVO エージェントのユーザー アカウント、*<nodename>* は管理対象ノードの名前です。

e ファイルを保存し、visudo エディタを終了します。**:wq** と入力します。

➤ エージェント ユーザーを切り替えるたびにステップ 3 と 4 を実行します。

4 WLS-SPI の使用方法とカスタマイズ方法

Smart Plug-in for BEA WebLogic Server (WLS-SPI) について十分に理解できるようになったので、どのテンプレートが最も有用であるかと、どのテンプレートを変更したいかを判断できるでしょう。この章では、テンプレートについてさらに詳しく説明し、またそれらのテンプレートの変更方法について説明します。

以下のトピックを取り上げます。

- テンプレートの基本的なカスタマイズ
- テンプレートの高度なカスタマイズ
- WLS-SPI のテンプレートの再インストール
- テンプレート / アプリケーションを使用して注釈レポートとグラフを表示する方法
- サポートされていないプラットフォーム上の WebLogic を監視する方法
- ライセンス数に対する WLS-SPI ノードの確認

ユーザー定義メトリック (UDM) を作成する場合、詳細については『HP OpenView Smart Plug-in User Defined Metrics User Guide』を参照してください。

テンプレートの基本的なカスタマイズ

WLS-SPI の使用を開始した後に、特定の WLS-SPI テンプレートの一部を変更する必要が生じる場合があります。このセクションでは、しきい値の変更 (メトリック テンプレートを変更することによる)、または警告通知の生成の変更などの基本的なカスタマイズについて説明します。

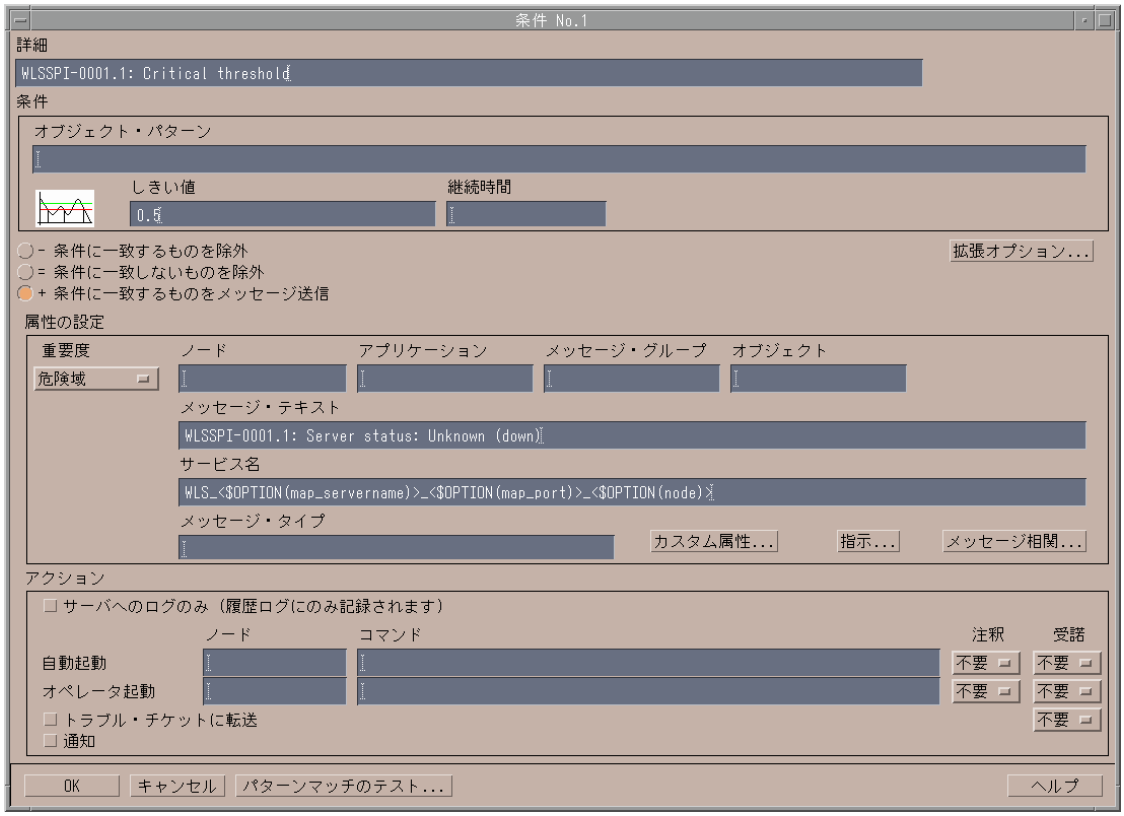
➤ デフォルトのテンプレートをそのまま残しておくため、デフォルト テンプレートのコピーを作成します。コピーを作成しておかないと、次のバージョンにアップグレードする際にカスタマイズは上書きされてしまいます。

メトリック テンプレートの変更

以下のステップに従って、多くのメトリック属性は、WebLogic Server のすべての監視対象のインスタンスについて変更できます。

1. **[メッセージ ソースのテンプレート]** ウィンドウを開きます。
2. **[SPI for WebLogic Server]** テンプレート グループを開きます。
3. **[WLSSPI-Metrics]** テンプレート グループを開きます。
4. 必要なメトリックをダブルクリックして、[メッセージ条件と除外条件] ウィンドウを開きます。

5 変更したい条件をダブルクリックします (通常は 1 つだけです)。[条件] ウィンドウが表示されます。



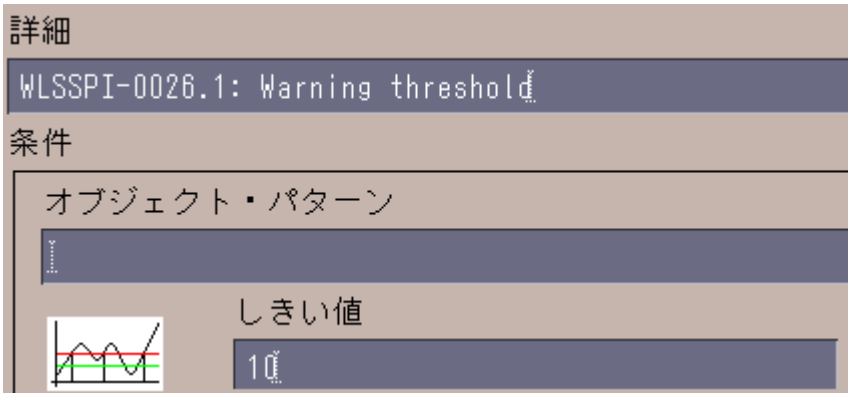
以下の属性を変更できます。

- **[しきい値]**。その値を超えた場合に、問題が発生しようとしているか、またはすでに発生していることを示す、メトリック データの値を入力します。
- **[継続時間]**。警告通知が生成される前に、メトリックに対する入力データ値が設定されたしきい値の超過が許容される時間を指定します。
- **[重要度]**。特定のオペレータの環境における重要性に基づいて、OVO 管理者によってメッセージに割り当てられたレベル。ボタンをクリックして希望する重要度設定を選択します。
- **[メッセージ テキスト]**。管理オブジェクト、管理オブジェクトに関連するイベント、または管理オブジェクトの問題についての、構造化された、判読可能な情報。メッセージ内の、山カッコ <> で囲まれていて $ で始まるパラメータは、いずれも変更しないよう注意してください。
- **[アクション]**。メッセージ ソース テンプレートまたは条件によって割り当てられた、メッセージに対する応答。この応答は自動の場合とオペレータが起動する場合があります。このセクションでは、Performance Manager のグラフやレポートを生成したり、カスタム プログラムを追加したりできます。

  [自動起動] アクション。着信イベントまたはメッセージによって実行されるアクション。オペレータの介入は不要です。WLS-SPI とともに配信された自動起動アクションによってスナップショット レポートが生成されます。そこにはしきい値を超えたことによってアクションが実行された時点のデータ値が示されます。レポートは、メッセージの注釈に表示できます。

[オペレータ起動] アクション。特定のメッセージに応答して修復措置または予防措置をとるのに使用されるアクション。自動アクションとは異なり、これらのアクションはオペレータがボタンをクリックして初めて実行されます。WLS-SPI に付属のオペレータ起動コマンドを使用すると、しきい値を超えたためメッセージを生成したメトリックのグラフを、関連する他のメトリック値とともに表示できるようになります (メッセージの詳細ウィンドウの中の [開始] ボタンをクリックします)。

以下の [条件] ウィンドウの図は、メトリック WLSSPI-0026 用の 10 というしきい値の設定を示しています。このメトリックは、クライアントが利用可能な EJB (Enterprise Java Bean) を待たなければならない、1 分あたりの回数の合計を監視します。値が 10 を超えると、クライアントにとってのサーバーの応答時間に影響するようになるため警告通知 (警告メッセージ) が生成されます。



6 **[OK]** をクリックします。

7 46 ページの「タスク 7: WLS-SPI テンプレートを分配する」の説明に従って、変更されたテンプレートを再分配します。

警告通知生成の変更

警告通知は [しきい値のモニタの変更] ウィンドウの [メッセージの生成] の設定によって、1 回または複数回生成されます。

メッセージの生成を変更するには、以下の手順を実行します。

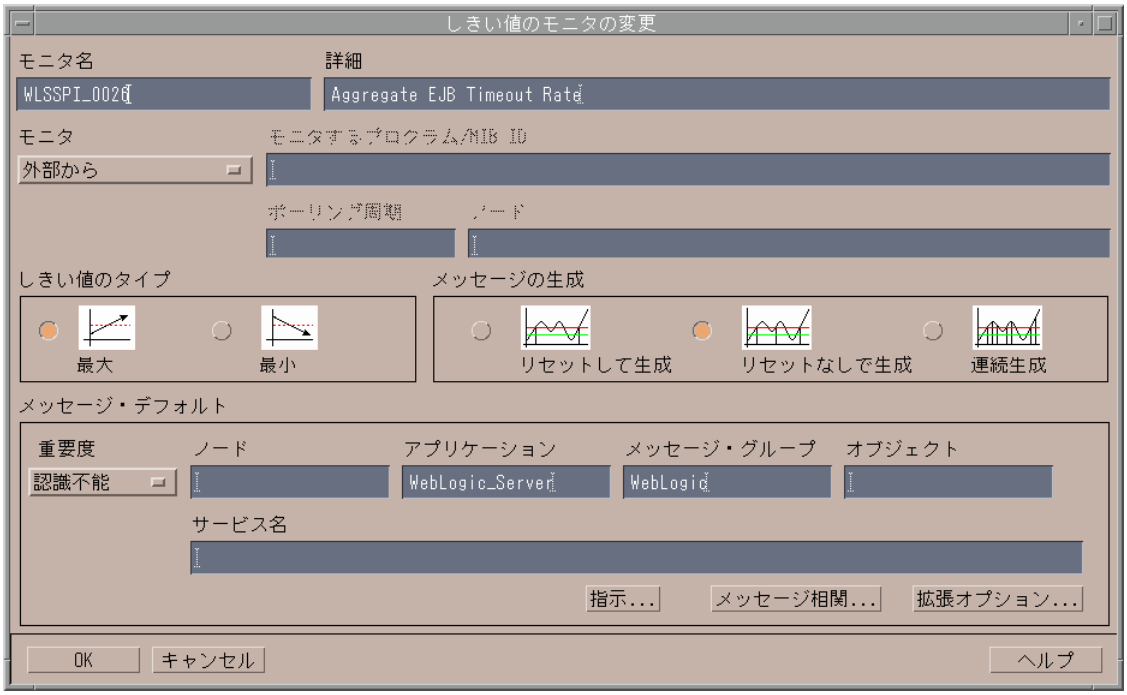
1 **[メッセージ ソースのテンプレート]** ウィンドウを開きます。

2 **[SPI for WebLogic Server]** テンプレート グループを開きます。

3 **[WLSSPI-Metrics]** テンプレート グループを開きます。

4 テンプレートを選択します。

5 **[変更]** ボタンをクリックします。[しきい値のモニタの変更] ウィンドウが表示されます。



6 メッセージの生成の変更 :

- **[リセットして生成]** : しきい値を超えると、警告通知が 1 回生成されます。同時にリセットしきい値が有効になります。リセットしきい値を超えたときだけ、元のしきい値が再び有効になります。そして再びしきい値を超えると、別の警告通知が生成され、プロセスは初めからやり直しになります。
- **[リセットなしで生成]**: 監視しきい値を超えると 1 回警告通知が生成されます。メトリック値がしきい値を超えなくなると警告通知は自動的にリセットされ、しきい値を超えた時点で再び生成されます。
- **[連続生成]**: メトリック値が収集され、しきい値を超えるたびにメッセージが送信され、警告通知が生成されます。

7 **[OK]** をクリックします。

8 46 ページの「タスク 7: WLS-SPI テンプレートを分配する」の説明に従って、変更されたテンプレートを再分配します。

テンプレートの高度なカスタマイズ

この項で示すテンプレート変更は、デフォルトのテンプレート グループをコピーし少数の設定をカスタマイズするものから、テンプレートのコマンド行内でメトリックのグループ全体を削除するものにまで及んでいます。この項で述べる変更はすべて、単純なものも複雑なものも、WLS-SPI メトリックについて多少とも高度な知識を必要とするため、高度な変更と見なされます。

カスタマイズするメトリックの選択

どのメトリックをカスタマイズし、グループ内のどのテンプレートを使用するかを決定します。次に以下を実行します。

1 **[メッセージ ソースのテンプレート]** ウィンドウを開きます。

2 使用するグループを強調表示し、**[コピー ...]** ボタンを選択します。

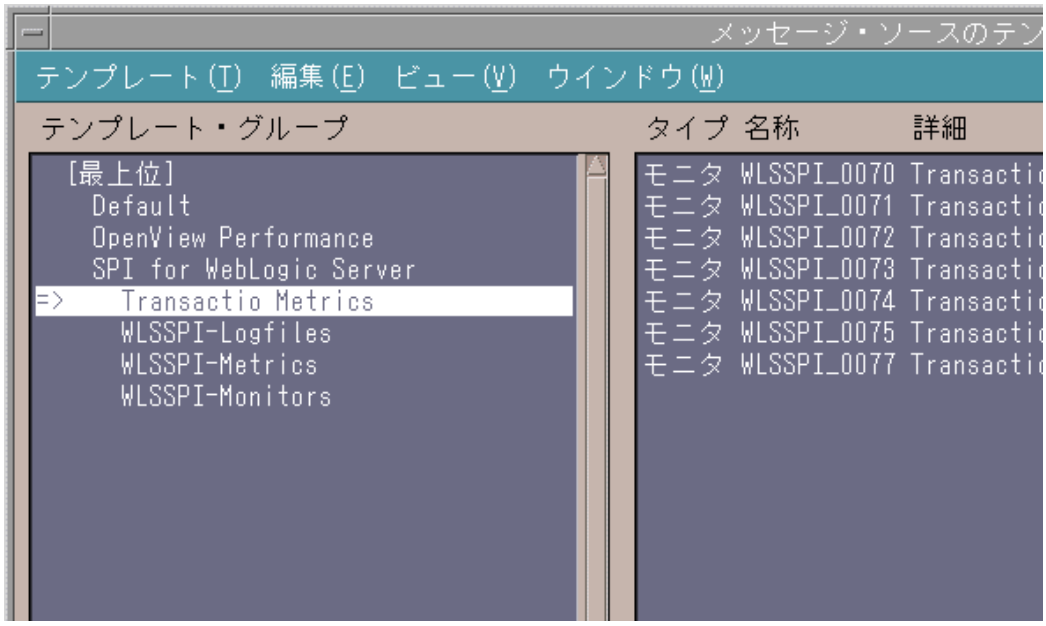
3 名前を変更してグループを保存します。

4 名前を変更したテンプレート グループ内で、元の各テンプレートをコピーし、名前を変更します。

5 名前を変更したテンプレート グループ内の元のテンプレートを削除します。

6 必要に応じて、新しいグループ内の名前を変更したテンプレートをカスタマイズします。

新しいテンプレート グループを作成することによって、元のデフォルト テンプレートからカスタム テンプレートを分離することができます。それらをコピーして新しいグループ内に配置できます。



パラメータを用いて WLS-SPI コレクタ / アナライザのコマンドを使用

`wasspi_wls_ca` コマンドは、どのコレクタ テンプレートでも使用され、収集間隔に基づいた名前が付いています。OVO の [モニタするプログラム /MIB ID] テキスト ボックスで、各コレクタ テンプレート内のデフォルトのコマンド行パラメータを表示できます。

WebLogic Server コマンド パラメータの使用方法

WLS-SPI のデータ収集は、wasspi_wls_ca コマンドで開始します。このコマンドには、以下の表に示すその他のパラメータを添えることができます。

パラメータ	機能	構文
-c	**必須** (collector)。コレクタ テンプレートの名前を指定します。表示されるコレクタ テンプレートの名前と一致させる必要があります。	-c *<collector_template_name>* 例：-c WLSSPI-61-05min
-e	(exclude)。特定のサーバーを除外できます。このオプションは、-i オプションとともには使用できません。	-e *<server_name>* 例：-e server2,server4
-i	(include)。監視する特定のサーバーを一覧表示できます。このオプションは、-e オプションとともには使用できません。	-i *<server_name>* 例：-i server1,server3
-m	(metric)。データを収集する対象となるメトリックの番号または番号の範囲を指定します。	-m *<metric_number|metric_number_range>* 例：-m 1,3-5,9-11,15
-matchver	(match version)。監視する特定の WebLogic Server のバージョンを指定します。このオプションは、-minver オプションまたは -maxver オプションとともには使用できません。一致するバージョンが見つからなかった場合、このコマンドは実行されません。	-matchver *<version_number>* 例：-matchver 6.1
-maxver	(maximum version)。監視する最高の WebLogic Server のバージョンを指定します。バージョンの範囲を指定するには、-minver とともに使用します。バージョンが何も見つからなかった場合、このコマンドは実行されません。	-maxver *<version_number>* 例： -maxver 7
-minver	(minimum version)。監視する最低の WebLogic Server のバージョンを指定します。バージョンの範囲を指定するには、-maxver とともに使用します。バージョンが何も見つからなかった場合、このコマンドは実行されません。	-minver *<version_number>* 例： -minver 7
-r	(report)。指定したメトリックの ASCII レポートを生成します。	-r
-t	(tag)。既存のコレクタ テンプレートにプレフィックスを付け、メトリック番号を指定することによって新しいテンプレート グループを作成します。	-t *<prefix>*- 例：wasspi_wls_ca -c WLSSPI-61-05min -m 220-223 **-t DEV-**

パラメータ	機能	構文
-x	以下のプロパティ / 値を指定できます。	-x *<property>=<property_value>*
	alarm: off にすると、メトリック モニター テンプレートに設定されているすべての警告通知条件を無効にします。	-x alarm=off
	prefix: デフォルト : JMXUDM_。メトリック ID のプレフィックスを指定します。	-x prefix=SALES_
	print: on にすると、設定した警告通知やログ作成に加えて、メトリック名、インスタンス名、およびメトリック値を STDOUT に出力します。	-x print=on
	log: off にすると、グラフ作成やレポート作成の機能が停止します。	-x log=off

構文例

- すべての設定済みサーバーから特定のデータを収集する場合

  ```
  wasspi_wls_ca -c WLSSPI-61-05min -m 10-14,25,26
  ```

- 特定のサーバーからのみデータを収集する場合

  ```
  wasspi_wls_ca -c STAGE-WLSSPI-61-05min -m 245,246,26
  -i server1,server2
  ```

- 特定のサーバーからのデータを収集しない場合

  ```
  wasspi_wls_ca -c STAGE-WLSSPI-61-15min -m 220-225
  -e server1,server2
  ```

すべてのメトリックの収集間隔の変更

スケジュール設定されたすべてのメトリックの収集間隔を変更するには、該当するコレクタ テンプレートの [ポーリング周期] を変更します。たとえば、WLSSPI-81-05min コレクタ テンプレートについて、デフォルト メトリックの収集を 5 分から 10 分に変更するには、以下の手順を実行します。

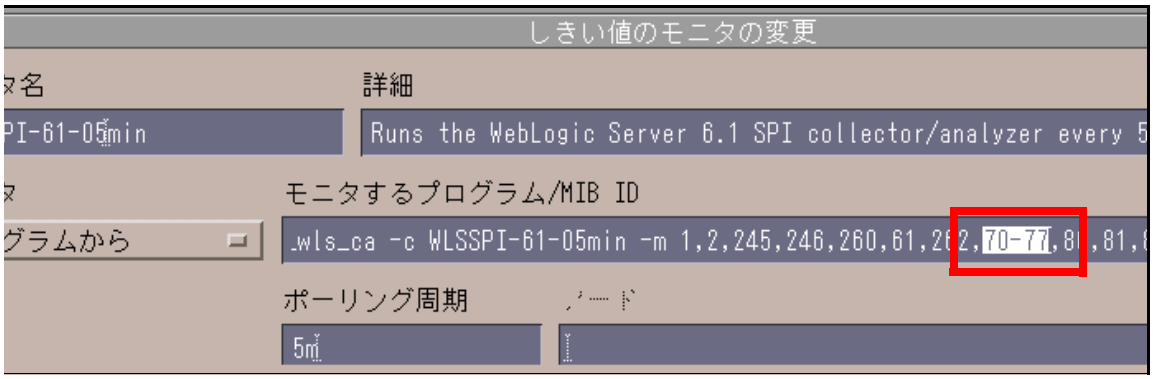
1. **[メッセージ ソースのテンプレート]** ウィンドウを選択します。
2. テンプレート グループ **[SPI for WebLogic Server]** を選択し、**[WLSSPI-Monitors]** を開きます。
3. コレクタ テンプレート **[WLSSPI-81-05min]** を選択します。
4. **[変更 ...]** ボタンをクリックして、[モニタ名] を **`WLSSPI-81-10min`** に変更します。
5. [ポーリング周期] を 5 分から 10 分に変更します。
6. 以下のようにコマンド行の `-c` パラメータを変更することによって、新しいテンプレート名 (WLSSPI-81-10min) を反映させます。

   ```
   wasspi_wls_ca -c WLSSPI-81-10min....
   ```

7. 新しいテンプレートを分配します (46 ページの「タスク 7: WLS-SPI テンプレートを分配する」の説明に従います)。

選択したメトリックの収集間隔の変更

選択したメトリックの収集間隔を変更するには、該当するコレクタ テンプレートをコピーし、新しい間隔を反映した名前に変更した後、変更するメトリック以外のすべてのメトリックを削除します。新しい間隔を設定します。元のテンプレートを編集することによって、変更するメトリックを削除します。たとえば、メトリック 70-77 の収集間隔を 10 分に変更するには、以下の手順を実行します。



1 **[メッセージ ソースのテンプレート]** ウィンドウを開きます。

2 テンプレート グループ **[SPI for WebLogic Server]** を選択し、**[WLSSPI-Monitors]** を開きます。

3 コレクタ テンプレート **[WLSSPI-61-05min]** を選択します。

4 **[コピー ...]** ボタンをクリックして、モニター名を WLSSPI-61-10min に変更します。

5 [モニタするプログラム /MIB ID] テキスト ボックスで、-m except 70-77 の後ろのすべてのメトリックを削除します。

6 [ポーリング周期] を 10 分に変更します。

7 -c の後のエントリを WLSSPI-61-10min に変更します。

8 **[OK]** ボタンをクリックします。

9 **[WLSSPI-61-5min]** テンプレートを選択します。

10 [モニタするプログラム /MIB ID] テキスト ボックスから [70-77] を削除します。

11 46 ページの「タスク 7: WLS-SPI テンプレートを分配する」の説明に従って、変更されたテンプレートを再分配します。

個々のサーバーのしきい値のカスタマイズ

しきい値は必要に応じてそれぞれカスタマイズしてください。たとえば、SERVER_1 についてのメトリック 0012 のしきい値は 20 に設定するが、他のすべてのサーバーについてはしきい値を 10 にしたいといった場合があります。そうするには、既存の条件をコピーしそれを変更することによって例外として機能するようにします。以下の手順を実行します。

1 カスタマイズするメトリックをダブルクリックして開きます (たとえば WLSSPI-0012)。

[メッセージ条件と除外条件] ウィンドウが表示されます。

2 必要な条件を選択し、**[コピー ...]** ボタンをクリックしてその条件のコピーを作成します。

3 条件に **`WLSSPI-0012.2`** という名前を付けます。

4 **[オブジェクト パターン]** フィールドで、パターン マッチに使用したい文字を入力します (この例では SERVER_1)。たとえば、名前に特定の文字列を含むすべてのサーバーと一致させるには、[オブジェクト パターン] フィールドにその文字列を入力します (パターン マッチの構文については、OVO のオンライン ヘルプまたは『システム管理リファレンス ガイド』を参照してください)。

5 **[パターンマッチのテスト]** ボタンをクリックしてパターンをテストし、パターン マッチを確認します (最初に一致ファイルを設定する必要があります)。

6 [しきい値] フィールドの値を 10 から 20 に変更します。

タグ付きのカスタム テンプレートの作成

高度なカスタマイズのためのもう 1 つのオプションは、タグ オプション (コマンド行上の -t) です。これによって、名前にタグを付けてカスタマイズしたテンプレートをコレクタ / アナライザで認識できます。このオプションを使用すると、WebLogic Server の特定の設定に関する条件を定義したテンプレートを複数セット持てるという柔軟性が加わります。

複数のノードをいくつかのグループで管理するときにこのオプションを使うと、特にタグを付けたテンプレートを、元の設定とは明確に分けて作成できます。この場合、テンプレートのコピーを作成し、それの名前をタグ付きの名前に変更し、タグ付きの名前を選択するようコレクタ テンプレートを修正し、それをさまざまなグループに割り当てます。

たとえば、テンプレートのグループを作成し、CLIENT01 が含まれるよう各テンプレート名を変更できます。メトリック モニター テンプレートの名前は、たとえば CLIENT01-WLSSPI_0012 とします (メトリック番号はそのまま使用する必要があります)。コレクタ テンプレートの名前は、たとえば FIRST_CLIENT-61-05min とします。次に、SECOND_CLIENT 用に別のグループを設定し、名前に CLIENT02 が含まれるようそれらすべてのテンプレートを変更します。

新しいテンプレート グループを作成するには

1 元のテンプレート グループをコピーします。[メッセージ ソースのテンプレート] ウィンドウでグループを選択し、**[コピー ...]** ボタンをクリックします。

2 新しいモニターとコレクタ テンプレートをどう特定したいかに基づいて、新しいグループに名前を付けます。たとえば、テンプレート名に CLIENT01 を含んでいる場合は、新しいテンプレート グループ名にもそれを含めます。

3 [メッセージ ソースのテンプレート] ウィンドウで新しいテンプレート グループを展開してすべてのテンプレートを表示し、使用する各テンプレートを選択して **[コピー ...]** ボタンをクリックし、命名方式に従って名前を変更します。

   - グループ内の新しいメトリック モニター テンプレートに与える名前は、新しい名前の後に元のメトリック番号を付けたものがよいでしょう。たとえば WLSSPI_0001 のコピーには、CLIENT01-WLSSPI_0001 と命名します。
   - 新しいコレクタ モニター テンプレートに指定する名前にも、識別用の名前を含めます。また、コマンド行に -t プロパティを挿入して、新しいグループ用にスケジュール設定した収集も変更するとよいでしょう。たとえば以下のようにします。

     ```
     wasspi_wls_ca -c FIRST_CLIENT-61-10min -m 16
     -t CLIENT01-
     ```

     この場合、コピーしたコレクタ テンプレートは、以下の名前に変更されています。
     FIRST_CLIENT-61-10min

4 新しいグループから元のテンプレートをすべて削除します。

テンプレート変数

WLS-SPI テンプレートでは、以下の変数が使用されます。テンプレートを独自に作成する場合、これらの変数を使用できます。

名前	説明
instancename	マルチインスタンス メトリックのためにメトリックのレポートを生成するインスタンス。 例 : medRecServer_MedRecServer_wl_management_internal2_com.bea.wli.bpm.runtime.JwfServlet_20
map_port	「port」を参照してください。この変数は、今後のリリースで廃止される可能性があります。
map_servername	スペースを下線 (「_」) で置き換えたアプリケーション サーバー名。スペースを使用できないサービス マップ キーで使用します。 例 : my_server
node	アプリケーション サーバーを実行するノード。 例 : moo1.hp.com
port	アプリケーション サーバーがリスンするポート。PORT 設定プロパティに相当します。 例 : 9001
servername	アプリケーション サーバー名。NAME 設定プロパティに相当します。 例 : my server

WLS-SPI のテンプレートの再インストール

WLS-SPI のテンプレートが OVO にインストールされると、swinstall が実行された時点で以下に示すコマンドが自動的にそれらのテンプレートをアップロードします。以前のインストールで行ったカスタマイズされたテンプレートの設定があれば、すべて上書きされます。

元々インストールされていたデフォルトの SPI for BEA WebLogic Server テンプレート グループを復元するには、先に現在のテンプレートをすべて削除してから、以下のコマンドを実行します。

swinstall によって実行されるスクリプト

OVO のバージョン	スクリプト
6.x 以降	/opt/OV/bin/OpC/opccfgupld -silent[a] -replace -subentity /var/opt/OV/share/tmp/OpC_appl/wasspi/wls_set
5.x	/opt/OV/bin/OpC/opccfgupld -silent -replace -subentity -index /var/opt/OV/share/tmp/OpC_appl/wasspi/wls/wls_ito5_set/C/wls_set.idx /var/opt/OV/share/tmp/OpC_appl/wasspi/wls/wls_ito5_set

a. -silent オプションの代わりに、-verbose オプションを使用することもできます。

テンプレート / アプリケーションを使用して注釈レポートとグラフを表示する方法

一部のテンプレートでは、しきい値の違反やエラー条件に付属してアクションが定義されているので、自動的にレポートがメッセージの注釈に表示されます。それらのレポートは、警告通知が行われた時点のあたりでサーバーから収集したデータ値のスナップショットです。

その他のテンプレートには、オペレータ アクションが対応付けられているので、これによってグラフを生成できます。

この項で説明するレポートと OpenView Reporter で生成されるレポートとを混同しないよう注意してください。後者は、管理用のプレゼンテーション形式での Web ページとして生成される、より統合的な履歴データを示すものです。

データには、以下のようにしてアクセスできます。

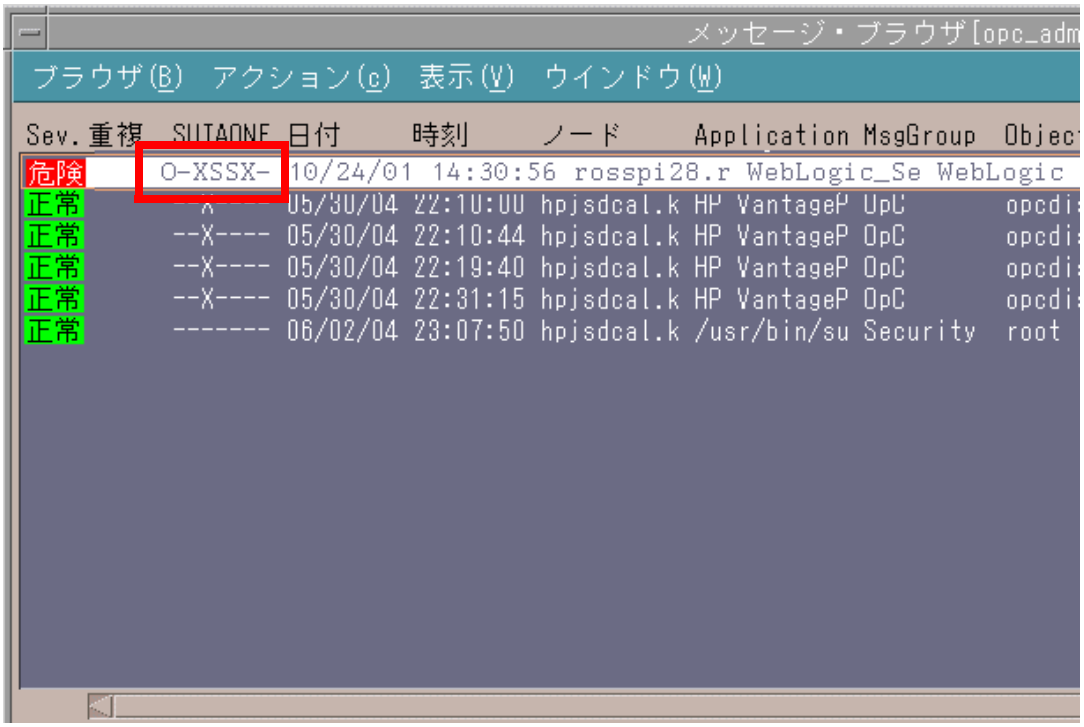
- メッセージの詳細を表示するには、OVO メッセージ ブラウザでメッセージをダブルクリックするか、単にメッセージを選択して [注釈] をクリックします。**[注釈]** ボタンを選択すると、簡単に注釈が表示できます。そこで、1 つのサーバーに関するデータ値を示すレポートを参照できます。
- レポートを表示するには、[登録ノード] と [登録アプリケーション] の両ウィンドウを開きます。続けてアプリケ―ション ウィンドウ **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Reports]** を開きます。ノードを選択し、必要な WLSSPI メトリック レポート上にドラッグします。これらのレポートには、ノード上のすべてのサーバー データが表示されます。
- グラフを表示するには、[登録ノード] と [登録アプリケーション] の両ウィンドウを開きます。続けてアプリケ―ション ウィンドウ **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** を開きます。View Graphs アプリケーションにノードをドラッグすると Web ブラウザが起動され、HP OpenView Performance Manager (別途購入する必要があります) で利用可能なグラフ作成機能が表示されます。

自動アクション レポート

多くのメトリックは、自動アクション レポートを生成します。それらのレポートは、OVO で警告通知が発行されると直ちに生成されます。

レポートが生成されたことを知る方法

OVO から自動アクション レポートを実行すると、追加データについてのクエリがサーバーに送信されます。メッセージ ブラウザで SUIAONE 列を表示するよう設定してある場合、「A」列に「S」が現れます (図を参照)。これは、生成されたレポートが [メッセージの詳細] の [注釈] 領域に表示できるということを示しています。



レポートの表示方法

レポートを表示するには、メッセージ ブラウザの **[注釈 ...]** ボタンをクリックします。列の説明に、さらに詳しい内容があります。

自動生成レポートと手動生成レポートの違い

自動アクション レポートは、警告通知が行われた直後のシステムの状態を示します。他方、手動でレポートを生成すると、システムの現在の状態がわかります。生成するには、管理対象ノードを [登録ノード] から [登録アプリケーション] の希望のレポートにドラッグします (登録アプリケ―ションのレポートの詳細については、次の項を参照してください)。

登録アプリケ―ションのレポートを使用すると、自動アクション レポートに似たレポートを手動で生成できます。これらのレポートは、管理対象ノード上にある WebLogic Server のすべてのインスタンスについてのデータを表示しているという点で異なります。自動アクション レポートは、しきい値を超えた WebLogic Server の単一のインスタンスのデータを表示しています。

登録アプリケーションのレポート

登録アプリケーションのレポートは、管理対象ノード上で設定された WebLogic Server のすべてのインスタンスについて生成されます。この点が、WebLogic Server の単一のインスタンスについて生成される自動アクション レポートとは対照的です。登録アプリケーションから生成されたレポートは、管理対象ノード上の WebLogic Server の現在の状態を反映しています。

OVO でレポートを生成するには、単に [登録ノード] ウィンドウから管理対象ノードを [登録アプリケーション] ウィンドウの希望のレポートにドラッグするだけです。

以下のレポートがメッセージの詳細の [注釈] 領域に表示されます。

レポートのサンプル

以下の例は、WLS-SPI のレポート形式を示しています。このレポートは自動的に生成されます (自動アクション レポート)。

メトリック B-011 のレポート

```
                        Report for Application Server_01
                            Oct 16, 2001 3:22:20 PM
                          Metric B011_ExQThrdUtilPct

Execute Queues                    Idle Threads    Waiting Requests
--------------                    -------------   ----------------
_weblogic_admin_html_queue         2              0
_default                          11              0
_weblogic_admin_rmi_queue         10              0


Execute Queues                     Longest Waiting Request
--------------                     -----------------------
_weblogic_admin_html_queue        Oct 16, 2001 3:22:20 PM
_default                          Oct 16, 2001 3:22:20 PM
_weblogic_admin_rmi_queue         Oct 16, 2001 3:22:20 PM

Execute Queues | Threads                        Current Request
------------------------                        ---------------
__weblogic_admin_html_queue | ExecuteThread[1]   null
__weblogic_admin_html_queue | ExecuteThread[2]   null

Execute Queues | Threads                         Current Request
------------------------                         --------------
default | ExecuteThread[1]                        null
default | ExecuteThread[2]                        null
default | ExecuteThread[3]                        null
default | ExecuteThread[4]                        null
default | ExecuteThread[5]                        null
default | ExecuteThread[6]                        null
default | ExecuteThread[7]                        null
default | ExecuteThread[8]                        null
default | ExecuteThread[9]                        null
default | ExecuteThread[10]                       null
default | ExecuteThread[11]              weblogic.rmi.internal.BasicExecuteRequest@f0c95
default | ExecuteThread[12]              Socket Reader Request
default | ExecuteThread[13]              Socket Reader Request
default | ExecuteThread[14]              Read Multicast Msg Fragment
```

サポートされていないプラットフォーム上の WebLogic を監視する方法

WLS-SPI は、HP-UX、Linux (Red Hat)、Solaris、および Windows 2000 を実行するシステムにインストールされている WebLogic Server を監視します。ただし、サポートされていないプラットフォームで実行中のシステム (「リモートシステム」と呼ばれるシステム) にインストールされた WebLogic Server を監視するように WLS-SPI を設定することもできます。

この項の目的は、ユーザーの環境がリモート監視の設定に適しているかどうかを判断できるようにすることです。ユーザーの環境が以下に説明する基準を満たしていて、ユーザーに WLS-SPI および WebLogic Server を使用するための知識が十分備わっていれば、この項で示す例を参考にしてリモート監視を開始できます。

リモート ノード (WLS-SPI がサポートしていないプラットフォーム上で動作) を監視するための要件

HP-UX、Linux (Red Hat)、Solaris、Windows 2000 のいずれでもないプラットフォーム上で動作しているシステムに WebLogic Server をインストールしてある場合でも、以下の条件に該当すれば、WLS-SPI を使用してそのリモート システムを監視できます。最後の条件はオプションです。

- そのリモート システムは、購入したライセンスの対象範囲である (Tier 1 の価格設定を使用)。
- その WLS-SPI はサポートされているプラットフォーム (HP-UX、Solaris、または Windows 2000) 上の少なくとも 1 つの管理対象ノード上で動作している。
- (オプション。ログファイルの監視用。) そのリモート システムは、OVO エージェント ソフトウェアがサポートしているプラットフォーム上で動作している。

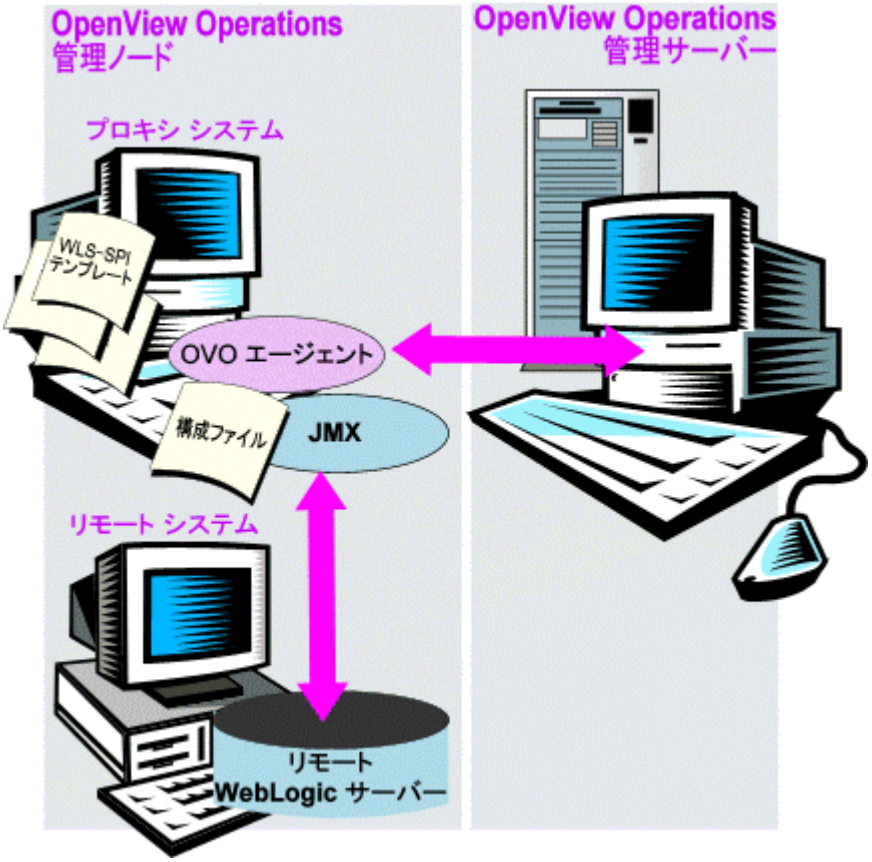
概要

以下の項では、リモート監視の概要を説明し、その実装方法を示します。また、WLS-SPI と OVO エージェント ソフトウェアの両方を使用して、サポートされていないプラットフォーム上の WebLogic Server のメトリックとログファイルにアクセスするための、WLS-SPI の設定方法も説明します。

リモート監視 : 動作の仕組み

標準設定では、WLS-SPI のプログラム / テンプレートは、ローカルの管理対象ノード上に配布されます。標準でない設定では、ローカル システムはプロキシとして使用され、このプロキシを通じて、リモート メトリック情報にアクセスできるようになります。

リモート システムにおけるデータの収集 / 解釈は、データ収集が設定されたプロキシとして機能する、ローカルの管理対象ノードに依存します。



設定エントリの要件: 設定には、ローカル システム用とリモート システム用の両方のエントリが含まれています。複数のリモート システムのエントリを 1 つのローカル システムのセクションに含めることができます。68 ページの例を参照してください。リモート エントリが表示される様子が、(システム IP アドレスとともに) 示されています。

テンプレート配布の要件: テンプレートはローカル ノードに配布する必要があります。別個のテンプレート グループを必要とする場合は、既存のテンプレートをコピーして名前を変更し、-i または -e オプションを使用してコマンド行で WebLogic Server 名を指定できます。これらのコマンド行パラメータの使用方法の詳細は、この章の前項 56 ページの「WebLogic Server コマンド パラメータの使用方法」を参照してください。

OVO エージェントの配布の要件 (オプションのログファイル監視) : リモートの WebLogic のログファイルにアクセスするには、そのリモート システムに OVO エージェント ソフトウェアをインストールする必要があります。標準の OVO プロセスを使用すれば、適正なログファイル名を指定するために WLS-SPI に付属の標準ログファイル テンプレートを変更してから、リモート システムにこれらを配布することができます。

ログファイルのバージョン指定を使用したリモート システムの監視はサポートされていません。

リモート システムの監視の設定

以下のタスクを実行すると、HP-UX、Linux (Red Hat)、Solaris、Windows 2000 のいずれでもないプラットフォーム上で動作しているシステム上にある WebLogic Server をリモートで監視できます。

タスク 1: リモートの WebLogic Server を設定する

OVO WebLogic 登録アプリケーションの **Config WLSSPI** アプリケーションを使用して、リモート WebLogic Server と通信するローカルの各管理対象ノードを設定します。この設定では、リモート WebLogic Server のためのエントリを追加します。

1 リモート WebLogic Server を監視する拠点となる WebLogic 管理対象ノードを選択します。

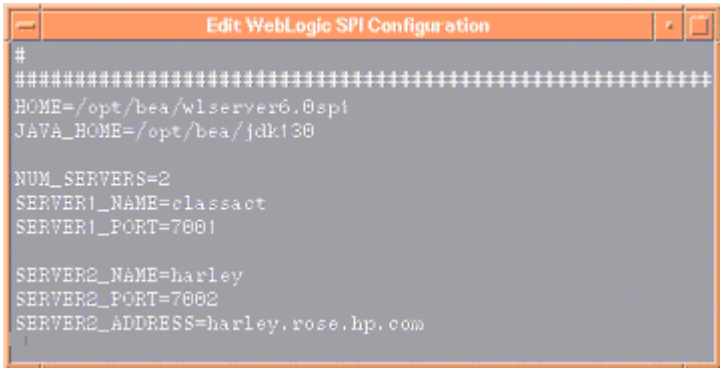
2 設定では、各リモート WebLogic Server ごとに以下のエントリを入力します。
`SERVER<n>_ADDRESS=<`*DNS サーバー名または IP アドレス*`>`

`NUM_SERVERS` が正しいサーバー数 (`<n>`) に設定されていることと、`HOME` と `JAVA_HOME` がグローバル レベルで設定されていることを確認します。

以下の図は、ローカルとリモートの WebLogic Server を同一ファイルに設定する方法について示しています。ただし、リモート サーバーの場合、`SERVER<n>_ADDRESS=<IP_address>` の行が追加されることに注意してください。

```
SERVER2_ADDRESS=15.75.27.109 または
SERVER2_ADDRESS=harley.rose.hp.com
```

1 つのローカル WebLogic Server (`SERVER1`) と 1 つのリモート WebLogic Server (`SERVER2`) を設定する場合、設定は以下のようになります。



上記の設定では、2 つの WebLogic Server が設定されています。`SERVER1` は、HP-UX の管理対象ノード上で動作するローカル サーバーです。`SERVER2` は OVO 管理対象ノード上で動作しますが、これは Red Hat Linux システムではありません (WLS-SPI がサポートしていないプラットフォームです)。リモート システムの設定はローカル システムの設定と似ていますが、`SERVER2_ADDRESS=harley.rose.hp.com` という別の行が含まれています。

3 SPI によるリモート ノードの監視を確認するために、以下のコマンドを実行します。

```
wasspi_wls_perl -S wasspi_wls_ca -m 5 -i <remote_server_NAME|ALIAS>
-x print=on
```

リモート サーバーにエイリアスが設定されている場合は、`ALIAS` を使用します。

タスク 2: OpenView Performance Agent を統合する (オプション)

OpenView Performance Agent (MeasureWare Agent とも呼ばれる) の収集は、リモート システムではなく管理対象ノードで実行されます。PerfView を使用していて、リモート システムのデータのグラフを作成したい場合は、(ローカル) 管理対象ノードで MeasureWare の統合が有効であることを確認する必要があります。

タスク 3: ローカル ノードを WebLogic ノード グループに割り当てる

ローカル管理対象ノードを WebLogic ノード グループに割り当てます。リモート システムと同じバージョンの WebLogic Server のノードに設定を配布しようとしていることを確認してください。

ログファイル用のリモート監視の設定 (オプション)

リモート システムのログファイルの監視は、以下の両方の条件に当てはまる場合にサポートされます。

1 そのリモート システム上で OVO エージェントが動作している

2 ログファイルがローテーションされるときに、ログファイルのファイル名が変更されない

ログファイル監視を設定するには、OVO コンソールで WLS-SPI のログファイル テンプレートをコピーします。次に、コピーしたログファイル テンプレートを設定し、リモート システムに割り当てた後、これを配布します。

リモート ログファイル用のログファイル テンプレートの設定

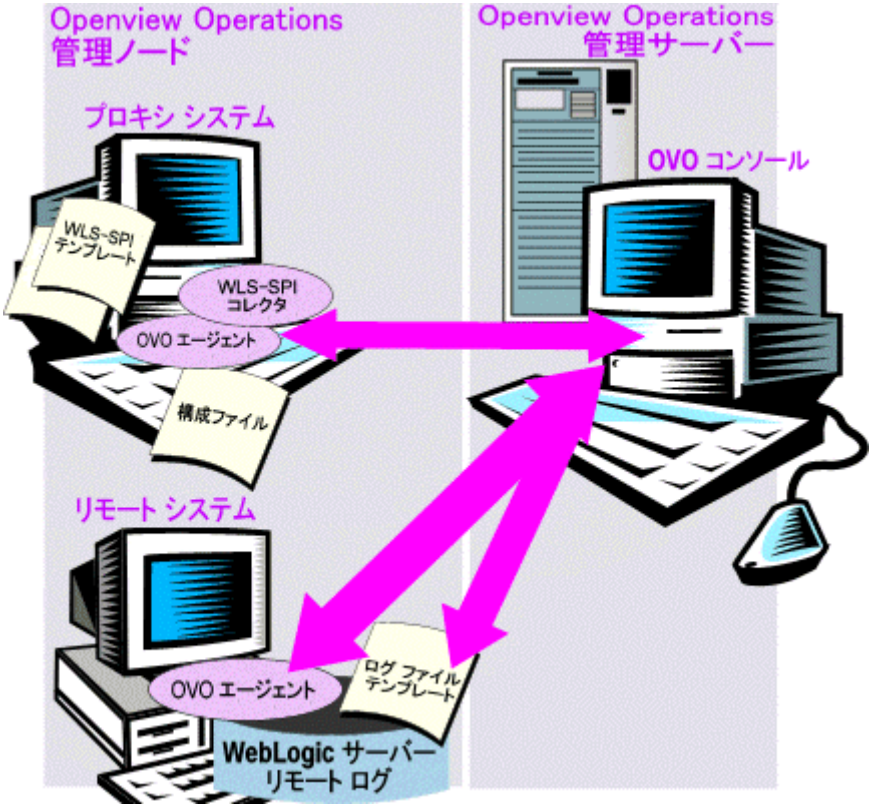
1 WebLogic のバージョン グループの下にある WebLogic ログ テンプレート のコピーを開きます。

たとえば、**[SPI for WebLogic Server]** → **[WLSSPI-Logfiles]**

2 [ログファイル] テキスト ボックスに、リモート システム上のログファイルの場所を入力します (/< パス >/< ファイル名 >)。

3 リモートの OVO 管理対象ノードにログファイル テンプレートを割り当てて配布します。

ログファイル テンプレートと OVO エージェントの両方がリモート システム上に存在しているので、WebLogic Server のログファイルを監視できるようになります。



リモート監視の制限

- WLS-SPI と OVO エージェントは、ログがローテーションするたびにログファイル名が変更される場合には、ログファイルへのアクセスはサポートしていません。
- リモート システム上に OVO エージェントが存在しなければ、リモート システム上の WebLogic のログファイルの監視はできません。
- OpenView Operations の登録アプリケーションでは、WLS-SPI アプリケーションはリモート システムでは実行できません。

ライセンス数に対する WLS-SPI ノードの確認

OVO レポート ユーティリティを使用して、管理対象ノードにインストールしたテンプレートの数を確認することができます。管理対象ノードあたりのテンプレート数を調べると、管理対象のシステム全般に一貫してテンプレートをインストールしたかどうかが分かります。さらに、このレポートを実行することによって、購入したライセンス数がレポートの結果と矛盾していないことも確認できます。

レポートを実行するには

1. OVO コンソールで、チェックしたいノードまたはノード グループを選択します。
2. [アクション] メニューから、**[ユーティリティ]** → **[レポート ...]** を選択します。
3. [レポート] ウィンドウでリストされたレポートの中から、**[WLSSPI License Check]** を選択します。
4. 出力先を選択し、**[OK]** をクリックします。

5 WLS-SPI で HP OpenView のレポート作成 / グラフ作成の製品を使用

Smart Plug-in for BEA WebLogic Server (WLS-SPI) を以下の HP OpenView のレポート作成およびグラフ作成の製品 (要別途購入) と統合することができます。

- HP OpenView Reporter (Reporter)
- HP OpenView Performance Agent (OVPA)
- HP OpenView Performance Insight (OVPI)
- HP OpenView Performance Manager (OVPM)

HP OpenView Reporter: Reporter は、管理用の Web ページ レポートを生成します。これは、履歴と傾向を表した情報を示します。HP OpenView Operations に組み込まれている Reporter のバージョンとは異なります。

WLS-SPI は、Reporter とともに動作してさまざまなレポートを生成し、WebLogic Application Server についての情報を整理して表示します。

Reporter への WLS-SPI の統合方法については、72 ページの「HP OpenView Reporter との統合」を参照してください。Reporter に WLS-SPI を統合すると、Reporter は毎晩、設定済み管理対象ノードでの WebLogic Application Server のパフォーマンスと可用性を示すレポートを生成します。

HP OpenView Performance Agent: OVPA は、システムの現在および過去のリソース データに関して、収集、要約、タイムスタンプの追加、および警告状態の検出を行います。OVPA は、パフォーマンス、リソース、エンドツーエンドのトランザクション応答時間の測定値を提供するとともに、ネットワークおよびデータベース測定情報もサポートします。OVPA の詳細については、『HP OpenView Performance Agent for UNIX ユーザー マニュアル』を参照してください。

OVPA を使用する場合、WLS-SPI は自動的に OVPA を使用します。HP OpenView Operations に組み込まれている HP OpenView Operations のサブエージェント (CODA) を使用する場合 (つまり、OVPA をサポートしない場合) は、管理対象ノードを設定する必要があります。詳細については、72 ページの「CODA の使用方法」を参照してください。

HP OpenView Performance Insight: OVPI は、データの収集、処理、レポート生成を行うネットワーク管理システムです。データはレポートの生成に使用されます。OVPI の詳細については、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。WLS-SPI レポートの詳細と、OVPI への WLS-SPI の統合方法については、『Application Server Report Pack User Guide』を参照してください。

HP OpenView Performance Manager: OVPM は、WLS-SPI メトリックのグラフ作成機能を提供します。HP OpenView Operations に組み込まれている OVPM のバージョンとは異なります。

OVPM への WLS-SPI の統合方法については、77 ページの「HP OpenView Performance Manager との統合」を参照してください。OVPM に WLS-SPI を統合すると、翌日からグラフを使用できます。

CODA の使用方法

WLS-SPI は OpenView Performance Agent (OVPA または MeasureWare Agent) を使用しているかどうかを検出できます。使用している場合は WLS-SPI のインストールに自動的に使用されます。

OVO 7.x に添付されている HP OpenView Operations のサブエージェント (CODA) を使用する場合は、管理対象ノードを設定する必要があります。この設定は OVPA をサポートしていないことに注意してください。

CODA を使用するには、`nocoda.opt` という名前の空のファイルを設定し、管理対象ノードに保存します。

1 管理対象ノード上の以下のディレクトリに `nocoda.opt` ファイルを作成します。

オペレーティング システム	ファイルの位置
HP-UX、Linux、Solaris	`/var/opt/OV/conf/dsi2ddf/`
Windows	`¥usr¥ov¥conf¥dsi2ddf¥`

ディレクトリ `dsi2ddf` が存在しない場合は、これを作成します。

2 空のファイルを保存します。

HP OpenView Reporter との統合

Reporter に統合する前に、WLS-SPI を設定する必要があります (第 3 章、「WLS-SPI の設定」を参照)。

WLS-SPI レポート パッケージをアップグレードする場合、新しいバージョンをインストールする前に旧バージョンを削除する必要があります。WLS-SPI レポート パッケージの削除方法の詳細については、30 ページの「タスク 13: 新しいレポート パッケージをインストールする (オプション)」を参照してください。

Reporter が動作する Windows システムに WLS-SPI レポート パッケージをインストールする必要があります。

1 Windows のクライアント システムで、CD-ROM ドライブに Smart Plug-ins CD-ROM (レポート パッケージを含むもの) を挿入し、Windows エクスプローラ上で、以下のファイルをダブルクリックします。

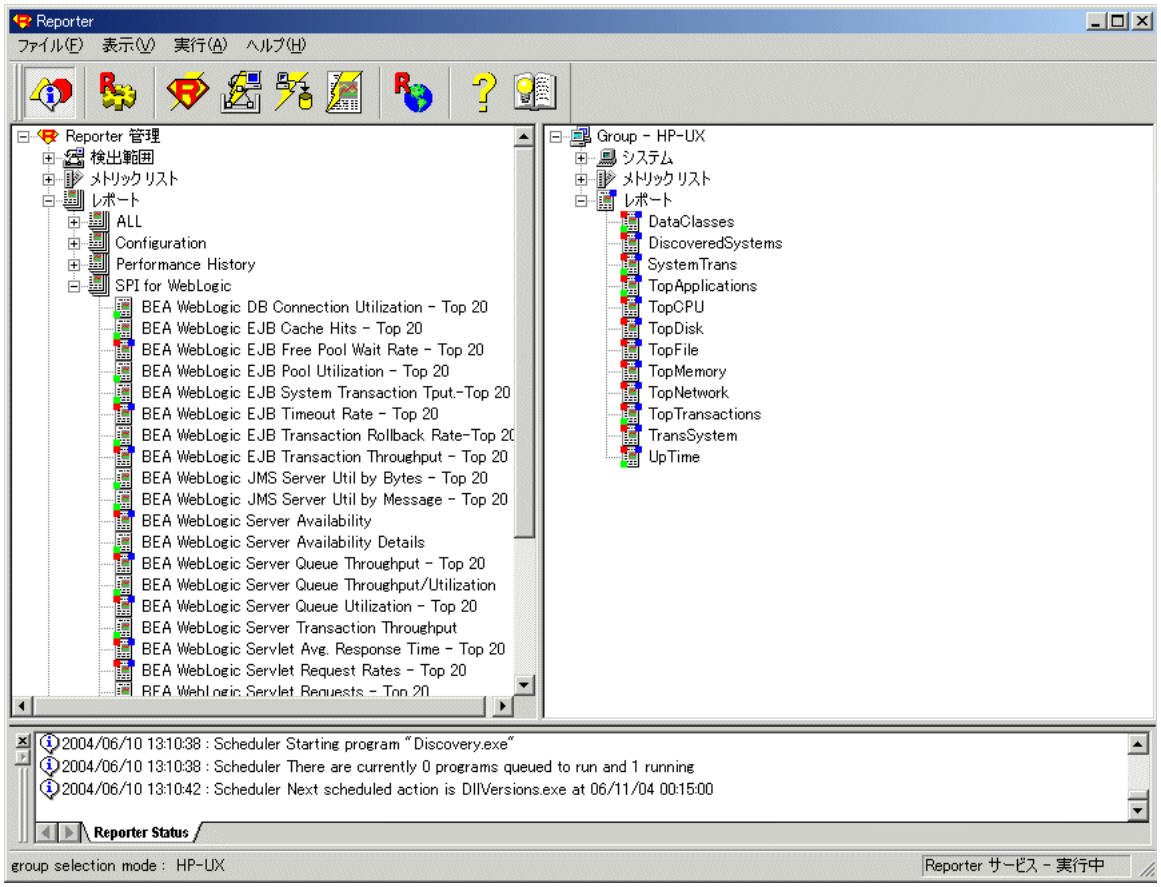
   `¥OV_REPORTER¥WEBLOGIC_SPI_A.04.00¥WLSSPI-Reporter.msi`

2 表示される指示に従います。

3 Reporter のステータス ペイン (後の図を参照) をチェックすることによって、Reporter 設定への変更を確認します。

Windows 2000 の管理対象ノードの場合、インストール中に、インストーラがシステムに旧バージョンのインストーラを検出したことを示すエラー メッセージが表示されることがあります。このメッセージは無視してもかまいません。そのまま続行してください。

Reporter Status ペイン ([Reporter] ウィンドウの一番下) には、実行中のプログラムと発生したエラーに関する情報が表示されます。Reporter Status ペインをチェックすることによって、Reporter が WLS-SPI レポートとともに更新されたことを確認できます。



対象となるノードに WLS-SPI レポートを割り当てる方法は、Reporter のヘルプに説明されています。ヘルプを表示するには、Reporter のメイン ウィンドウの左側のパネルの [レポート] または [検出されたシステム] を選択し右クリックします。表示されたサブメニューから [レポート ヘルプ] または [検出されたシステム ヘルプ] を選択します。「[検出されたシステム グループ] にレポート定義を割り当てるには」の項を参照してください。

4 必要に応じて、レポートを割り当てることによりグループと単一システム レポートを追加します (詳細については、Reporter ヘルプおよびオンラインの 『コンセプト ガイド』を参照してください)。

➤ グループと単一システムの WLS-SPI レポートでは、フルネームでシステムを指定する必要があります。たとえば、`abc.xyz.com` は受け付けられますが、`abc` は受け付けられません。

WLS-SPI Reporter のレポート

HP OpenView Reporter と WLS-SPI との統合によって利用可能になるレポートには、WebLogic Server システム上でのサーバーのパフォーマンスと可用性に関する統合されたデータが表示されます。また、その他のレポートには、単一システムのデータが表示されます。これらのレポートは、WLS-SPI レポート パッケージを Reporter の Windows システムにインストールした翌日から利用可能となります (まだレポート パッケージのインストールを完了していない場合は、72 ページの「HP OpenView Reporter との統合」を参照してください)。

以下の表に、すべての定義済みレポートを示します。

表 2　　パフォーマンス

レポートのタイトル	説明	WebLogic のバージョン	メトリック
上位 20 のキューのスループット	すべてのサーバーについての上位 20 の実行キューの平均スループットを示します。	6.1、7.0、8.1	10
上位 20 のサーブレット平均実行時間	すべてのサーバーについての上位 20 の要求されたサーブレットの平均実行時間を示します。	6.1、7.0、8.1	240
上位 20 のサーブレットの要求率	上位 20 のサーバーが受信するサーブレットの要求率の合計を示します。	6.1、7.0、8.1	242
実行キューのスレッドの使用率	すべてのサーバーの上位 20 の実行キューについて、実行キューのスレッドの利用率をパーセントで表示します。	6.1、7.0、8.1	11
上位 20 の平均トランザクション スループット	上位 20 のサーバーについて、平均トランザクション スループットを示します。	6.1、7.0、8.1	76
上位 20 の EJB のフリー プール待機率	上位 20 のサーバーについて、利用可能になるまで要求が EJB を待機した 1 分当たりの回数を示します。	7.0、8.1	25
上位 20 の EJB のタイムアウト率	上位 20 のサーバーについて、EJB が利用可能になるまで待機している間に要求がタイムアウトになった 1 分当たりの回数を示します。	7.0、8.1	26
上位 20 の EJB のトランザクション スループット	上位 20 のサーバーについて、EJB の平均トランザクション スループットを示します。	6.1、7.0、8.1	35

表 3　　可用性

レポートのタイトル	説明	WebLogic のバージョン	メトリック
サーバーの可用性	すべてのサーバーについて、アップタイムとダウンタイムの割合を示す、日ごとのヒストグラムを記載しています。	6.1	2

.

表 4　　単一システム レポート

レポートのタイトル	説明	WebLogic のバージョン	メトリック
サーバーの可用性の詳細	各 WebLogic Server について、日ごとおよび 1 時間ごとのアップタイム (分) を示すスペクトル グラフを記載しています。	6.1	2
JDBC のスループットおよび接続の使用率	各 WebLogic Server について、JDBC 接続プールの使用率に対するスループットをチャートで示します。	6.1、7.0、8.1	260、262
JMS サーバー上のバイト数単位のスループットおよび使用率	各 WebLogic Server について、キューの使用率に対するスループット (JMS サーバー上の宛先についてのバイト数単位) をチャートで示します。	6.1、7.0、8.1	252、256
JMS サーバー上のメッセージ件数単位のスループットおよび使用率	各 WebLogic Server について、キューの使用率に対するスループット (JMS サーバー上のメッセージ件数単位) をチャートで示します。	6.1、7.0、8.1	251、255
サーバーについてのキューの使用率とスループット	各 WebLogic Server について、スレッドの使用率に対するスループットを示します。	6.1、7.0、8.1	10、11
サーバーについての上位 20 のサーブレット要求率	日ごとの上位 20 のサーブレットについての要求率 (秒単位の要求) のスタック エリア チャートおよび各 WebLogic Server についての上位 100 のサーブレットについてのデータの表を示します。	6.1、7.0、8.1	242
サーバーについてのトランザクション スループット	各 WebLogic Server について、日ごとの平均トランザクション スループットを示します。	6.1、7.0、8.1	76
トランザクション ロールバック タイプ	各 WebLogic Server について、エラー タイプごとのトランザクション ロールバックを示します。	6.1、7.0、8.1	72-75
上位 20 のステートフル EJB とエンティティ EJB のキャッシュ使用率	各 WebLogic Server について、上位 20 の EJB についての EJB キャッシュ使用率をパーセントで示します。	7.0、8.1	238

WLS-SPI OVPI のレポート

HP OpenView Performance Insight と WLS-SPI との統合によって利用可能になるレポートには、WebLogic Server システム上でのサーバーのパフォーマンスと可用性に関する統合されたデータが表示されます。WLS-SPI レポートの詳細と、OVPI への WLS-SPI の統合方法については、『Application Server Report Pack User Guide』を参照してください。

以下の表に、すべての定義済みレポートを示します。

レポートのタイトル	説明	メトリック
サーバーの可用性 — スループット	サーバー可用性チャートは、アプリケーション サーバーの可用性のステータスを時間、日、月単位で表します。トランザクション スループット チャートは、アプリケーション サーバーで毎秒処理されるトランザクション数を表示します。	2、76
EJB プール使用率	EJB プールの使用率	235
JDBC スループット — 使用率	接続プールの JDBC 接続のうち、使用可能な接続の割合と、接続プールの接続を使用する 1 秒当たりのクライアント数	260、262
準リアルタイム サーバー可用性	過去 6 時間のサーバーのステータス	2、76
サーブレットの要求率 — 応答時間	サーブレットの要求率は、1 秒当たりのサーブレットの要求数を示します。サーブレットの応答時間チャートは、各サーブレットの平均実行時間を示します。	240、242
EJB キャッシュ使用率	キャッシュ内の EJB の使用率	238
EJB トランザクション レポート	EJB フリー プール待機率は、フリー プールからステートレスな Session Bean を利用できなかった 1 分当たりの回数を示します。EJB ロード タイムアウト率は、EJB の待機中にクライアントがタイムアウトした回数を示します。EJB トランザクション スループットは、1 秒当たりの EJB トランザクションの数を示します。	25、26、35
実行キュー スループット — 使用率	実行キュー スループット率は、実行キューで 1 秒当たりに処理された要求の数を示します。キュー使用率チャートは、サーバーの実行キューで使用されたスレッドの割合を示します。	10、11
JMS スループット — 使用率	JMS スループット レポートは、JMS を通過した 1 秒当たりのメッセージ数およびバイト数を示します。JMS 使用率レポートは、JMS キューの使用率をメッセージ数およびバイト数に基づいて示します。	251、252、255、256
準リアルタイム実行キュー スループット — 使用率	過去 6 時間の実行キューのスループットおよび使用率の傾向	10、11
サーバー トランザクション ロールバック	リソース、アプリケーション、タイムアウト、システムエラーが原因でロールバックされたトランザクションの割合	72 - 75

HP OpenView Performance Manager との統合

WLS-SPI を OVPM に統合するには、以下の手順を実行します。

1 WLS-SPI をインストールし、設定します。33 ページの「タスク 1: 管理サーバーを設定して Web ブラウザを起動する」が完了していることを確認します。さらに、GRAPH_URL プロパティを設定したことを確認します。GRAPH_URL プロパティの詳細については、153 ページの「プロパティの定義」を参照してください。

2 WLS-SPI グラフ作成パッケージをアップグレードする場合、新しいバージョンをインストールする前に旧バージョンを削除する必要があります。WLS-SPI グラフ作成パッケージの削除方法の詳細については、31 ページの「タスク 14: 新しいグラフ作成パッケージをインストールする (オプション)」を参照してください。

3 グラフ作成パッケージをインストールします。

   OVPM を実行している Windows システムで、以下の手順を実行します。

   a CD-ROM ドライブに Smart Plug-ins CD-ROM (レポート パッケージを含むもの) を挿入し、Windows エクスプローラ上で、以下のファイルをダブルクリックします。

   ```
   ¥OV_PM¥WEBLOGIC_SPI_A.04.00¥WINDOWS¥HPOvSpiWlsGc-4.00.000.msi
   ```

   b 表示される指示に従います。

   OVPM を実行している、OVO 管理サーバー以外の HP-UX システムの場合は、以下の手順を実行します (OVPM が OVO 管理サーバーにインストールされている場合、ファイルの swinstall は SPI ソフトウェアのインストール時にすでに実行されています)。

   a Smart Plug-ins CD-ROM (グラフ作成パッケージを含むもの) をマウントし、以下のコマンドを入力します。

   ```
   swinstall -s <mount_point>/OV_PM/WEBLOGIC_SPI_A.04.00/HPUX/
   HPOvSpiWlsGc-4.00.000.sdtape WLSSPI-GRAPHS
   ```

   OVPM を実行している、OVO 管理サーバー以外の Solaris システムの場合は、以下の手順を実行します (OVPM が OVO 管理サーバーにインストールされている場合、ファイルのインストールは SPI ソフトウェアのインストール時にすでに行われています)。

   a Smart Plug-ins CD-ROM (グラフ作成パッケージを含むもの) をマウントし、以下のコマンドを入力します。

   ```
   /usr/sbin/pkgadd -d <mount_point>/OV_PM/WEBLOGIC_SPI_A.04.00/SOLARIS/
   HPOvSpiWlsGc-4.00.000.sparc all
   ```

4 WebLogic Server メトリックのグラフを作成するには、データ ソース名 **WLSSPI_RPT_METRICS** を使用します。

グラフの表示方法については、OVPM のドキュメントを参照してください。グラフは統合の翌日から使用できます。

データ ソースの説明

WLS-SLI によって収集されたメトリックは WLSSPI_RPT_METRICS データ ソースに格納され、グラフ化することができます。値を表示してトレンドの分析に使用できます。

クラス	WLSSPI_RPT_METRICS

列	属性
1	INTERVAL
2	METRICID

列	属性
3	“1”
4	VALUE
5	VALUEID
6	SERVERNAME
7	PREFIX および OBJECTNAME
8	SORTID

警告通知条件を示すグラフの表示

WLS-SPI は、グラフ作成という目的のために、タイプ別にメトリックを整理しています。この後の項の表に示すメトリックについてのメッセージが生成されると、そのメトリック値とその他のメトリック値のチャートを表示できます。

警告通知条件 (オペレータ起動アクションが WLS-SPI モニター テンプレートを用いて定義されています) に関連するグラフを表示するには、以下の手順を実行します。

1 OVO メッセージ ブラウザでメッセージをダブルクリックします。

2 [メッセージ詳細] ウィンドウで、**[アクション起動]** ボタンを選択します。

結果として行われるアクションにより、メトリックの WLS-SPI グラフが表示されます。このグラフはそのメトリックの値を、同一グループ内の他のメトリックの値とともにチャートにしたものです。

過去 / 現在の状態を示すグラフの表示

View Graphs アプリケーションを使用すれば、利用可能な 4 つのグラフはいずれも、手動でも生成できます。

手動でグラフを生成するには、以下の手順を実行します。

1 OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウと [登録アプリケーション] ウィンドウを開きます。

2 [登録ノード] ウィンドウで、グラフを生成するノードを選択します。

3 [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** をダブルクリックし、次のウィンドウで **[WLSSPI Admin]** をダブルクリックします。

4 ノードを **View Graphs** アプリケーション上にドラッグ & ドロップします。

グラフで利用可能な WLS-SPI メトリック

以下の表に、収集されたメトリック値のマップ可能なグラフを示します。これらの表に含まれるメトリックのいずれかを表示する場合は、View Graphs アプリケーションを使用してグラフ化できます。このグラフは Web ブラウザに表示されます。

表 5 JVM

メトリック番号 / 名前	メトリックの説明
B005_JVMMemUtilPct	JVM で使用されるヒープ空間の割合

表 6　　サーバーのパフォーマンス

メトリック番号 / 名前	メトリックの説明
B010_ExQueThruRate	1 秒当たりに実行キューで提供される要求数
B011_ExQThrdUtilPct	サーバーの実行キューのために使用中であるスレッドの割合
B012_ExQueWaitCnt	提供されるまで待機しているクライアントの要求数
B013_ SocketTrafficRt	1 秒当たりに開かれるソケット接続の数
B014_ActiveSocketCnt	開かれているソケット接続の数

表 7　　Enterprise Java Beans (EJB)

メトリック番号 / 名前	メトリックの説明
B025_EJBPoolWtRtSum	フリー プールから EJB bean を利用できなかった 1 分当たりの回数
B026_EJBTimeoutRtSum	EJB bean の待機中にクライアントがタイムアウトした 1 分当たりの回数
B035_EJBTranThruRt	1 秒当たりの EJB トランザクションの数
B036_EJBTranRbRt	1 秒当たりの、ロールバックされる EJB トランザクションの数

表 8　　JDBC

メトリック番号 / 名前	メトリックの説明
B061_JDBCConPlWtCnt	接続プールからの接続を待機しているクライアントの数
B063_JDBCConLkRtSum	クローズされていない JDBC 接続と接続プールでの 1 分当たりの最大アイドル時間を超えた JDBC 接続の数

表 9　　コネクタ サービス

メトリック番号 / 名前	メトリックの説明
B078_CnctrLeakRtSum	クローズされていないコネクタ接続と接続プールでの 1 分当たりの最大アイドル時間を超えたコネクタ接続の数

表 10　　トランザクション

メトリック番号 / 名前	メトリックの説明
B070_TranAveTime	トランザクションの平均コミット時間
B071_TranRollbackPct	合計を基準とした場合のトランザクション ロールバックの割合
B072_TranResErrRbPct	リソース エラーのためロールバックされたトランザクションの割合
B073_TranAppErrRbPct	アプリケーション エラーのためロールバックされたトランザクションの割合
B074_TranTimErrRbPct	タイムアウト エラーのためロールバックされたトランザクションの割合
B075_TranSysErrRbPct	システム エラーのためロールバックされたトランザクションの割合
B076_TranThruRate	1 秒当たりに処理されるトランザクションの数
B077_TranHeurCnt	経験則による決定を返すトランザクションの割合
B079_TranCapUtil	トランザクション容量の利用の割合

表 11　　クラスタ

メトリック番号 / 名前	メトリックの説明
B080_ClsOutMesFailRt	クラスタに再送される 1 分当たりのマルチキャスト メッセージ数
B081_ClsInMesFailRt	サーバーによって失われた、クラスタからの 1 分当たりのマルチキャスト メッセージ数

表 12　　セキュリティ

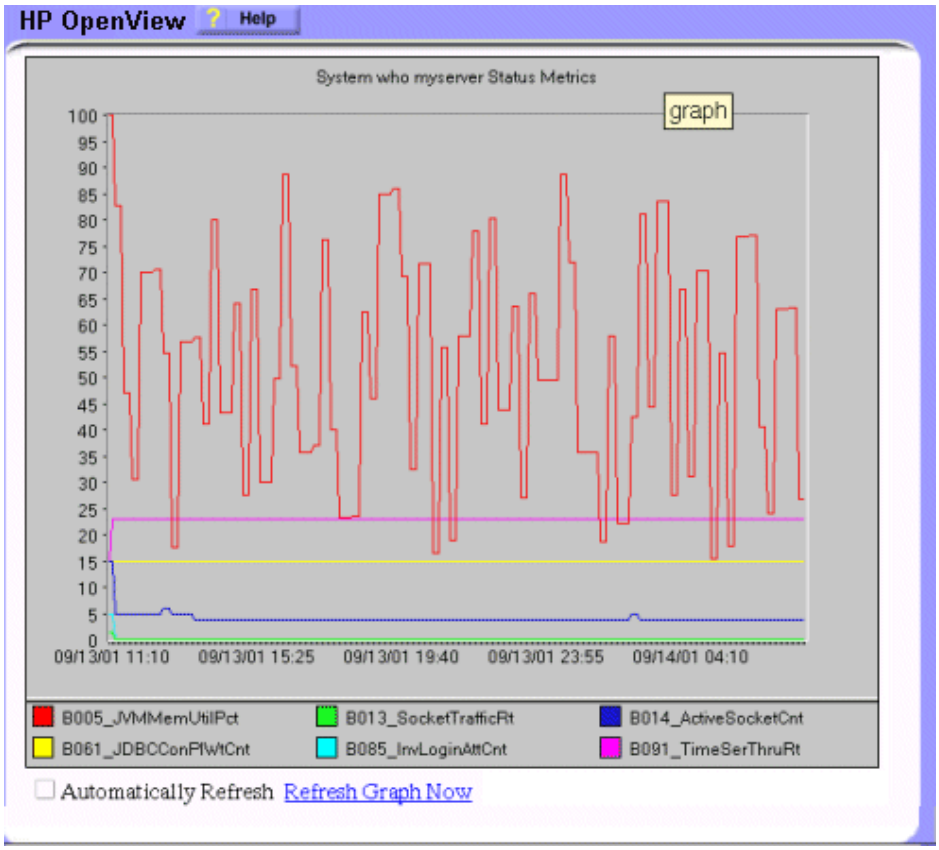
メトリック番号 / 名前	メトリックの説明
B085_InvLoginAttCnt	無効なログイン試行の数

表 13　　WebLogic Time Service

メトリック番号 / 名前	メトリックの説明
B091_TimeSerThruRt	1 秒当たりに実行されるトリガーの数

グラフを生成するオペレータ アクションを用いて Web ページの表示を開始

Performance Manager のグラフは、メッセージの説明、プロパティ、またはメッセージ ブラウザで **[アクション起動]** をクリックすることによって、ほとんどの WLS-SPI 警告通知メッセージから生成できます。オペレータ アクションにより Web ブラウザが起動し、これにより、そのメッセージを生成したメトリック、およびそれと関連するその他のメトリックのグラフを表示できます。



日付の範囲の指定

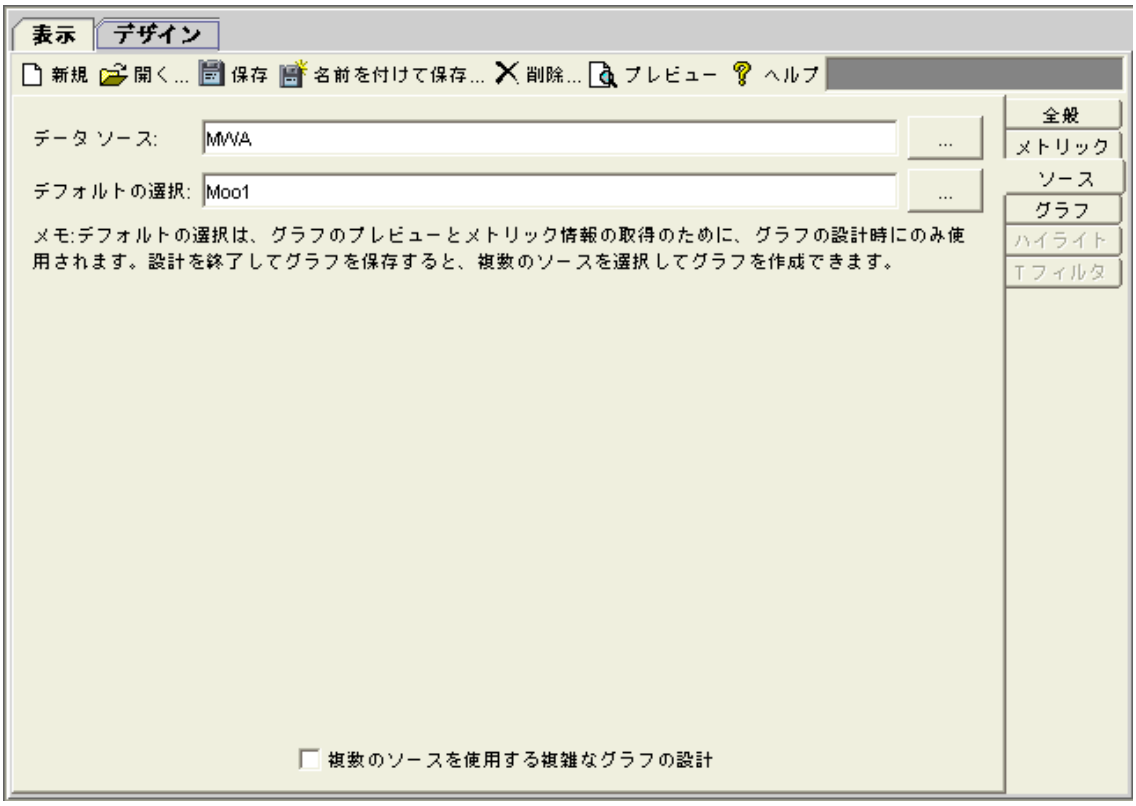
Web ページの表示内で、1 日、1 週間、1 箇月、または 1 年という日付の範囲を指定できます。表示された設定の変更手順については、オンライン ヘルプを参照してください。

統合の例

各 SERVERNAME の METRICID の各 OBJECTNAME をレポートすることによって、データ ソースに格納されているマルチインスタンス データをグラフ化する方法の例を、以下に示します。結果として、すべてのインスタンスのすべてのデータが 1 つのグラフでレポートされます。各 SERVERNAME のデータを別のグラフで表示することもできます。

この例では、OVPM の Java インタフェース オプションも使用しています。

1 OVPM の [Java インタフェース] オプションを起動します。[Performance Manager Java Interface] ウィンドウが表示されます。



2 [Performance Manager Java Interface] ウィンドウで以下の手順を実行します。

a ウィンドウ上部の **[デザイン]** タブをクリックし、次にウィンドウ右側の **[ソース]** タブをクリックします。

b [データ ソース] テキスト ボックスの横にある ... をクリックして、データ ソース (WLSSPI_RPT_METRICS) を選択します。

c [デフォルトの選択] テキスト ボックスの横にある ... をクリックして、データ ソースが属するノードを選択します。

3 ウィンドウ右側の **[全般]** タブをクリックします。

4 このウィンドウで以下の手順を実行します。

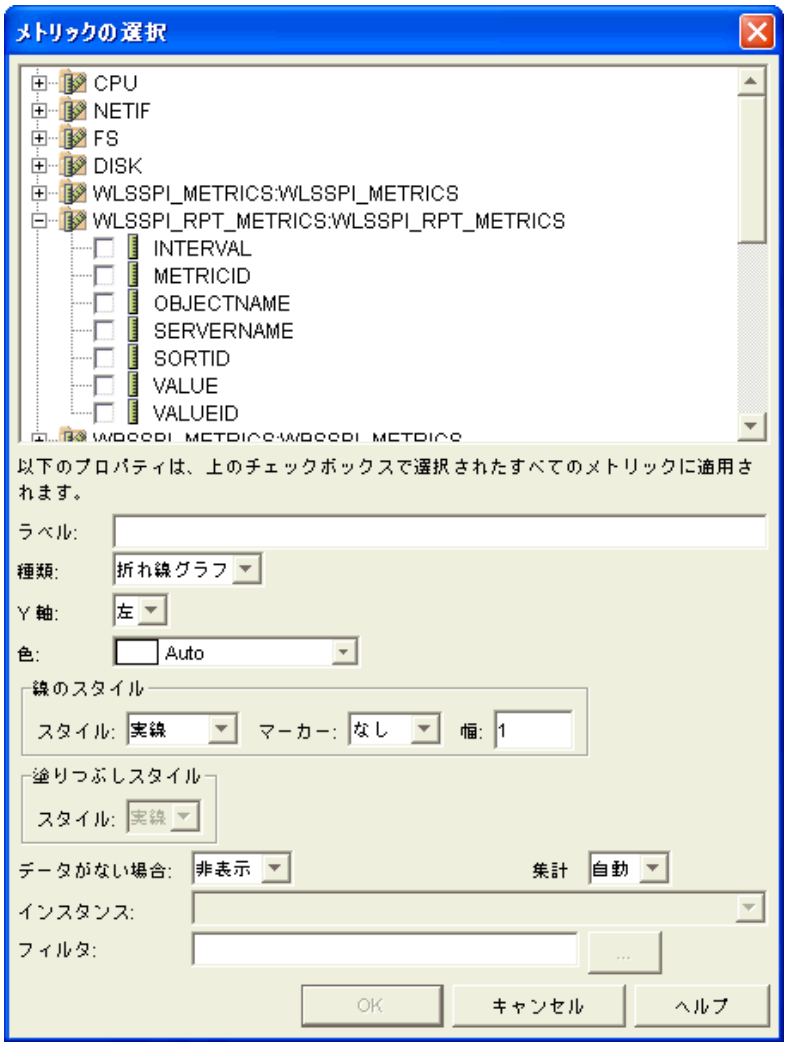
a [種類] ドロップダウン リストから **[折れ線グラフ]** を選択します。これで折れ線グラフが作成されます。

b [表示期間] を入力します。

c [ポイント間隔] ドロップダウン リストを使用して間隔を入力します。

d グラフのキーをアルファベット順に並べ替えたい場合は、**[ラベル (名前順)]** をクリックします。

5 ウィンドウ右側の **[メトリック]** タブをクリックし、**[追加]** をクリックします。[メトリックの選択] ウィンドウが表示されます。



6 [メトリックの選択] ウィンドウで、以下の手順を実行します。

a WLSSPI_RPT_METRICS データ ソースの横の **[+]** をクリックしてツリーを展開します。

b [VALUE] の横のチェック ボックスを選択します。

c **[OK]** をクリックします。

7 [メトリック] タブが選択されたウィンドウに、VALUE が表示されます。VALUE が表示されている行を選択し、**[プロパティ]** をクリックします。[メトリックのプロパティ] ウィンドウが表示されます。

8 [メトリックのプロパティ] ウィンドウで、以下の手順を実行します。

a [ラベル] テキストボックスに、以下を入力します。

— **@@SERVERNAME:@@OBJECTNAME** (すべての SERVERNAME を表示するグラフを作成している場合)

— **@@OBJECTNAME** (1 つの SERVERNAME を表示するグラフを作成している場合)

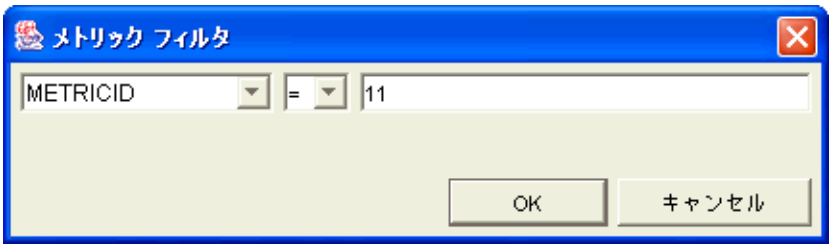
b [マーカー] ドロップダウン リストで、[なし] 以外のマーカーを選択します。

c [データがない場合] ドロップダウン リストで、次のように選択します。

— **[前の値]** - データがデータ ソースから失われている場合、前の値を使用する

— **[ゼロ]** - データがデータ ソースから失われている場合、ゼロの値を使用する

d [フィルタ] テキスト ボックスの横の ... をクリックします。[メトリック フィルタ] ウィンドウが表示されます。



9 [メトリック フィルタ] ウィンドウで、以下の手順を実行します。

a 最初のドロップダウン リストから **METRICID** を選択します。

b 2 番目のドロップダウン リストから **=** を選択します (まだ選択されていない場合)。

c テキスト ボックスにメトリック番号 (たとえば、11) を入力します。

d **[OK]** をクリックします。

10 [メトリックのプロパティ] ウィンドウで、以下の手順を実行します。

a [フィルタ] テキスト ボックスに以下を追加します。

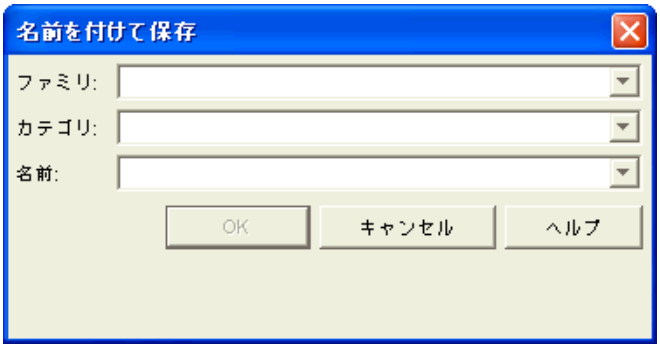
— **`&&SERVERNAME=@&&OBJECTNAME=@@`** - 1 つのグラフですべての SERVERNAME と OBJECTNAME の組み合わせを表示したい場合

— **`&&SERVERNAME="<server_name>"&&OBJECTNAME=@`** - 1 つのグラフに 1 つの SERVERNAME と、マルチインスタンス メトリックに関連するすべての OBJECTNAME を表示したい場合

[フィルタ] テキスト ボックスを編集できない場合は、グラフ テンプレート ファイルでこの項目を編集できます。詳細については、87 ページの手順 13 を参照してください。

b **[OK]** をクリックします。

11 ウィンドウ上部の **[名前を付けて保存]** をクリックします。[名前を付けて保存] ウィンドウが表示されます。



12 [名前を付けて保存] ウィンドウで、以下の手順を実行します。

a [ファミリ] テキスト ボックスにファミリ (たとえば、WLSSPI_Graphs) を入力します。ファミリ名は、グラフを編成するためのグループとして使用されます。

b グラフを一意に識別する名前 (たとえば metric_11) を [名前] テキスト ボックスに入力します。

c [カテゴリ] テキスト ボックスへのテキストの入力は任意です。

d **[OK]** をクリックします。`VPI_GraphsUser<family>.txt` という 名前のグラフ テンプレート ファイル (たとえば、`VPI_GraphsUserWLSSPI_Graphs.txt`) に情報が保存されます。

このウィンドウの詳細については、オンライン ヘルプを参照してください。

13 グラフ テンプレート ファイルを編集します。このファイルは、作業中の OVPM インスタンスのシステムの OpenView データ ディレクトリにあります。グラフ ファイルは以下のようなものになります。

```
#*********************************************
#* OpenView Performance Manager
#* user Defined Graph Templates
#* Last Updated: 07/25/04 04:31_30 AM by [1.2.3.4] moo1
#*********************************************
FAMILY: WLSSPI_Graphs
GRAPH: Metric11
GRAPHBACKGROUND: None
DATERANGE: 1 day
GRAPHMULTIPLEGRAPHS: Yes
POINTSEVERY: raw
DATASOURCE: mwa
SYSTEMNAME: moo1

CLASS: WLSSPI_RPT_METRICS:WLSSPI_RPT_METRICS
METRIC: VALUE
FILTER: METRICID=11&&SERVERNAME=@&&OBJECTNAME=@
LABEL: @@SERVERNAME:@@OBJECTNAME
COLOR: Auto
MARKER: rectangle
MISSINGDATA: previous
END_GRAPH:

#*-----------------------------------------------------
GRAPH: Metric11_2
GRAPHBACKGROUND: None
DATERANGE: 1 day
GRAPHMULTIPLEGRAPHS: Yes
POINTSERVERY: raw
DATASOURCE: mwa
SYSTEMNAME: moo1

CLASS: WLSSPI_RPT_METRICS:WLSSPI_RPT_METRICS
METRIC: VALUE
FILTER: METRICID=11
LABEL: @@SERVERNAME:@@OBJECTNAME
COLOR:Auto
MARKER: rectangle
MISSINGDATA: previous
END_GRAPH:
```

グラフ テンプレート ファイルには、1 つのグラフの複数のデータ セットを入れることができます。

a 各グラフの最初のセクションの末尾に **SUMFROMRAW:** を追加します (上記の例では、SYSTEMNAME: moo1 の後に SUMFROMRAW: を追加します)。こうすると、OVPM はデータソースからデータを要約することができ、GUI を使用して追加されなくなります。

b 86 ページの手順 10 で [メトリックのプロパティ] ウィンドウの [フィルタ] テキスト ボックスを編集できなかった場合は、FILTER フィールドを編集します。

c　ファイルを保存します。グラフ ファイルは次のようになります。

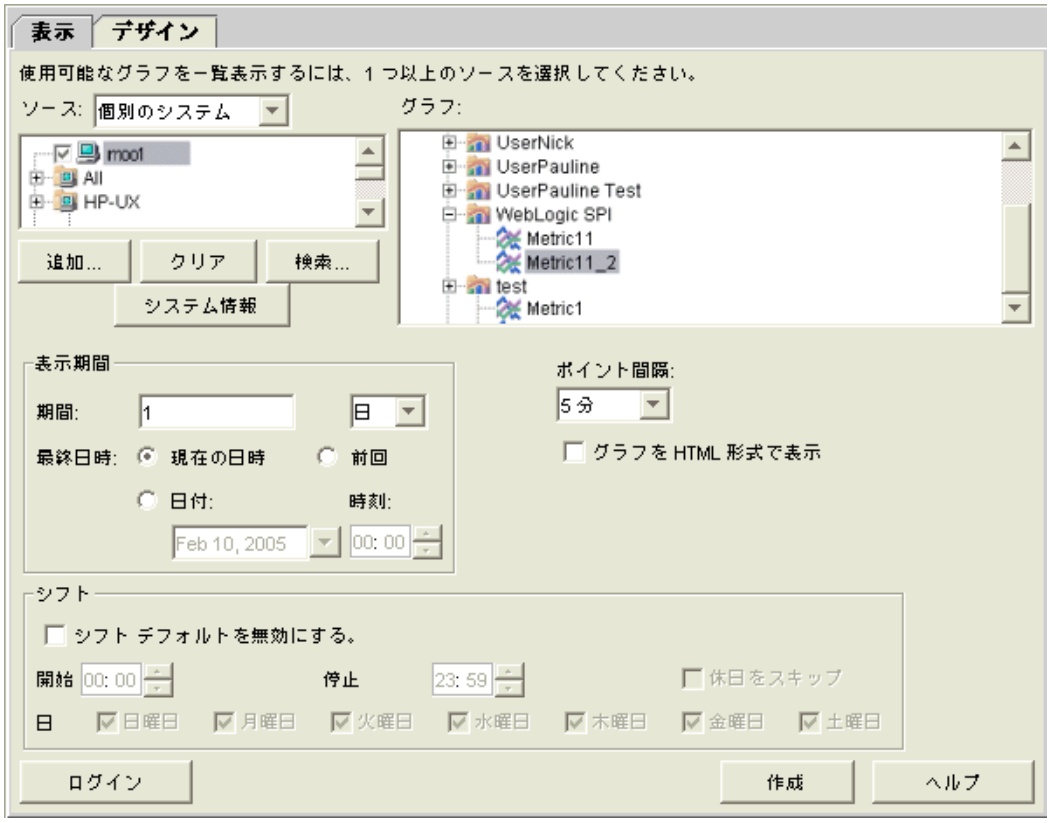
```
#*********************************************
#* OpenView Performance Manager
#* user Defined Graph Templates
#* Last Updated: 07/25/04 04:31_30 AM by [1.2.3.4] moo1
#*********************************************
FAMILY: WLSSPI_Graphs
GRAPH: Metric11
GRAPHBACKGROUND: None
DATERANGE: 1 day
GRAPHMULTIPLEGRAPHS: Yes
POINTSEVERY: raw
DATASOURCE: mwa
SYSTEMNAME: moo1
SUMFROMRAW:

CLASS: WLSSPI_RPT_METRICS:WLSSPI_RPT_METRICS
METRIC: VALUE
FILTER: METRICID=11&&SERVERNAME=@&&OBJECTNAME=@
LABEL: @@SERVERNAME:@@OBJECTNAME
COLOR: Auto
MARKER: rectangle
MISSINGDATA: previous
END_GRAPH:

#*-----------------------------------------------------
GRAPH: Metric11_2
GRAPHBACKGROUND: None
DATERANGE: 1 day
GRAPHMULTIPLEGRAPHS: Yes
POINTSERVERY: raw
DATASOURCE: mwa
SYSTEMNAME: moo1
SUMFROMRAW:

CLASS: WLSSPI_RPT_METRICS:WLSSPI_RPT_METRICS
METRIC: VALUE
FILTER: METRICID=11&&SERVERNAME=@&&OBJECTNAME=@
LABEL: @@SERVERNAME:@@OBJECTNAME
COLOR:Auto
MARKER: rectangle
MISSINGDATA: previous
END_GRAPH:
```

14 [Performance Manager Java Interface] ウィンドウで **[表示]** タブをクリックします。



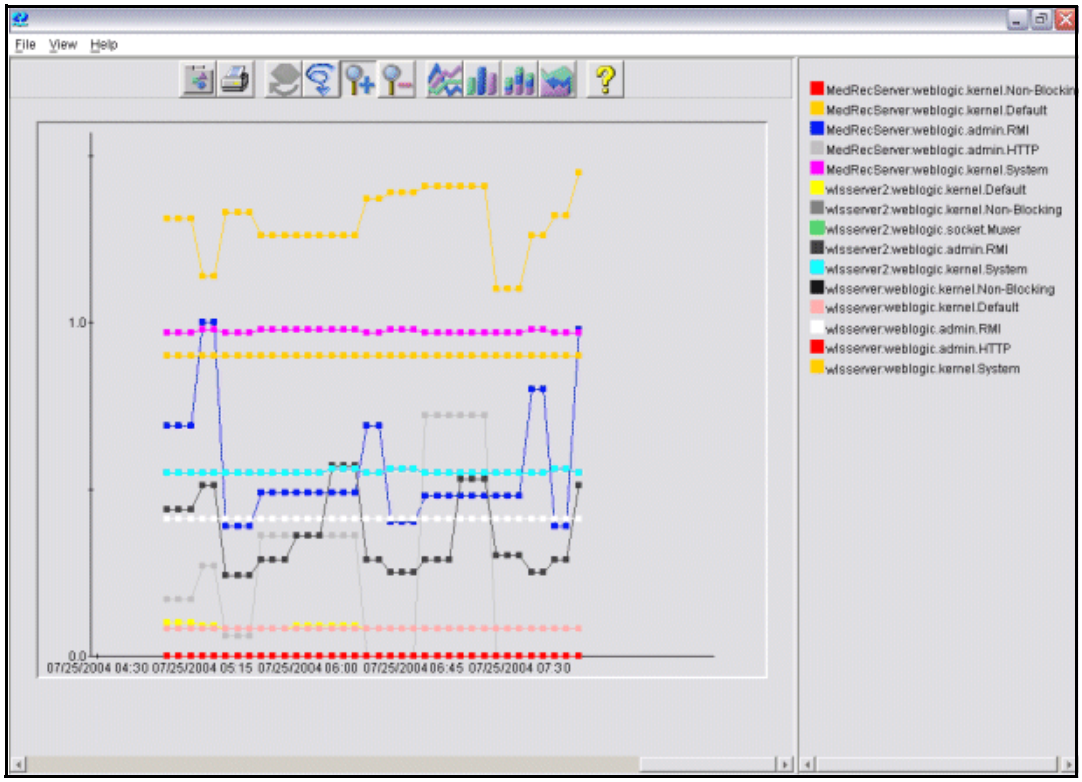
15 このウィンドウで、以下の手順を実行します。

a [ソース] テキスト ボックスの下のウィンドウで、データ ソースが属するサーバーに移動します。

b [グラフ] ウィンドウで、グラフのファミリに移動し、作成したグラフを選択します。

c [表示期間]ダイアログ ボックスと [ポイント 間隔]テキスト ボックスに情報を入力します。

d **[表示]** をクリックします。グラフが表示されます。



[デザイン] タブからグラフを編集した場合は、SUMFROMRAW: エントリがグラフ テンプレート ファイルから削除されます。グラフ テンプレート ファイルを編集して、このエントリを再入力する必要があります。

16 SPI からグラフ作成を有効にします。

a OVO コンソールから、[登録ノード] ウィンドウを開き、グラフ作成を有効にしたいノードまたはノード グループを選択します。

b [登録アプリケーション] ウィンドウを開きます。

c [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** を選択します。

d **[UDM Graph Enable]** をダブルクリックします。

6 基本的なトラブルシューティングとエラー メッセージ

Self-Healing Info アプリケーションの使用

望ましいトラブルシューティング方法 : 次の HP サポート サイトから利用可能な相互参照機能により、トラブルシューティング情報が強化されています。
http://support.openview.hp.com/self_healing.jsp
このサイトから利用可能な情報および検索機能にアクセスするには、まず HP サポート契約の追加の利点である、セルフヒーリング サービス クライアント ソフトウェアをダウンロードして設定しておく必要があります。セルフヒーリング サービスの web サイトへのリンクが自動的に設定され、そこでご自分の SPI の問題と同様の問題や解決法を突き合わせて、トラブルシューティングの効率を高めることができます。このソフトウェアのダウンロード、設定、使用方法、および HP Web サイト サポート サービスへの自動リンクに関する詳細については、『HP OpenView Smart Plug-ins CD for OpenView Operations for UNIX Installation Guide』の「The Self-Healing Services Client Software」の項を参照してください。

別のトラブルシューティング方法 : セルフヒーリング サービスがノードにインストールおよび設定されていない場合は、`Self-Healing Info` アプリケーションを使用することができます。このアプリケーションも SPI トラブルシューティング データを収集し、ファイルに保存します。そのファイルを HP サポートに提出して、支援を受けることができます。このアプリケーションの使用方法の詳細については、178 ページの「Self-Healing Info」を参照してください。

➤ `Self-Healing Info` アプリケーションによって作成されるファイルは、一部の Windows 管理対象ノードでは隠しファイルになる場合があります。ファイルが表示されない場合は、Windows エクスプローラを開き、**[ツール]** メニューから **[フォルダ オプション]** を選択してください。**[表示]** タブをクリックします。[ファイルとフォルダの表示] の下の **[すべてのファイルとフォルダを表示する]** を選択してください。

検出プロセスのトラブルシューティング

問題 : WLSSPI Discovery テンプレートが、WLS-SPI 設定の検出と更新を自動的に行いません。

解決策 :

1. 検出されない管理対象ノードのメッセージ ブラウザでエラーの有無を確認します。エラーメッセージが表示されていれば、その指示に従います。
2. WebLogic アプリケーション サーバーが管理対象ノードにインストールされていることを確認します。アプリケーション サーバーがインストールされていない場合、アプリケーション サーバーをインストールし、第 3 章、「WLS-SPI の設定」に一覧表示されている設定タスクを実行します。
3. WebLogic アプリケーション サーバーのステータスを確認します。アプリケーション サーバーが動作している必要があります。詳細については、37 ページの「タスク 1 : アプリケーション サーバーのステータスを確認する」を参照してください。

4 LOGIN/PASSWORD プロパティが設定されていることと、設定された WebLogic ユーザーに正しい権限があることを確認します。詳細については、第 3 章、「WLS-SPI の設定」を参照してください。

5 Windows 管理対象ノードに、HKEY_LOCAL_MACHINE¥¥Software¥¥BEA Systems¥¥BEAHOMELIST レジストリ キーが存在しない場合、これを設定するか、ファイル *%SystemDrive%*¥BEA¥beahomelist を作成するか、またはこの管理対象ノード用に BEA_HOME_LIST プロパティを設定します。

6 Java のホーム ディレクトリを確認します (93 ページの「Java ホーム ディレクトリの確認」を参照)。

7 WebLogic Server 7.0 または WebLogic Server 7.0 SP1 を実行していて、ドメイン設定ファイル (たとえば config.xml) をデフォルト ディレクトリに保存しなかった場合は、以下の手順の**いずれか**を実行します (デフォルト ディレクトリは *<BEA_Home_Dir>*/user_projects/*<WebLogic_Domain_X>*/ です。ここで、*<BEA_Home_Dir>* は、registry.xml ファイルのあるディレクトリ)。

- Config WLSSPI アプリケーションを使用して、手動でサーバーを設定します。または、以下の手順を実行します。
- Config WLSSPI アプリケーションを使用して、手動で ADMIN_PORTS (ドメイン設定ファイルに一覧表示されている WebLogic Admin サーバーのポート番号) を設定します。それらの WebLogic Admin サーバーが動作しているノードに対してグローバルの LOGIN と PASSWORD を設定する必要があります。

8 WebLogic Server 7.0 SP2 以上を実行していて、ドメイン設定ファイル (たとえば、config.xml) をデフォルト ディレクトリに保存しなかった場合は、以下の手順の**いずれか**を実行します (デフォルト ディレクトリは *<BEA_Home_Dir>*/user_projects/domains/*<WebLogic_Domain_X>*/ です。ここで、*<BEA_Home_Dir>* は、registry.xml ファイルのあるディレクトリ)。

- Config WLSSPI アプリケーションを使用して、手動でサーバーを設定します。または、以下の手順を実行します。
- Config WLSSPI アプリケーションを使用して、手動で ADMIN_PORTS (ドメイン設定ファイルに一覧表示されている WebLogic Admin サーバーのポート番号) を設定します。それらの WebLogic Admin サーバーが動作しているノードに対してグローバルの LOGIN と PASSWORD を設定する必要があります。

9 同一のシステムで WebLogic Server 6.1 と 8.1 を実行中の場合、HOME プロパティを設定します。

10 UNIX 管理対象ノードで、BEA_HOME_LIST および HOME_LIST のディレクトリ パス名にスペースが含まれていないことを確認します。現時点では、検出プロセスはディレクトリ名の中のスペースをサポートしていません。

11 Config WLSSPI アプリケーションが動作していないことを確認します。設定にアクセスできるプロセスは 1 時点で 1 つだけです。Config WLSSPI アプリケーションが動作している場合は、設定 (検出プロセスなど) にアクセスする必要のある他のプロセスは、この設定が利用可能になるまで停止します。

12 OVO 管理サーバーが重複メッセージを抑制しているかどうかを確認します。

a OVO コンソールから、[アクション] → [サーバ] → [設定] を選択します。[管理サーバの設定] ウィンドウが表示されます。

b [重複メッセージの除外と計数] チェック ボックスを探します。このチェック ボックスが選択されている場合は、選択解除します。

13 OVO 管理サーバーを再起動します。

a **[ファイル]** → **[終了]** を選択して、動作しているすべての OVO GUI を停止します。

b OVO 管理サーバー プロセスを停止します。次のコマンドを入力します。
/opt/OV/bin/ovstop opc ovoacomm

c すべての OVO 一時ファイルを削除します。すべての保留メッセージ (データベースに保存されていないメッセージ) とすべての保留アクション (自動アクション、オペレータ起動アクション、予定されているアクション、およびコマンド ブロードキャスト) は失われます。次のコマンドを入力します。
rm -f /var/opt/OV/share/tmp/OpC/mgmt_sv/*

d OVO 管理サーバー プロセスを再起動します。次のコマンドを入力します。
/opt/OV/bin/OpC/opcsv -start
/opt/OV/bin/OpC/opcsv -status

e OVO GUI を再起動します。次のコマンドを入力します。
opc

問題 : WLSSPI Discovery テンプレートが、誤った情報を設定に追加しています。

解決策 :

1 LOGIN と PASSWORD が正しいことを確認します。詳細については、37 ページの「タスク 2 : WebLogic Server ユーザーを設定する」を参照してください。

2 Java のホーム ディレクトリを確認します。詳細については、93 ページの「Java ホーム ディレクトリの確認」を参照してください。

3 設定を更新し、設定エディタの [AUTO_DISCOVER] チェック ボックスを選択解除することによって、WLSSPI Discovery テンプレートが設定情報に上書きしないようにします。

Java ホーム ディレクトリの確認

WLSSPI Discovery テンプレートを正常に使用するには、Java のホーム ディレクトリを (Windows と UNIX の両方の管理対象ノード上で) 正しく設定する必要があります。

Discovery テンプレートはこの情報を検索しますが、この情報を検出できない場合、またはその情報が正確でない場合には、Discovery テンプレートは完全には機能しません。

Discovery テンプレートを実行したい各管理対象ノード上で、以下の**いずれか 1 つ**が正しいことを確認します (Discovery テンプレートによる優先順位順に記載)。

- 設定の中で、JAVA_HOME が正しく定義されていること。設定を編集 / 表示するには、以下に示すように Config WLSSPI アプリケーションを実行します。

  a OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。

  b **[登録アプリケーション]** を選択します。

  c [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[Config WLSSPI]** を選択します。(項目が表示されない場合は、**[マップ]** → **[再ロード]** を選択します。)

  d [Introduction] ウィンドウが表示されます。

  [Next] を選択します。

  e 設定エディタで、JAVA_HOME プロパティを設定します。設定エディタの使用方法については、143 ページの「設定エディタの使用法」を参照してください。

  f **[Save]** を選択して、設定に加えた変更を保存します。変更を一度保存したら、自動的に元に戻すことはできません。

  g **[Finish]** または **[Next]** を選択することによってあらゆる変更を保存し、エディタを終了します。

[Next] を選択すると、[Confirm Operation] ウィンドウが表示されます。**[OK]** を選択します。

[Cancel] を選択して設定に変更を加えた場合、それらの変更は管理サーバー上の設定に残ります。選択した管理対象ノードの設定に変更を加えるには、[登録ノード] ウィンドウでそれらのノードを選択し、Discovery アプリケーションを起動し、設定エディタで **[Next]** を選択してから **[OK]** を選択します。

h JAVA_HOME プロパティが追加または編集された管理対象ノード上の Discovery アプリケーションを実行します。Discovery アプリケーションを実行すると、サービス マップが更新されます。

- Java が各 BEA ホーム ディレクトリ (ファイル beahomelist に記載されている各ディレクトリ) にインストールされていること。
- JAVA_HOME システム変数が正しく定義されていること。

  Windows の管理対象ノードで、以下の手順を実行します。

  a **[スタート]** → **[設定]** → **[コントロール パネル]** を選択します。

  b **[システム]** をダブルクリックします。

  c **[詳細]** タブを選択します。

  d **[環境変数]** を選択します。

  e [システム環境変数] のリストをスクロールします。JAVA_HOME の値を確認します。JAVA_HOME が存在しない場合、この変数が定義されていません。

  UNIX の管理対象ノードで、以下の手順を実行します。

  a **echo $JAVA_HOME** と入力します。

  出力を確認します。出力が返されない場合、JAVA_HOME が定義されていません。

設定のトラブルシューティング

問題 : WLS-SPI 設定に記載されている WebLogic 管理サーバーについての情報に欠落があるかまたは不正確です。

解決策 : LOGIN と PASSWORD が正しいことを確認します。詳細については、37 ページの「タスク 2 : WebLogic Server ユーザーを設定する」を参照してください。これが、リモート ノード上で動作している (OVO 管理対象ノード上で動作していない) WebLogic 管理サーバーについての情報が誤っている場合の最も一般的な理由です。

問題 : WLSSPI Discovery テンプレートが、設定に不正確な情報を上書きします。

解決策 : 設定を更新し、設定エディタの [AUTO_DISCOVER] チェック ボックスを選択解除することによって、WLSSPI Discovery テンプレートが設定情報に上書きしないようにします。

問題 : サーバーが実行されているのに、Server status is unknown (down) というメッセージがメッセージ ブラウザに表示されます。

解決策 : PORT、PROTOCOL、PASSPHRASE の各プロパティを正しく設定していることを確認します。

- PROTOCOL が t3 (非 SSL の場合) または t3s (SSL の場合) のいずれかの値に設定されていることを確認します。
- アプリケーション サーバーが SSL を使用している場合は、PORT が有効な SSL ポート番号に設定されていて、PROTOCOL が t3s に設定されていることを確認します。

- アプリケーション サーバーが SSL を使用していない場合は、PORT が有効な非 SSL ポート番号に設定されていて、PROTOCOL が t3 に設定されていることを確認します。
- キーストアにパスワードが定義されている場合は、誤入力されている可能性もあるため、PASSPHRASE をリセットしてください。

アプリケーションのトラブルシューティング

問題 : 「Default Server」サーバーについて設定変数 SERVER<n>_START_CMD が欠けています。

解決策 : Start WebLogic アプリケーションを正常に実行できるようにするには、START_CMD プロパティと USER プロパティを設定する必要があります。Config WLSSPI アプリケーションを使用してこれらのプロパティを設定します。このアプリケーションの詳細については、174 ページの「Config WLSSPI」を参照してください。

問題 : 「Default Server」サーバーについて設定変数 SERVER<n>_STOP_CMD が欠けています。

解決策 : Stop WebLogic アプリケーションを正常に実行できるようにするには、STOP_CMD プロパティと USER プロパティを設定する必要があります。Config WLSSPI アプリケーションを使用してこれらのプロパティを設定します。このアプリケーションの詳細については、174 ページの「Config WLSSPI」を参照してください。

エラー メッセージ

この項では、WebLogic Server 自体の動作状況ではなく、Smart Plug-in for BEA WebLogic Server (WLS-SPI) の動作状況に関して検出された、エラー メッセージに関する詳細情報について説明します。ここで説明するエラーメッセージはすべて WLSSPI メッセージグループ内のメッセージの日本語訳です。実際のソフトウェアでは英語で表示されます。

次の図のメッセージは、最初のメッセージ以外は WLS-SPI の動作状況に関してのエラーや警告です。これらのエラーは、WLSSPI メッセージグループに属していると認識されます (以下の図の MsgGroup 列を参照)。

どの問題についても、最新のエラー メッセージのみが表示されます (古いエラー メッセージは自動的に受諾されます)。このようにして、メッセージ ブラウザに表示されるエラー メッセージの数を減らしています。

WASSPI-1

説明	ロック ファイル *<filename>* を作成することができません。ファイルはすでに存在します。
重要度	危険
指示文	**原因** 一時ロック ファイルは、複数の WLS-SPI データ コレクタ プロセスが同じデータ ファイルにアクセスしようとして起こる衝突を避けるために使用されます。このエラーは、ファイルがすでに存在するために、アクセスを数回試行してもロック ファイルを作成できない場合に発生します。 **処置** 同じ名前のファイルがすでに存在する場合、このファイルは WLS-SPI データ コレクタを前回実行したときに削除されていません。手動で削除する必要があります。

WASSPI-2

説明	SPI 設定にアクセスできません。
重要度	危険
指示文	**原因** WLS-SPI 設定ファイルが見つからなかったか、またはアクセスできませんでした。ファイルが存在しないか、またはファイルの読み取りに問題があります。 **処置** 1 WLS-SPI データ コレクタを実行するコレクタ テンプレートが、コマンド行の正しいディレクトリを指定していることを確認します。オプション `-Dwasspi.config.dir=<configDirectory>` が、データ コレクタのコマンド行の呼び出しで指定される必要があります。設定ディレクトリ *<configDirectory>* については、139 ページの「管理対象ノードのファイルの位置」を参照してください。 2 WLS-SPI 設定ファイル `SiteConfig` と `SPIConfig` は手順 1 のコマンド行で指定されたディレクトリにあります。このディレクトリにない場合は、**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスして、Config WLSSPI を実行し、これらのファイルを再インストールします。 3 WLS-SPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します (たとえば、I/O 例外)。**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **View Error File** アプリケーションを使用して管理対象ノードの WLS-SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付 / タイムスタンプで識別できます。

WASSPI-3

説明	コマンド行を解析しているときにエラーが発生しました。
重要度	危険
指示文	**原因** WLS-SPI データ コレクタ コマンド行が、コレクタ テンプレートで誤って指定されています。 **処置** 1 WLS-SPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、データ コレクタ コマンド行の構文エラーを特定します。**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **View Error File** アプリケーションを使用して管理対象ノードの WLS-SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付 / タイムスタンプで識別できます。 2 WLS-SPI に出荷時から含まれているコレクタ テンプレートにエラーが発生した場合は、WLS-SPI を再インストールします。 3 WLS-SPI に出荷時は含まれていなかったコレクタ テンプレートにエラーが発生した場合は、誤ったコマンド行を含むコレクタ テンプレートを修正します。WLS-SPI データ コレクタ コマンド行の詳細については、55 ページの「パラメータを用いて WLS-SPI コレクタ / アナライザのコマンドを使用」を参照してください。

WASSPI-4

説明	メトリック定義でエラーが発生しました。
重要度	危険
指示文	**原因** WLS-SPI データ コレクタは、メトリック定義 XML ドキュメントを読み取れませんでした。このエラーは、設定プロパティの欠落、I/O エラー、XML 解析エラー、ファイルの欠落、または直列化データ ファイルの破損によって起こります。 **処置** 1 WLS-SPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します。**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **View Error File** アプリケーションを使用して管理対象ノードの WLS-SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付 / タイムスタンプで識別できます。 2 `UDM_DEFINITIONS_FILE` プロパティが WLS-SPI 設定から欠落している場合は、WLS-SPI を再インストールして、**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **Config WLSSPI** アプリケーションを実行します。 3 問題が WLS-SPI に出荷時から含まれているメトリック定義ファイル (`MetricDefinitions.xml`) にある場合は、WLS-SPI を再インストールします。**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **Config WLSSPI** アプリケーションを実行します。 4 問題が WLS-SPI に出荷時は含まれていなかったユーザー定義メトリック定義ファイルにある場合は、この XML ファイルが `MetricDefinitions.dtd` の仕様に従っていることを確認します。ユーザー定義メトリックの作成の詳細については『HP OpenView Smart Plug-in User Defined Metrics User Guide』を参照してください。独自に作成したユーザー定義メトリック定義ファイルを再インストールします。**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **Config WLSSPI** アプリケーションを実行して、SPI 設定の `UDM_DEFINITIONS_FILE` プロパティが正しく指定されていることを確認します。 5 根本的なエラーが `ClassNotFound` である場合は、内部エラーです。HP のサポート担当者へ報告してください。

WASSPI-5

説明	メトリック *<metric_number>* を処理しているときにエラーが発生しました。
重要度	重要警戒
指示文	**原因** データの収集または指定されたメトリックの計算をしようとしてエラーが発生しました。 **処置** WLS-SPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します。このエラー メッセージの前のエラー メッセージに問題の詳細が表示されています。**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **View Error File** アプリケーションを使用して管理対象ノードの WLS-SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付 / タイムスタンプで識別できます。

WASSPI-6

説明	必要なプロパティ *<property_name>* が WLS-SPI の設定から欠落しています。
重要度	重要警戒
指示文	**原因** 必要なプロパティが WLS-SPI の設定から欠落しています。 **処置** 1 **[登録アプリケーション] → [WLSSPI] → [WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **Config WLSSPI** アプリケーションを実行します。この管理対象ノード上の WebLogic Server に正しいサーバー情報を指定していることを確認します。 2 プロパティが、問題になっている管理対象ノード上の WLS-SPI の設定ファイル (UNIX プラットフォーム上では `/var/opt/OV/wasspi/wls/conf/SiteConfig` または `/var/opt/OV/conf/wls/SiteConfig`、Windows プラットフォーム上では `/usr/OV/wasspi/wls/conf/SiteConfig`) で正しく指定されていることを確認します。

WASSPI-7

説明	サーバー *<server_name>* (url=*<URL>*、port=< ポート >) に接続できません。
重要度	重要警戒
指示文	**原因** 指定されたサーバーは、指定されたポートで動作していません。 **処置** 1 **[登録アプリケーション] → [WLSSPI] → [WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **Config WLSSPI** アプリケーションを実行します。管理対象ノード上の WebLogic Server について正しいサーバー名とポート情報を指定していることを確認します。 2 `SERVER<n>_NAME` プロパティと `SERVER<n>_PORT` プロパティが問題になっている管理対象ノード上の WLS-SPI の設定ファイル (UNIX プラットフォーム上では `/var/opt/OV/wasspi/wls/conf/SiteConfig` または `/var/opt/OV/conf/wls/SiteConfig`、Windows プラットフォーム上では `/usr/OV/wasspi/wls/conf/SiteConfig`) で正しく指定されていることを確認します。 3 WebLogic Server がその管理対象ノード上で動作していることを確認します。

WASSPI-8

説明	ファイル *<file_name>* にグラフ作成データまたはレポート作成データを保存しているときにエラーが発生しました。
重要度	危険
指示文	**原因** 指定されたグラフ作成データ ファイルまたはレポート作成データ ファイルが見つからなかったか、またはファイルへアクセスしようとして I/O エラーが発生しました。 **処置** 1 WLS-SPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します。**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **View Error File** アプリケーションを使用して管理対象ノードの WLS-SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付 / タイムスタンプで識別できます。 2 ステップを特定して、問題を再現します。 3 トレース記録をオンにして (**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **Start Tracing** アプリケーションを使用)、問題を再現します。利用可能なアプリケーションの詳細については、16 ページの「アプリケーション」を参照してください。 トレース記録情報は、`/<OvAgentDir>/wasspi/wls/log/trace.log` (アーカイブ ファイルには 3 桁の数値が filename に追加されます) に保存されます。ここで、`/<OvAgentDir>/` は通常、`/var/opt/OV/` です。 4 前のステップで収集した情報を HP のサポート担当者に連絡してください。

WASSPI-9

説明	プロパティ *<property_name>* を検索できません。
重要度	危険
指示文	**原因** 必要なプロパティが WLS-SPI の設定ファイルの 1 つから欠落しています。 **処置** 1 WLS-SPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、欠落しているプロパティを特定します。**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **View Error File** アプリケーションを使用して管理対象ノードの SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付 / タイムスタンプで識別できます。 2 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。問題になっている管理対象ノード上の WebLogic Server について正しい情報を指定していることを確認します。 3 欠落しているプロパティが、問題になっている管理対象ノード上の WLS-SPI の設定ファイル (UNIX プラットフォーム上では `/var/opt/OV/wasspi/wls/conf/SiteConfig` または `/var/opt/OV/conf/wls/SiteConfig`、Windows プラットフォーム上では `/usr/OV/wasspi/wls/conf/SiteConfig`) で正しく指定されていることを確認します。

WASSPI-10

説明	ファイル *<filename>* へのアクセスで問題が発生しました。
重要度	危険
指示文	**原因** 指定されたファイルは見つからないか、作成できないか、またはアクセスできません。このファイルは一時ファイルの可能性があります。 **処置** 1 WLS-SPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題になっているファイルと問題の根本的な原因を特定します。**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **View Error File** アプリケーションを使用して管理対象ノードの WLS-SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付 / タイムスタンプで識別できます。 2 一時ファイルを作成するために十分なディスク領域があることを確認します。

WASSPI-11

説明	WLS-SPI の設定ファイルで、サーバーは指定されていません。
重要度	重要警戒
指示文	**原因** 問題になっている管理対象ノードの WLS-SPI の設定で指定されている WebLogic Server の数は 0 です。 **処置** 1 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。管理対象ノード上の WebLogic Server について正しいサーバー名とポート情報を指定していることを確認します。 2 WLS-SPI の設定ファイル (UNIX プラットフォーム上では `/var/opt/OV/wasspi/wls/conf/SiteConfig` または `/var/opt/OV/conf/wls/SiteConfig`、Windows プラットフォーム上では `/usr/OV/wasspi/wls/conf/SiteConfig`) の `NUM_SERVERS` プロパティが、管理対象ノード上の WebLogic Server の数を指定していることを確認します。

WASSPI-12

説明	Opcmon は、コマンド *<opcmon_command>* にエラー コード *<error_number>* を返しました。
重要度	危険
指示文	**原因** WLS-SPI コレクタが開始した opcmon プロセスは、エラー (0 以外) 終了コードを返しました。 **処置** 1 ステップを特定して、問題を再現します。 2 トレース記録をオンにして (**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **Start Tracing** アプリケーションを使用)、問題を再現します。利用可能なアプリケーションの詳細については、16 ページの「アプリケーション」を参照してください。 トレース記録情報は、`/<OvAgentDir>/wasspi/wls/log/trace.log` (アーカイブ ファイルには 3 桁の数値が filename に追加されます) に保存されます。ここで、`/<OvAgentDir>/` は通常、`/var/opt/OV/` です。 3 前のステップで収集した情報を HP のサポート担当者に連絡してください。

WASSPI-13

説明	opcmon プロセスを実行中に例外が発生しました。
重要度	危険
指示文	**原因** WLS-SPI データ コレクタはプロセスを実行して、opcmon を呼び出そうとしました。しかし、プロセスを作成できなかったか、またはプロセスが中断されました。 **処置** UNIX システムでは、カーネル設定パラメータ `NPROC` と `MAXUPRC` が十分大きな値に設定されていて、プロセスの作成が可能であることを確認します。

WASSPI-14

説明	ファイル *<filename>* が見つかりません。
重要度	危険
指示文	**原因** WLS-SPI データ コレクタが要求したファイルは見つかりませんでした。 **処置** 1 WLS-SPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題になっているファイルと問題の根本的な原因を特定します。**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **View Error File** アプリケーションを使用して管理対象ノードの WLS-SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付 / タイムスタンプで識別できます。 2 WLS-SPI を再インストールします。 3 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。

WASSPI-15

説明	XML ドキュメント *<filename>* を解析しているときにエラーが発生しました。
重要度	危険
指示文	**原因** 指定された XML ドキュメントを解析しているときにエラーが発生しました。 **処置** 1 WLS-SPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します。**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **View Error File** アプリケーションを使用して管理対象ノードの WLS-SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付 / タイムスタンプで識別できます。 2 ユーザーが XML ドキュメントを作成した場合は、その文書を修正します。ユーザー定義メトリック定義の正しい形式の詳細については、『HP OpenView Smart Plug-in User Defined Metrics User Guide』を参照してください。 3 その XML ドキュメントが WLS-SPI に出荷時から含まれている場合は、[登録アプリケーション] から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、WLS-SPI 設定アプリケーションを実行し、WLS-SPI の設定ファイルを再インストールします。

WASSPI-16

説明	メトリック *<metric_number>* に誤ったフィルタが指定されました。
重要度	重要警戒
指示文	**原因** メトリック フィルタがメトリック定義 XML ドキュメントで誤って指定されています。 **処置** 1 メトリックが、ユーザーが作成した XML 文書で指定されている場合は、その文書を修正します。ユーザー定義メトリック定義の正しい形式の詳細については、『HP OpenView Smart Plug-in User Defined Metrics User Guide』を参照してください。 2 そのメトリックが WLS-SPI に出荷時から含まれていた定義済みメトリックである場合は、[登録アプリケーション] から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、WLS-SPI 設定アプリケーションを実行し、WLS-SPI の設定ファイルを再インストールします。

WASSPI-17

説明	サーバー *<server_name>* (url=*<URL>*、port=*<port_number>*) 上の MBean サーバーにアクセスできませんでした。
重要度	危険
指示文	**原因** WLS-SPI データ コレクタが WebLogic Server 上の JMX MBean サーバーへのアクセスを要求している間に問題が発生しました。これは、以下の内容が原因です。 1 アプリ ケーション サーバー上の JMX MBean サーバーを探す JNDI ルックアップに失敗しました。 2 WLS-SPI の設定で指定されているログイン名には、アプリケーション サーバーでの正しい権限がありません。 3 WLS-SPI の設定で指定されているパスワードは誤っています。 **処置** 1 WLS-SPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します。**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **View Error File** アプリケーションを使用して管理対象ノードの WLS-SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付 / タイムスタンプで識別できます。 2 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。問題になっているサーバーのログイン名とパスワードが正しいことを確認します。 3 WebLogic Administration Console で、ユーザーは有効な WebLogic ユーザーで、正しい権限を持っていることを確認します。正しい権限を設定するには、37 ページの「タスク 2 : WebLogic Server ユーザーを設定する」を参照してください。 4 WebLogic Administration Console で、MBean サーバー (`weblogic.management.home.`*<server_name>*) が問題となっているサーバーの JNDI ツリーにあることを確認します。左側のペインにあるサーバーを右クリックすると、JNDI ツリーが表示されます。ここに JNDI ツリーがない場合は、WebLogic Server を再起動します。

WASSPI-18

説明	データ ソース *<datasource_class_name>* へのログ記録時にエラーが発生しました。ログ記録プロセスが終了コード *<exit_code>* を返しました。
重要度	危険
指示文	**原因** WLS-SPI データ コレクタが開始した ddflog プロセスは、0 以外のエラー コードを返しました。 **処置** 1 ステップを特定して、問題を再現します。 2 トレース記録をオンにして (**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **Start Tracing** アプリケーションを使用)、問題を再現します。利用可能なアプリケーションの詳細については、16 ページの「アプリケーション」を参照してください。 トレース記録情報は、`/<OvAgentDir>/wasspi/wls/log/trace.log` (アーカイブ ファイルには 3 桁の数値が filename に追加されます) に保存されます。ここで、`/<OvAgentDir>/` は通常、`/var/opt/OV/` です。 3 前のステップで収集した情報を HP のサポート担当者に連絡してください。

WASSPI-19

説明	*<filename>* の XSLT トランスフォーマのインスタンス作成で問題が発生しました。
重要度	重要警戒
指示文	**原因** 自動アクション レポート出力を指定している XSL ドキュメントにエラーが発生しました。 **処置** 1 WLS-SPI を再インストールします。 2 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。

WASSPI-20

説明	メトリック *<metric_number>* のレポート作成で問題が発生しました。
重要度	重要警戒
指示文	**原因** 指定されたメトリックのテキスト レポート作成中にエラーが発生しました。 **処置** 1 WLS-SPI を再インストールします。 2 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。

WASSPI-21

説明	ファクトリ実装「*<class name>*」をインスタンス化するときに問題が発生しました。
重要度	危険
指示文	**原因** クラス名を指定する java プロパティに誤りがあるか、このクラスが AppServerFactory インタフェースを実装していません。 **処置** java プロパティ `appserver.implementation` に、AppServerFactory インタフェースを実装するクラスの完全修飾名が設定されていることを確認します。 java コマンド行で設定する場合の例を示します。 `-Dappserver.implementation=com.hp.openview.wasspi.WLSAppServerFactory`

WASSPI-23

説明	サーバー *<server_name>* のコレクタ / アナライザの初期化時にエラーが発生しました。
重要度	危険
指示文	**原因** このサーバーの監視の準備中に例外が発生しました。 **処置** 1 WLS-SPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題を特定します。**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする `View Error File` アプリケーションを使用して管理対象ノードの SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付 / タイムスタンプで識別できます。 2 ステップを特定して、問題を再現します。 3 トレース記録をオンにして (**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする `Start Tracing` アプリケーションを使用)、問題を再現します。 トレース記録情報は、*/<OvAgentDir>*/`wasspi/wls/log/trace.log` (アーカイブ ファイルには 3 桁の数値が filename に追加されます) に保存されます。ここで、*/<OvAgentDir>/* は通常、`/var/opt/OV/` です。 4 `Gather Info` アプリケーションを実行します (**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする `Gather Info` アプリケーションを使用)。 5 前のステップで収集した情報を HP のサポート担当者に連絡してください。

WASSPI-24

説明	サーバー *<server_name>* (ログイン *<login>*) へのログインでエラーが発生しました。
重要度	危険
指示文	**原因** 指定したサーバーへのログイン中にセキュリティの例外が発生しました。 **処置** 1 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。`LOGIN` と `PASSWORD` の設定プロパティが正しく設定されていることを確認します。 2 WebLogic Administration Console で、ログインは有効な WebLogic ユーザーで、正しい権限を持っていることを確認します。正しい権限を設定するには、37 ページの「タスク 2 : WebLogic Server ユーザーを設定する」を参照してください。

WASSPI-26

説明	*<server_name>* のデータ ログ記録プロセスがタイムアウトになりました。
重要度	重要警戒
指示文	**原因** OVPA または CODA のいずれか (サーバーの設定による) が異常終了し、タイムアウトになりました。 **処置** 1 コマンド **`mwa restart`** を使用して OVPA を再起動します。 2 コマンド **`opcagt -start`** を使用して CODA を再起動します。

WASSPI-27

説明	RMI コレクタが *<command>* を処理できません。
重要度	注意
指示文	**原因** rmid 関連の処理を実行するときに例外が発生しました。 **処置** 1 WLS-SPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題を特定します。**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする `View Error File` アプリケーションを使用して管理対象ノードの SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付 / タイムスタンプで識別できます。 2 ステップを特定して、問題を再現します。 3 トレース記録をオンにして (**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする `Start Tracing` アプリケーションを使用)、問題を再現します。 トレース記録情報は、*/<OvAgentDir>/*`wasspi/wls/log/trace.log` (アーカイブ ファイルには 3 桁の数値が filename に追加されます) に保存されます。ここで、*/<OvAgentDir>/* は通常、`/var/opt/OV/` です。 4 `Gather Info` アプリケーションを実行します (**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする `Gather Info` アプリケーションを使用)。 5 前のステップで収集した情報を HP のサポート担当者に連絡してください。

WASSPI-30

説明	ポート *<port>* で *<rmid_path>* の起動に失敗しました。
重要度	危険
指示文	**原因** 指定されたパスはすでに使用されています。 **処置** 管理対象ノードの WLI-SPI 設定ファイル (UNIX プラットフォームでは `/var/opt/OV/wasspi/wls/conf/SPIConfig` または `/var/opt/OV/conf/wls/SPIConfig`、Windows プラットフォームでは `/usr/OV/wasspi/wls/conf/SPIConfig`) で `RMID_PORT` プロパティを設定して、使用されていない rmid ポートを指定します。上書きされないようにするため、RMID_PORT は `Dynamic definitions` コメントの後に追加してください。

WASSPI-31

説明	*<command>* の処理中に RMI コレクタとの接続が切断されました。
重要度	注意
指示文	N/A

WASSPI-32

説明	MBean *<JMX-ObjectName>* のメタデータを取得できません。
重要度	注意
指示文	N/A

WASSPI-33

説明	サーバー *<server name>*、バージョン *<version>* が一致するアクションが存在しません。
重要度	注意
指示文	**原因** JMXAction 要素で定義された FromVersion タグと ToVersion タグの値が、サーバー バージョンと一致していません。 **処置** そのアクションがサーバーで有効な場合、JMXAction 定義の FromVersion/ToVersion 要素を調整するか、サーバーの VERSION プロパティを調整します。

WASSPI-34

説明	メトリック *<metric id>* にアクションが定義されていません。
重要度	注意
指示文	**原因** アクション -m オプションで指定されたメトリック ID に JMXActions 要素が定義されていません。 **処置** 指定したメトリック ID に誤りがある場合は、アクション -m オプションを修正します。誤りでない場合は、メトリック定義に JMXActions 定義を追加します。

WASSPI-35

説明	アクション *<action command-line>* の実行中にエラーが発生しました。
重要度	重要警戒
指示文	**原因** アクションの実行中に予期しないエラーが発生しました。 **処置** 管理対象ノードのエラー ログで、エラー メッセージの後に記録された障害原因を確認します。

WASSPI-36

説明	サーバー *<server name>* の MBean *<JMX objectname>* が、オペレーション *<operation name>* を公開しません。
重要度	注意
指示文	**原因** アクションの JMXCalls 要素が、この MBean で公開されないオペレーションを定義しています。 **処置** JMXCalls 要素を修正するか、要素からオペレーションを削除します。

WASSPI-37

説明	サーバー *<server name>* の MBean *<JMX objectname>* が属性 *<attribute name>* を書き込み可能属性として公開しません。
重要度	注意
指示文	**原因** アクションの JMXCalls 要素が、この MBean で公開された書き込み可能属性を読み取り専用属性として定義しています。 **処置** カスタム MBean の場合は、MBean の管理インタフェースを更新して属性を書き込み可能属性にします。カスタム MBean でない場合は、JMXCalls 要素から属性定義を削除します。

WASSPI-38

説明	サーバー *<server name>* の MBean *<JMX objectname>* が、属性 *<attribute name>* を公開しません。
重要度	注意
指示文	**原因** アクションの JMXCalls 要素が、この MBean で公開されない属性を定義しています。 **処置** JMXCalls 要素を修正するか、要素から属性を削除します。

WASSPI-39

説明	MBean *<JMX objectname>* でオペレーション *<operation name>* を呼び出すときにエラーが発生しました。
重要度	重要警戒
指示文	**原因** この MBean のオペレーションを呼び出すときに予期しないエラーが発生しました。管理対象リソースが例外をスローした可能性があります。 **処置** 管理対象ノードのエラー ログで、エラー メッセージの後に記録された障害原因を確認します。

WASSPI-40

説明	MBean *<JMX objectname>* の属性 *<attribute name>* を設定するときにエラーが発生しました。
重要度	重要警戒
指示文	**原因** この MBean の属性を設定するときに予期しないエラーが発生しました。管理対象リソースが例外をスローした可能性があります。 **処置** 管理対象ノードのエラー ログで、エラー メッセージの後に記録された障害原因を確認します。

WASSPI-41

説明	MBean *<JMX objectname>* から属性 *<attribute name>* を取得するときにエラーが発生しました。
重要度	重要警戒
指示文	**原因** この MBean から属性を取得するときに予期しないエラーが発生しました。管理対象リソースが例外をスローした可能性があります。 **処置** 管理対象ノードのエラー ログで、エラー メッセージの後に記録された障害原因を確認します。

WASSPI-42

説明	コマンド *<command>* の実行中にエラーが発生しました。
重要度	危険
指示文	**原因** WLS-SPI コレクタにより起動されたコマンドでエラーが検出されました。 **処置** 1 ステップを特定して、問題を再現します。 2 トレース記録をオンにして (**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする `Start Tracing` アプリケーションを使用)、問題を再現します。 トレース記録情報は、*/<OvAgentDir>/*`wasspi/wls/log/trace.log` (アーカイブ ファイルには 3 桁の数値が filename に追加されます) に保存されます。ここで、*/<OvAgentDir>/* は通常、`/var/opt/OV/` です。 3 `Gather Info` アプリケーションを実行します (**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする `Gather Info` アプリケーションを使用)。 4 前のステップで収集した情報を HP のサポート担当者に連絡してください。

WASSPI-43

説明	イベント *<event-type>* の公開中にエラーが発生しました。
重要度	重要警戒
指示文	**原因** パブリッシャがメトリックまたは収集イベントを処理するときに予期しないエラーが発生しました。 **処置** 管理対象ノードのエラー ログで、エラー メッセージの後に記録された障害原因を確認します。

WASSPI-201

説明	ファイル *<filename>* が見つかりません。
重要度	危険
指示文	**原因** 設定ファイルが見つかりません。 **処置** 1 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。 2 エラーが発生した管理対象ノード上の WebLogic Server には、正しい情報が指定されていることを確認します。

WASSPI-202

説明	ファイル *<filename>* を読み込めません。
重要度	危険
指示文	**原因** 1 ファイルは開かないか、または見つかりません。 2 権限が正しくないか、またはディレクトリが破損しています。 **処置** 1 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。 2 エラーが発生した管理対象ノード上の WebLogic Server に、正しい情報を指定したことを確認します。 3 OVO ユーザーがこのファイルを読み込むには、この権限で正しいことを確認します。

WASSPI-203

説明	ファイル *<filename>* を書き込めません。
重要度	危険
指示文	**原因** 権限が正しくないか、または、ファイルまたはディレクトリが破損しています。 **処置** 1 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。 2 エラーが発生した管理対象ノード上の WebLogic Server に、正しい情報を指定したことを確認します。 3 OVO ユーザーがこのファイルを書き込むには、この権限で正しいことを確認します。

WASSPI-204

説明	opcmsg *<message>* を送信しようとしてエラーが発生しました。
重要度	危険
指示文	**原因** opcmsg の実行中に問題が発生しました。「opcmsg」が欠落しているか、実行の権限がない (OVO インストール エラー) か、またはシステム プロセス テーブルが一杯になっている可能性があります。 **処置** 1 OVO が正しくインストールされ、管理対象ノードに配布されていることを確認します。 2 プロセス テーブルが一杯になっていないことを確認します。一杯になっている場合は、システム管理者にプロセス テーブルを増やすように求めることを検討します。

WASSPI-205

説明	opcmon *<command>* を送信しようとしてエラーが発生しました。
重要度	危険
指示文	**原因** opcmon の実行中に問題が発生しました。「opcmon」が欠落しているか、実行の権限がない (OVO インストール エラー) か、またはシステム プロセス テーブルが一杯になっている可能性があります。 **処置** 1 OVO が正しくインストールされ、管理対象ノードに配布されていることを確認します。 2 プロセス テーブルが一杯になっていないことを確認します。一杯になっている場合は、システム管理者にプロセス テーブルを増やすように求めることを検討します。

WASSPI-206

説明	ディレクトリ *<directory>* を読み込めません。
重要度	危険
指示文	**原因** ディレクトリの権限のために OVO ユーザーがディレクトリを読み込めないか、またはディレクトリが破損しています。 **処置** このディレクトリについては、OVO ユーザーはこの権限で正しいことを確認します。

WASSPI-207

説明	*<filename>* を *<filename>* に移動できません。
重要度	危険
指示文	**原因** 1 権限が不十分です。 2 ディスクの空き領域が不十分です。 3 ファイル テーブルに問題があります。 **処置** 1 OVO ユーザーの権限が正しいことを確認します。 2 ファイルを作成するために十分なディスクの空き領域があることを確認します。 3 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。

WASSPI-208

説明	使用前に、WLSSPI を設定する必要があります。
重要度	危険
指示文	**原因** このノードでは、WLS-SPI は設定されていません。 **処置** 1 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。 2 エラーが発生した管理対象ノード上の WebLogic Server に、正しい情報を指定したことを確認します。 3 [登録アプリケーション] から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[Verify]** を選択して、Verify アプリケーションを実行し、WLS-SPI が正しく設定されていることを確認します。

WASSPI-209

説明	WebLogic Server にアクセスできません。
重要度	危険
指示文	**原因** 1 サーバーが停止中か、または応答しません。 2 WLS-SPI の設定が誤っています。 **処置** 1 WebLogic Server は作動中で、正常に動作していることを確認します。 2 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。 3 エラーが発生した管理対象ノード上の WebLogic Server に、正しい情報を指定したことを確認します。 4 [登録アプリケーション] から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[Verify]** を選択して、Verify アプリケーションを実行し、WLS-SPI が正しく設定されていることを確認します。

WASSPI-210

説明	WLSSPI を設定できません。
重要度	危険
指示文	**原因** WLS-SPI 設定プロセスが失敗しました。 **処置** 1 WLS-SPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題の根本的な原因を特定します。このエラー メッセージの前のエラー メッセージに問題の詳細が表示されています。**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **View Error File** アプリケーションを使用して管理対象ノードの WLS-SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付 / タイムスタンプで識別できます。 2 WLS-SPI を再インストールします。 3 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。

WASSPI-211

説明	ディレクトリ *<directory>* を作成できません。
重要度	危険
指示文	**原因** OVO ユーザーがディレクトリを作成するには権限が不十分であるか、またはディスクの空き領域が不十分です。 **処置** OVO ユーザーにはこのディレクトリについての正しい権限があり、十分なディスクの空き領域があることを確認します。

WASSPI-213

説明	プログラム *<name>* へのパラメータが不正です。用法 : *<usage>*.
重要度	危険
指示文	**原因** プログラムのパラメータが不正です。 **処置** パラメータを修正します。

WASSPI-214

説明	プログラム *<program_name>* を実行できません。
重要度	危険
指示文	**原因** プログラムの実行に失敗しました。プログラムが欠落しているか、権限が正しくないか、またはプロセス テーブルが一杯になっている可能性があります。 **処置** 1 ファイルが存在することを確認します。これが WLS-SPI プログラムで、ファイルが欠落している場合は、WLS-SPI を再インストールし、[登録アプリケーション] から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。 2 OVO ユーザーの権限が正しいことを確認します。

WASSPI-215

説明	WebLogic Server は、*<directory>* に見つかりませんでした。
重要度	危険
指示文	**原因** WLS-SPI の設定で HOME と指定されているディレクトリは、管理対象ノードにありません。 **処置** 1 WebLogic Server が管理対象ノードにインストールされていることを確認します。 2 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。 3 エラーが発生した管理対象ノード上の HOME には、正しい情報が指定されていることを確認します。

WASSPI-216

説明	サーバー *<server_name>* 用の設定変数 *<name>* がありません。
重要度	危険
指示文	**原因** 要求された WLS-SPI の設定プロパティは見つかりません。 **処置** 1 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。 2 エラーが発生した管理対象ノード上の設定には、正しい情報が指定されていることを確認します。

WASSPI-218

説明	*<server_name>* の WebLogic 監視は Off になっています。
重要度	注意
指示文	**原因** 指定したサーバーの収集はオフになっています。 **処置** 必要があれば、管理対象ノードの WLS-SPI の設定ディレクトリにある `SiteConfig` ファイルの設定を `COLLECT = ON` としてオンにできます。この設定ディレクトリは、UNIX プラットフォーム上では `/var/opt/OV/wasspi/wls/conf/` または `/var/opt/OV/conf/wls/`、Windows プラットフォーム上では `/usr/OV/wasspi/wls/conf/` にあります。

WASSPI-219

説明	*<server_name>* の WebLogic 監視は ON になっています。
重要度	危険
指示文	**原因** 指定したサーバーの収集はオンになっています。 **処置** 必要があれば、管理対象ノードの WLS-SPI の設定ディレクトリにある `SiteConfig` ファイルの設定を `COLLECT = OFF` としてオフにできます。この設定ディレクトリは、UNIX プラットフォーム上では `/var/opt/OV/wasspi/wls/conf/` または `/var/opt/OV/conf/wls/`、Windows プラットフォーム上では `/usr/OV/wasspi/wls/conf/` にあります。

WASSPI-221

説明	*<filename>* は存在しません。
重要度	危険
指示文	**原因** 指定されたファイルは存在しません。これがログ ファイルである場合は、ログ ファイルに記録されているエントリはありません。これがプロパティ ファイルである場合は、設定が行われていません。 **処置** • ログ ファイル - ファイルに書き込むエントリがない場合は、アクションは不要です。そうでない場合は、[登録アプリケーション] から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。 • プロパティ ファイル - [登録アプリケーション] から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。

WASSPI-222

説明	*<filename>* が空白です。
重要度	危険
指示文	**原因** 指定されたファイルは空白です。これがログ ファイルである場合は、ログ記録されたエントリがないか、またはエントリが消えています。これがプロパティ ファイルである場合は、正しく設定されていません。 **処置** • ログ ファイル - ファイルに書き込むエントリがない場合は、アクションは不要です。そうでない場合は、[登録アプリケーション] から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。 • プロパティ ファイル - [登録アプリケーション] から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。 • 設定 - [登録アプリケーション] から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。

WASSPI-223

説明	ファイル *<filename>* を読み込めません。
重要度	危険
指示文	**原因** 1 ファイルは開かないか、または見つかりません。 2 権限が正しくないか、またはディレクトリが破損しています。 **処置** 1 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。エラーが発生した管理対象ノード上の WebLogic Server に、正しい情報を指定したことを確認します。 2 OVO ユーザーがこのファイルを読み込むには、この権限で正しいことを確認します。

WASSPI-224

説明	ddfcomp は、*<name>* の設定エラーを返しました。
重要度	危険
指示文	**原因** ddfcomp はエラーを返しました。MeasureWare と CODA がシステムにインストールされていないか、または、MeasureWare または CODA が正しく設定されていません。 **処置** 1 MeasureWare と CODA がインストールされていない場合、このエラーは無視できます。 2 ステップを特定して、問題を再現します。 3 トレース記録をオンにして (**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **Start Tracing** アプリケーションを使用)、問題を再現します。利用可能なアプリケーションの詳細については、16 ページの「アプリケーション」を参照してください。 トレース記録情報は、`/<OvAgentDir>/wasspi/wls/log/trace.log` (アーカイブ ファイルには 3 桁の数値が filename に追加されます) に保存されます。ここで、`/<OvAgentDir>/` は通常、`/var/opt/OV/` です。 4 前のステップで収集した情報を HP のサポート担当者に連絡してください。

WASSPI-225

説明	ログファイルが見つかりません。WLSSPI Config を実行したことを確認してください。
重要度	危険
指示文	**原因** ログファイル リストは空白です。 **処置** 1 WLS-SPI を再インストールします。 2 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。

WASSPI-226

説明	ファイル *<filename>* を読み込めません。
重要度	危険
指示文	**原因** 1 ファイルは開かないか、または見つかりません。 2 権限が正しくないか、またはディレクトリが破損しています。 **処置** 1 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。 2 エラーが発生した管理対象ノード上の WebLogic Server に、正しい情報を指定したことを確認します。 3 OVO ユーザーがこのファイルを読み込むには、この権限で正しいことを確認します。

WASSPI-227

説明	ファイル *<filename>* を読み込めません。
重要度	危険
指示文	**原因** システムには OpenView エージェントがインストールされていません。 **処置** Performance Agent が必要である場合は再インストールします。そうでない場合は、このメッセージは無視できます。

WASSPI-228

説明	ddflog は、*<logfile-name>*: *<system-error-msg>* のログ記録エラーを返しました。
重要度	注意
指示文	**原因** ddflog はエラーを返しました。このエラーは、パフォーマンス データのログ記録をサポートするように WLS-SPI が正しく設定されていないために発生しました。 **処置** 1 問題が発生したノードで、WLS-SPI を再設定します。 2 そう でない場合は、システム エラー メッセージがあれば、これを 手がかり に問題を 調査します。 3 トレース記録をオンにして (**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **Start Tracing** アプリケーションを使用)、問題を再現します。利用可能なアプリケーションの詳細については、16 ページの「アプリケーション」を参照してください。 トレース記録情報は、`/<OvAgentDir>/wasspi/wls/log/trace.log` (アーカイブ ファイルには 3 桁の数値が filename に追加されます) に保存されます。ここで、`/<OvAgentDir>/` は通常、`/var/opt/OV/` です。 4 前のステップで収集した情報を HP のサポート担当者に連絡してください。

WASSPI-229

説明	ディレクトリ *<directory_name>* にアクセスできません。
重要度	注意
指示文	**原因** ディレクトリが存在しないか、またはエージェントを実行しているユーザーがディレクトリへの適正な権限を持っていません。 **処置** Performance Agent が必要である場合は再インストールします。そうでない場合は、このメッセージは無視できます。

WASSPI-230

説明	*<time-interval>* 経過後の *<filename>* をロックできません。
重要度	危険
指示文	**原因** WLS-SPI プロセスがハングしているか、または予想よりも長い時間がかかっています。 **処置** 1 管理対象ノードの OVO エージェントを停止します。すべての OVO と WebLogic プロセスが停止したことを確認します。 2 ロック ファイルがまだそこにあるかどうかを確認します。ある場合は、それを削除します。 3 エージェントを再起動します。

WASSPI-231

説明	Java ランタイム エンジンを起動できません。
重要度	危険
指示文	**原因** 1 `SiteConfig` ファイルの `JAVA_HOME` プロパティが正しく設定されていません。 2 Java がユーザーのシステムに正しくインストールされていません。 **処置** 1 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。 2 エラーが発生した管理対象ノード 上に `JAVA_HOME` の正しい情報を指定したことを確認します。

WASSPI-232

説明	コマンド行ではサーバー *<name>* が指定されていますが、設定では指定されていません。
重要度	危険
指示文	**原因** 1 `-i` または `-e` オプションは `wasspi_wls_ca` コマンド行で指定されていますが、サーバー名は `SiteConfig` ファイルで指定されていません。 2 Java がユーザーのシステムに正しくインストールされていません。 **処置** 1 コマンド行で正しいサーバー名を指定します。 2 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。 3 設定で正しいサーバー名を指定したことを確認します。

WASSPI-233

説明	WLS 5.x サーバー *<name>* の高度な監視はできません。
重要度	注意
指示文	**原因** 1 WebLogic Server バージョン 5 インスタンスからのメトリックの取得を試みました。 2 メトリックと高度な監視は、WebLogic Server バージョン 5 ではサポートされていません。 **処置** 1 `wasspi_wls_ca` のコマンド行では、WebLogic Server バージョン 5 を指定しません。 2 **[登録アプリケーション]** から、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[WLSSPI Config]** を選択して、Config WLSSPI アプリケーションを実行します。 3 正しいサーバー バージョンを指定したことを確認します。 4 WebLogic Server をバージョン 6.0 以上にアップグレードします。

WASSPI-234

説明	プログラム *<file>* の実行中にエラーが発生しした。戻り値 : *<n>*
重要度	危険
指示文	**原因** SPI がツールまたは補助プログラムを実行しようとしましたが、そのときにエラーが発生しました。メッセージの *<file>* はツールまたはプログラムを示し、*<n>* は戻り値を示します。 **処置** ツールが SPI ツールの場合、SPI のインストールと設定が正しく行われていることを確認します。正しく行われていない場合は、SPI のインストールまたは設定を再度行います。システム ツールの場合は、システムにツールの実行を妨げる問題がないかどうかを確認します。

WASSPI-235

説明	MeasureWare エージェントの再起動に失敗しました。
重要度	注意
指示文	**原因** SPI が MeasureWare エージェントを自動的に再起動しようとしましたが、失敗しました。 **処置** **`mwa restart server`** コマンドを使用して MeasureWare エージェントを手動で再起動します。

WASSPI-236

説明	スタイルシート *<xsl>* を持つ *<xml>* で XSLT を実行するとき、エラーが発生しました。*<message>*
重要度	危険
指示文	**原因** ユーザー定義メトリックのグラフ作成準備の一環として、UDM XML の変換が行われます。このメッセージは、変換の失敗を示します。 **処置** *<message>* を確認します。最も可能性が高いのは、XML の誤りです。ユーザー定義メトリック定義の正しい形式の詳細については、『HP OpenView Smart Plug-in User Defined Metrics User Guide』を参照してください。

WASSPI-237

説明	データ ソース *<datasource>* を設定しています。
重要度	情報
指示文	これは情報メッセージであり、このデータ ソースが現在作成中で、レポートおよびグラフ作成の各種ツールに使用できることを示します。

WASSPI-238

説明	ユーザー定義メトリックが見つかりません。
重要度	注意
指示文	**原因** UDM Graph Enable アプリケーションが実行されましたが、UDM メトリック定義が存在しません。 **処置** UDM XML ファイルの名前が正しく設定されていることを確認します。**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする Config WLSSPI アプリケーションを実行し、`UDM_DEFINITIONS_FILE` プロパティが正しく設定されていることを確認します。

WASSPI-241

説明	ファイル *<file>* を削除できません。
重要度	危険 / 注意
指示文	**原因** SPI がファイルを削除しようとしましたが、削除できませんでした。ファイル保護機能が OVO ユーザーによるファイル削除を許可しないように設定されているか、ファイルの削除を妨げる問題がシステムで発生している可能性があります。 **処置** ファイル保護の設定が正しいことを確認します。

WASSPI-302

説明	OVO サーバーで WLS-SPI の設定を更新しています。
指示文	これは、WebLogic Discovery で実行される正常な処理です。処理が正常に行われると、このメッセージの [A] (アクション) 列のエントリが R (実行中) から S (成功) に変わります。 ただし、この列のエントリが F (失敗) に変わった場合、処理は正常に行われていません。このノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを再度実行してください。 問題が引き続き発生する場合は、『HP OpenView Smart Plug-in for BEA WebLogic Server 設定ガイド』を参照してください。「WLS-SPI の設定」という章で、WLS-SPI の手動設定の方法について説明しています。

WASSPI-303

説明	OVO サーバーで WebLogic SPI の設定が更新されました。
指示文	WebLogic Discovery が管理対象ノードで WebLogic Server を検出しました。WebLogic Discovery は、OVO サーバーの WLS-SPI の設定を更新しました。

WASSPI-304

説明	WebLogic Server が見つかりません。
指示文	**原因** ノードに WebLogic Server がインストールされていません。 **処置** WebLogic Server がノードにインストールされていないことを確認します。
	原因 このノードには実行中の WebLogic Server がありません。 **処置** このノードで「Weblogic Discovery」アプリケーションを実行する前に、この SPI で監視するすべての WebLogic Server が実行中であることを確認してください。Weblogic Discovery の実行時に実行されている WebLogic Server のみが自動的に設定されます。 WebLogic Server が実行中かどうかを確認するには、WebLogic Administration Console でステータスをチェックします。WebLogic Server の起動後、「WebLogic Discovery」アプリケーションを再度実行してください。このアプリケーションを起動する前に、このノードを必ず選択してください。
	原因 Discovery がこのノードで実行中の WebLogic Server をすべて検出するには、さらに情報が必要です。 **処置** 「Config WLSSPI」アプリケーションを使用してこのノードに以下のプロパティを設定します。アプリケーションを起動する前に、このノードを必ず選択してください。 • `JAVA_HOME` - このノードで実行中の WebLogic Server で使用される java インストール ディレクトリ。WebLogic が複数インストールされている場合、1 つの java インストール ディレクトリを選択します。たとえば、`JAVA_HOME=/opt/bea/jdk1.3.1` です。 • `HOME_LIST` - このノードに存在するすべての WebLogic Server のインストール ディレクトリをセミコロンで区切ったリスト。たとえば、`HOME_LIST=/opt/weblogic6.1;/opt/weblogic7` と指定します。 入力した値が正しいことを確認してください。たとえば、`HOME_LIST=<home_dir1>;<home_dir2>` と指定し、`<home_dir1>` が WebLogic 6.0 または 6.1 のホーム ディレクトリの場合、ファイル `<home_dir1>/lib/weblogic.jar` が存在することを確認します。`<home_dir1>` が WebLogic 7 または 8 のホーム ディレクトリの場合、ファイル `<home_dir1>/server/lib/weblogic.jar` が存在することを確認します。 • `ADMIN_PORTS` - WebLogic Admin サーバーがリスンしているポートをセミコロンで区切ったリスト。WebLogic Server が仮想 IP アドレスでリスンしている場合、以下のようにそのアドレスも指定してください。たとえば、`ADMIN_PORTS=15.8.155.197:7001;7045` のようにします。ここで、15.8.155.197 は、サーバーがリスンしている仮想 IP アドレスです。 • `LOGIN=<weblogic_user_id>` および `PASSWORD=<weblogic_user_password>` - *<weblogic_user_id>* はこの SPI でサーバーを監視するために使用する WebLogic ユーザーであり、*<weblogic_user_password>* は、そのユーザーのパスワードです。 注意 : このノードに複数の WebLogic Admin サーバーがあり、それらのサーバーが同一のログインおよびパスワードを共有していない場合、[Set Access Info for Default Properties] ウィンドウで `[LOGIN]` と `[PASSWORD]` を最もよく使用される WebLogic ログインおよびパスワードに設定します。[Customize] を選択して設定エディタを起動し、サーバー固有レベルで `LOGIN`、`PASSWORD`、`NAME`、および `PORT` の各プロパティを設定します。`NAME` は WebLogic Admin サーバーの名前、`PORT` は Admin サーバーがリスンするポートです。 ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。

指示文 (続き)	**原因** LOGIN、PASSWORD、NAME、HOME_LIST、または ADMIN_PORTS に指定された値に誤りがあります。 **処置** OVO コンソールでノードを選択し、「Config WLSSPI」アプリケーションを起動します。ログインとパスワードが正しいことを確認します。HOME_LIST に割り当てられた値が正しいことを確認します。 たとえば、HOME_LIST=<home_dir1>;<home_dir2> と指定し、<*home_dir1*> が WebLogic 6.0 または 6.1 のホーム ディレクトリの場合、ファイル <home_dir1>/lib/weblogic.jar が存在することを確認します。<*home_dir1*> が WebLogic 7 または 8 のホーム ディレクトリの場合、ファイル <home_dir1>/server/lib/weblogic.jar が存在することを確認します。 ADMIN_PORTS プロパティに指定されたポートが WebLogic Admin サーバーのポートであり、それらのポートが実行中であることを確認します。ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。
	問題が引き続き発生する場合は、『HP OpenView Smart Plug-in for BEA WebLogic Server 設定ガイド』を参照してください。「WLS-SPI の設定」という章で、WLS-SPI の手動設定の方法について説明しています。 手動による設定が失敗する場合は、以下の手順を実行してください。 1 ノードを選択し、「WLSSPI Admin」アプリケーション グループの「Gather Info」アプリケーションを実行します。 2 HP OpenView のサポート担当者に連絡します。

WASSPI-321

説明	BEA ホーム ディレクトリ <*directory*> は無効です。
指示文	**原因** ノードに BEA_HOME_LIST プロパティが設定されていますが、ディレクトリ (メッセージに表示されるディレクトリ) は有効な BEA ホーム ディレクトリではありません。 **処置** ノードを選択し、「Config WLSSPI」アプリケーションを起動します。 ノードに BEA_HOME_LIST が設定されており、このリストに Discovery で無効とみなされたディレクトリが含まれているかどうかを確認します。 管理対象ノードにこのディレクトリが存在するかどうかを確認し、存在する場合は、このディレクトリに flicense.bea ファイルと registry.xml ファイルが含まれているかどうかを確認します。 このディレクトリが存在しない場合、またはこのディレクトリに先ほどのファイルが含まれていない場合、管理対象ノード内の正しい BEA ホーム ディレクトリを探し、「Config WLSSPI」アプリケーションを使用して BEA_HOME_LIST プロパティの値を修正します。 管理対象ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。

WASSPI-322

説明	BEA ホーム ディレクトリ *<directory>* が見つかりません。
指示文	**原因** ノードに BEA_HOME_LIST プロパティが設定されていますが、ディレクトリ (メッセージに表示されるディレクトリ) が存在しません。 **処置** ノードを選択し、「Config WLSSPI」アプリケーションを起動します。 ノードに BEA_HOME_LIST が設定されており、Discovery により存在しないことが判明したディレクトリがこのリストにが含まれているかどうかを確認します。 管理対象ノードにこのディレクトリが存在するかどうかを確認し、存在する場合は、このディレクトリに flicense.bea ファイルと registry.xml ファイルが含まれているかどうかを確認します。 このディレクトリが存在しない場合、またはこのディレクトリに先ほどのファイルが含まれていない場合、管理対象ノード内の正しい BEA ホーム ディレクトリを探し、「Config WLSSPI」アプリケーションを使用して BEA_HOME_LIST プロパティの値を修正します。 管理対象ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。

WASSPI-323

説明	BEA ホーム ディレクトリが見つかりません。
指示文	**原因** BEA ホーム ディレクトリのリストが見つかりません。ノードに WebLogic Server がインストールされていません。 **処置** WebLogic Server がノードにインストールされていないことを確認します。
	原因 WebLogic Discovery スクリプトが、ノードで BEA ホーム ディレクトリを検出しませんでした。 **処置** 「Config WLSSPI」アプリケーションを使用してこのノードに以下のプロパティを設定します。アプリケーションを起動する前に、ノードを必ず選択してください。 • `JAVA_HOME` - このノードで実行中の WebLogic Server で使用される java インストール ディレクトリ。WebLogic が複数インストールされている場合、1 つの java インストール ディレクトリを選択します。たとえば、`JAVA_HOME=/opt/bea/jdk1.3.1` です。 • `HOME_LIST` - このノードに存在するすべての WebLogic Server のインストール ディレクトリをセミコロンで区切ったリスト。たとえば、`HOME_LIST=/opt/weblogic6.1;/opt/weblogic7` と指定します。 入力した値が正しいことを確認してください。たとえば、`HOME_LIST=<home_dir1>;<home_dir2>` と指定し、`<home_dir1>` が WebLogic 6.0 または 6.1 のホーム ディレクトリの場合、ファイル `<home_dir1>/lib/weblogic.jar` が存在することを確認します。`<home_dir1>` が WebLogic 7 または 8 のホーム ディレクトリの場合、ファイル `<home_dir1>/server/lib/weblogic.jar` が存在することを確認します。 • `ADMIN_PORTS` - WebLogic Admin サーバーがリスンしているポートをセミコロンで区切ったリスト。WebLogic Server が仮想 IP アドレスでリスンしている場合、以下のようにそのアドレスも指定してください。たとえば、`ADMIN_PORTS=15.8.155.197:7001;7045` のようにします。ここで、15.8.155.197 は、サーバーがリスンしている仮想 IP アドレスです。 • `LOGIN=<weblogic_user_id>` および `PASSWORD=<weblogic_user_password>` - *<weblogic_user_id>* はこの SPI でサーバーを監視するために使用する WebLogic ユーザーであり、*<weblogic_user_password>* は、そのユーザーのパスワードです。 注意 : このノードに複数の WebLogic Admin サーバーがあり、それらのサーバーが同一のログインおよびパスワードを共有していない場合、[Set Access Info for Default Properties] ウィンドウで `[LOGIN]` と `[PASSWORD]` を最もよく使用される WebLogic ログインおよびパスワードに設定します。[Customize] を選択して設定エディタを起動し、サーバー固有レベルで `LOGIN`、`PASSWORD`、`NAME`、および `PORT` の各プロパティを設定します。`NAME` は WebLogic Admin サーバーの名前、`PORT` は Admin サーバーがリスンするポートです。 ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。

WASSPI-324

説明	WebLogic レジストリ ファイル *<filename>* を読み取ることができません。
指示文	**原因** WebLogic レジストリ ファイルが存在しません。 **処置** ノードでファイルの有無を確認します。ファイルがない場合、ファイルは手動で削除されています。`registry.xml` ファイルは、WebLogic のインストール時に BEA ホーム ディレクトリ内に作成されます。このファイルは削除しないでください。このファイルの詳細については、WebLogic のインストールに関するドキュメントを参照してください。
	原因 このファイルを含むディレクトリが、BEA ホーム ディレクトリでないにもかかわらず、ノードの `BEA_HOME_LIST` プロパティの値として設定されています。 **処置** ノードを選択し、「Config WLSSPI」アプリケーションを起動します。 ノードに `BEA_HOME_LIST` が設定されており、その値にレジストリ ファイルのディレクトリが含まれているかどうかを確認します。ノードにこのディレクトリが存在するかどうかを確認し、存在する場合は、このディレクトリに `license.bea` ファイルと `registry.xml` ファイルが含まれているかどうかを確認します。 このディレクトリが存在しない場合、またはディレクトリにこれらのファイルが含まれていない場合、ノード内の正しい BEA ホーム ディレクトリを探し、「Config WLSSPI」アプリケーションを使用して `BEA_HOME_LIST` プロパティに指定されている値を修正します。 ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。

WASSPI-325

説明	セキュリティ アクセス エラー。ポート *<port_number>* の Weblogic Server *<server>* に `LOGIN` プロパティがありません。
指示文	**原因** WebLogic Server に `LOGIN` プロパティが設定されていません。 **処置** 1 このサーバーに WebLogic ユーザーがまだ設定されていない場合、WebLogic Administration Console を使用して、この SPI でこのサーバーを監視するために使用するユーザーを作成します。 2 ノードを選択し、「Config WLSSPI」アプリケーションを起動します。このサーバーに正しい `LOGIN` プロパティと `PASSWORD` プロパティを設定します (既存の暗号化データを上書きします)。 3 ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。

WASSPI-326

説明	セキュリティ アクセス エラー。ポート *<port_number>* の Weblogic Server *<server>* に PASSWORD プロパティがありません。
指示文	**原因** WebLogic Server に PASSWORD プロパティが設定されていません。 **処置** 1 このサーバーに WebLogic ユーザーがまだ設定されていない場合、WebLogic Administration Console を使用して、この SPI でこのサーバーを監視するために使用するユーザーを作成します。 2 ノードを選択し、「Config WLSSPI」アプリケーションを起動します。このサーバーに正しい LOGIN プロパティと PASSWORD プロパティを設定します (既存の暗号化データを上書きします)。 3 ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。

WASSPI-327

説明	セキュリティ アクセス エラー。ポート *<port_number>* の Weblogic Server *<server>* に LOGIN プロパティと PASSWORD プロパティがありません。
指示文	**原因** WebLogic Server に LOGIN プロパティと PASSWORD プロパティが設定されていません。 **処置** 1 このサーバーに WebLogic ユーザーがまだ設定されていない場合、WebLogic Administration Console を使用して、この SPI でこのサーバーを監視するために使用するユーザーを作成します。 2 ノードを選択し、「Config WLSSPI」アプリケーションを起動します。このサーバーに正しい LOGIN プロパティと PASSWORD プロパティを設定します (既存の暗号化データを上書きします)。 3 ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。

WASSPI-328

説明	セキュリティ アクセス エラー。ポート *<port_number>* の Weblogic Server *<server>* の LOGIN プロパティ、PASSWORD プロパティ、またはその両方が無効です。
指示文	**原因** WebLogic Server に設定されている LOGIN、PASSWORD、またはその両方が無効です。 **処置** 1 このサーバーに WebLogic ユーザーがまだ設定されていない場合、WebLogic Administration Console を使用して、この SPI でこのサーバーを監視するために使用するユーザーを作成します。 2 ノードを選択し、「Config WLSSPI」アプリケーションを起動します。このサーバーに正しい LOGIN プロパティと PASSWORD プロパティを設定します (既存の暗号化データを上書きします)。 3 ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。

WASSPI-329

説明	ADMIN_PORTS プロパティが設定されている場合は、グローバルなログインとパスワードが必要です。
指示文	**原因** 管理対象ノードに ADMIN_PORTS プロパティが設定されていますが、設定されている LOGIN プロパティ、PASSWORD プロパティ、またはその両方がグローバルではありません。 **処置** 1 OVO コンソールで「Config WLSSPI」アプリケーションを使用して、ADMIN_PORTS プロパティに割り当てられている値を表示します。 2 WebLogic Administration Console を使用して、WLS-SPI でサーバーを監視するために使用する WebLogic ユーザーを作成します (存在しない場合)。 3 OVO コンソールで「Config WLSSPI」アプリケーションを使用して、ノードの LOGIN プロパティと PASSWORD プロパティを設定します。 注意 : ADMIN_PORTS プロパティに複数の WebLogic 管理サーバーのポートが設定されている場合、これらの WebLogic 管理サーバーに同じユーザー ID が設定されていることを確認します。それが不可能な場合は、管理サーバーに NAME、PORT、LOGIN、および PASSWORD の各プロパティを手動で設定する必要があります。 4 ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。

WASSPI-330

説明	設定されているログイン、パスワード、またはその両方がグローバルではありません。
指示文	**原因** 設定されている LOGIN プロパティまたは PASSWORD プロパティがグローバルではありません。個々の WebLogic 管理サーバーにログインとパスワードが設定されている場合、グローバルなログインとパスワードは不要です。しかし、すべての WebLogic 管理サーバーが同じログインとパスワードを共有する場合、以下の手順でグローバルな LOGIN プロパティと PASSWORD プロパティを設定できます。 **処置** 1 ノードに LOGIN プロパティと PASSWORD プロパティがまだない場合、OVO コンソールで「Config WLSSPI」アプリケーションを使用してプロパティを追加します。 2 ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。

WASSPI-381

説明	WebLogic SPI インストルメンテーションが見つかりません。
指示文	**原因** WebLogic Discovery が正しく処理を行うために必要な一部のファイルが見つかりませんでした。 **処置** アクション、コマンド、およびモニターをノードに配布します。

WASSPI-402

説明	ローカル ホストを取得できません。
指示文	**原因** 管理対象ノードのホストの IP アドレスが見つからないか、セキュリティ違反があったため、ホスト名が見つかりません。 **処置** システム管理者に連絡してください。

WASSPI-403

説明	WebLogic の Java インストール ディレクトリが見つかりません。
指示文	**原因** 管理対象ノードの各 BEA ホーム ディレクトリから Java インストール ディレクトリが手動で削除されたか、WebLogic インストール スクリプトで Java インストール ディレクトリがインストールされていません。 **処置** 1 ノード で実行中の WebLogic Server で使用される Java インストール ディレクトリを見つけます。 2 ノードを選択し、「Config WLSSPI」アプリケーションを起動します。ノードに JAVA_HOME プロパティを追加します。 3 ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。

WASSPI-404

説明	weblogic.jar ファイルが見つかりません。
指示文	**原因** WebLogic Server がノードにインストールされていません。 **処置** WebLogic Server が管理対象ノードにインストールされていることを確認します。
	原因 Discovery が WebLogic Server のインストール ディレクトリを検出できませんでした。 **処置** 1 OVO コンソールでノードを選択し、「Config WLSSPI」アプリケーションを起動します。このノードの `HOME_LIST` プロパティを設定します。 2 ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。

WASSPI-405

説明	`SiteConfig` ファイルの読み取り中にエラーが発生しました。
指示文	**原因** 権限が正しくないか、または、ファイルまたはディレクトリが破損しています。 **処置** 1 OVO エージェントのユーザーがファイル *`%OvAgentDir%`*`/wasspi/wls/conf/SiteConfig` に書き込むには、この権限で正しいことを確認します。システム管理者に連絡し、修正を依頼してください。 2 ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。 3 問題が引き続き発生する場合は、「Gather Info」アプリケーションを実行し、HP サポートに連絡します。サポート担当者に以下の情報を提供します。 — 問題再現に関する手順やその他の情報 —「Gather Info」アプリケーションで生成されたファイル

WASSPI-406

説明	ノードの WLSSPI 設定の取得がタイムアウトになりました。
指示文	**原因** 管理サーバーと管理対象ノードとの通信に失敗しました。 **処置** ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。起動に失敗する場合は、システム管理者に連絡してください。
	原因 WLSSPI 設定を取得するために管理サーバーから管理対象ノードにアクセスしましたが、2 分経過しました。 **処置** ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。
	原因 ノードで WebLogic Discovery を実行するときに「Config WLSSPI」アプリケーションが実行中でした。 **処置** 管理サーバーで「Config WLSSPI」アプリケーションが実行中でないことを確認します。ノードを選択し、「WebLogic Discovery」アプリケーションを起動します。
	原因 管理サーバーで Discovery スクリプトの実行に失敗しました。 **処置** 管理サーバー上で以下のトレース ファイルをコピーします。 `%OvInstallDir%/install/WASSPI/WLSSPI/English/Discovery/log` トレース ファイルは *<node_name>*`_disc_server.log` です。*<node_name>* は、管理対象ノードのプライマリ ノード名です。トレース ファイルにエラー メッセージが含まれている場合は、以下の手順を実行します。 1 ノードを選択し、「WLSSPI Admin」アプリケーション グループの「Gather Info」アプリケーションを実行します。 2 HP サポートに連絡し、サポート担当者に以下の情報を提供します。 — 問題再現に関する手順やその他の情報 —「Gather Info」アプリケーションで生成されたファイル

その他のすべてのエラー

説明	WLS-SPI エラー ログに不明なエラーが表示されています。
重要度	重要警戒
指示文	**処置** 1 WLS-SPI エラー ログのエラー メッセージの後にあるテキストを参照して、問題を特定します。**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **View Error File** アプリケーションを使用して管理対象ノードの SPI エラー ログを表示できます。エラー メッセージは、日付 / タイムスタンプで識別できます。 2 ステップを特定して、問題を再現します。 3 トレース記録をオンにして (**[登録アプリケーション]** → **[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** ウィンドウからアクセスする **Start Tracing** アプリケーションを使用)、問題を再現します。利用可能なアプリケーションの詳細については、16 ページの「アプリケーション」を参照してください。 トレース記録情報は、`/<OvAgentDir>/wasspi/wls/log/trace.log` (アーカイブ ファイルには 3 桁の数値が filename に追加されます) に保存されます。ここで、`/<OvAgentDir>/` は通常、`/var/opt/OV/` です。 4 前のステップで収集した情報を HP のサポート担当者に連絡してください。

A ファイルの位置

WLS-SPI 設定ファイルとエラー ログは特定のディレクトリにあります。

OVO 管理サーバーのファイルの位置

オペレーティング システム	ファイル	ファイルの位置
HP-UX	設定	/opt/OV/wasspi/wls/conf
Solaris	設定	/opt/OV/wasspi/wls/conf

管理対象ノードのファイルの位置

DCE ベースの管理対象ノード、またはすでに WLS-SPI を実行しており、非 root HTTPS エージェント環境に切り替え中の UNIX 管理対象ノード (UNIX のみ。これらのディレクトリが存在しない場合は、この後のファイル位置テーブルを参照してください):

オペレーティング システム	ファイル	ファイルの位置
HP-UX、Solaris、Linux	設定	/var/opt/OV/wasspi/wls/conf
HP-UX、Solaris、Linux	エラー ログ	/var/opt/OV/wasspi/wls/log
AIX	設定	/var/lpp/OV/wasspi/wls/conf
AIX	エラー ログ	/var/lpp/OV/wasspi/wls/log
Windows (DCE)	設定	¥usr¥ov¥wasspi¥wls¥conf
Windows (DCE)	エラー ログ	¥usr¥ov¥wasspi¥wls¥log
Windows (HTTPS)	設定	¥Program Files¥HP OpenView¥data¥wasspi¥wls¥conf
Windows (HTTPS)	エラー ログ	¥Program Files¥HP OpenView¥data¥wasspi¥wls¥log

非 root HTTPS エージェント環境で新しく設定された WLS-SPI 管理対象ノード (UNIX のみ):

オペレーティング システム	ファイル	ファイルの位置
HP-UX、Solaris、Linux	設定	`/var/opt/OV/conf/wlsspi`
HP-UX、Solaris、Linux	エラー ログ	`/var/opt/OV/log/wlsspi`
AIX	設定	`/var/lpp/OV/conf/wlsspi`
AIX	エラー ログ	`/var/lpp/OV/log/wlsspi`

B 設定

この付録には、設定構造についての詳細、設定エディタの使用方法、設定プロパティの説明、および設定例が記載されています。

構造

設定例については、166 ページの「サンプル設定」を参照してください。設定の基本構造は以下のようになります (先頭に # が付く行はコメントとして扱われ、無視されます)。

```
# グローバル プロパティ
property=<value> ...

# GROUP ブロック
GROUP <group_name>
{
<node_name> ...
}

# NODE ブロック
NODE <node_name | group_name>
{
property=<value> ...
}
```

グローバル プロパティ

```
# グローバル プロパティ
<property>=<value> ...
```

グローバル レベルで定義されたプロパティはすべてのノードに適用されます。ただし、これらのグローバル プロパティは、GROUP または NODE ブロックで設定されるプロパティやサーバー固有のプロパティによって無効にすることができます。

GROUP ブロック

```
# GROUP ブロック
GROUP <group_name>
{
<node_name> ...
}
```

GROUP ブロックは、共通のプロパティを持つノードをまとめてグループ化するために使用します。

<group_name> は共通のプロパティを持つノード グループを識別します。GROUP ブロック <group_name> が設定の中で繰り返し定義されている場合は、最後の定義が優先されます。

<node_name> はグループのノードを一覧表示するもので、OVO で設定したプライマリ ノード名です。

GROUP ブロックで指定したノード名は、OVO で設定したプライマリ ノード名である、OVO 変数 $OPC_NODES が返す値に一致します。

NODE ブロックを使用してグループの共通プロパティを設定します。

設定エディタを使用して、<Group_Name> フォルダの [Default Properties] 項目を選択し、GROUP ブロックのプロパティを表示、設定、または編集します。

NODE ブロック

```
# NODE ブロック
NODE <node_name | group_name>
{
<property>=<value> ...
}
```

NODE ブロックで設定されるプロパティは、(グループの共通プロパティを設定するために) <group_name> によって定義されるグループまたは (単一のノードのプロパティを設定するために) 指定される <node_name> に属すノードに適用されます。

グループについては、GROUP ブロックで定義される <group_name> を入力して、グループの共通プロパティを定義します。

単一のノードについては、<node_name> を入力して、プロパティを定義します。

NODE ブロックでプロパティが繰り返し定義されている場合は、最後の定義が優先されます。

設定エディタを使用して、<Node_Name> フォルダの [Default Properties] 項目を選択し、NODE ブロック プロパティを表示、設定、または編集します。

サーバー固有のプロパティ

SERVER<*n*>_*property* として指定される各プロパティは、WebLogic Server 固有のインスタンスを参照します。複数の WebLogic Server インスタンスが指定の管理対象ノードで動作している場合は、番号 <*n*> でサーバーを区別します。番号は「1」から始まり、WebLogic Server の各インスタンスには一意の番号が割り当てられます。

プロパティ優先順位

設定で定義されるプロパティの優先順位 (高い順) は以下のようになります。

1. SERVER<*n*>_property (サーバー固有)
2. NODE <*node_name*> {<*property*>} (ノードについて定義されたプロパティ)
3. NODE <*group_name*> {<*property*>} (グループについて定義されたプロパティ)
4. <*property*> (グローバル プロパティ)

設定エディタの使用法

設定エディタを使用して、設定を表示し、編集します。設定の更新にはこのエディタのみを使用する必要があります。

設定エディタの主な機能には、以下のものがあります。

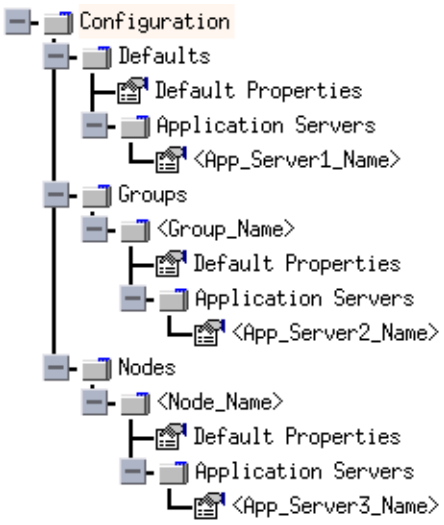
- ツリー
- ボタン
- アクション

Config WLSSPI - ツリー

Config WLSSPI アプリケーションのメイン ウィンドウの左側のペインに表示される Config WLSSPI ツリーには、ツリー構造の WLS-SPI 設定が表示されます。

以下にツリーの例を示します。

アプリケーション サーバーまたはグループが設定されていない場合は、[Application Servers] フォルダおよび [Groups] フォルダは表示されません。Config WLSSPI を初めて実行していて、ツールを起動する前にノードを選択しなかった場合、[Nodes] フォルダは表示されません。



ここで、アイコンは以下のように定義されます。

設定プロパティを表示できます。

設定プロパティを表示して、設定できます。

以下の表は、ツリーの各項目とその項目についての簡単な説明を一覧表示しています。

項目名	説明
Application Servers	すべてのアプリケーション サーバーのリストを含むフォルダ。このフォルダは、Defaults (グローバル プロパティ)、Group_Name(s) (GROUP ブロック)、または Node_Name(s) (NODE ブロック) の下で表示できます。
<Application_Server_Name>	WebLogic Server で定義されるサーバー名
Configuration	WebLogic 環境についてのすべての WLS-SPI 設定情報を含むフォルダ
Default Properties	設定されている設定プロパティを一覧表示します。この項目は、Defaults (グローバル プロパティ)、Group_Name(s) (GROUP ブロック)、または Node_Name(s) (NODE ブロック) の下に表示されます。
Defaults	グローバル プロパティを表すフォルダ。このレベルで設定されたデフォルト プロパティは、すべてのノード に適用されます。ただし、これらのプロパティは、Group_Name と Node_Name フォルダで設定したプロパティで無効にできます (詳細については、142 ページの「プロパティ優先順位」を参照してください)。
Groups	GROUP ブロックを表すフォルダ
<Group_Name>	共通プロパティを持つノード グループの名前を識別するフォルダ。このレベルで設定されたデフォルト プロパティは、指定されたグループに属するすべてのノードに適用されます。これらのプロパティは、Node_Name フォルダで設定されたプロパティで無効にできます (詳細については、142 ページの「プロパティ優先順位」を参照してください)。
Nodes	NODE ブロックを表すフォルダ
<Node_Name>	OVO で設定したプライマリ ノード名である、OVO 変数 `$OPC_NODES` が返す値と名前が一致する、単一のノードを表すフォルダ。このレベルで設定されるデフォルト プロパティは、指定されたノードのみに適用されます (詳細については、142 ページの「プロパティ優先順位」を参照してください)。

Config WLSSPI - ボタン

以下のボタンが Config WLSSPI で利用可能です。

ボタン	説明
Cancel	Config WLSSPI を終了します。 設定プロパティを設定しても保存しないと、これらの変更は保存されません。 アプリケーション サーバー、ノード、またはグループを追加または削除して、変更を保存しなかったり、設定プロパティを変更したりした場合は、[Confirm Cancel] ウィンドウが表示されます。変更を保存して終了するには **[Save and Exit]**、変更を保存しないで終了するには **[Exit without Save]**、また、設定の編集を続行するには **[Return to Editing]** (変更は保存されない) を選択します。
Finish	Config WLSSPI を終了します。ノードを選択しないで Config WLSSPI を起動すると、**[Next]** ボタンが代わりに表示されます。
Next	Config WLSSPI を終了します。Config WLSSPI を起動する前に選択したノードを一覧表示する [Confirm Operation] ウィンドウが表示されます。選択した管理対象ノードの設定は、ユーザーの変更で更新されます。選択していなかったノード ([Confirm Operation] ウィンドウには表示されません) に変更を加えた場合、その変更は OVO 管理サーバーの設定には保存されますが、その管理対象ノードの設定を変更するには、登録ノードからそれらの管理対象ノードを選択して、Config WLSSPI を再起動してから、終了する必要があります。
Save	OVO 管理サーバーの設定の変更を保存し、設定の編集を続行します。**[File]** → **[Save]** を選択して、変更を保存することもできます。

Config WLSSPI - アクション

実行できるアクションは、ツリーで選択した項目とアクションにアクセスする場所によって異なります。以下のアクションは、[File] メニューの [Actions] メニューから、またはツリーの項目を右クリックして、アクセスできます。

アクション	説明	選択されたツリー項目
Add Application Server	アプリケーション サーバーを追加します。詳細については、146 ページの「Add Application Server」を参照してください。	Application Servers Defaults *<Group_Name>* *<Node_Name>*
Add Group	共通プロパティを持つノードを割り当てられるグループを作成します。詳細については、147 ページの「Add Group」を参照してください。	ツリーのあらゆる項目 ツリーのあらゆる項目
Add Node	管理対象ノードを [Nodes] フォルダに追加します。詳細については、147 ページの「Add Node」を参照してください。	ツリーのあらゆる項目 ツリーのあらゆる項目

アクション	説明	選択されたツリー項目
Exit	Config WLSSPI アプリケーションを終了します。このアクションは、[File] メニューから利用可能です。変更が保存されなかった場合は、[Confirm Cancel] ウィンドウが表示されます。	ツリーのあらゆる項目 ツリーのあらゆる項目
Remove Application Server/Remove ALL App Servers	1 つのアプリケーション サーバーまたは一覧表示されたすべてのアプリケーション サーバーを削除します。詳細については、148 ページの「Remove Application Server/Remove ALL App Servers」を参照してください。	Application Servers *<Application_Server_Name>*
Remove Group/ Remove ALL Groups	1 つの WLS-SPI グループまたはすべての一覧表示された WLS-SPI グループを削除します。詳細については、148 ページの「Remove Group/Remove ALL Groups」を参照してください。	Groups *<Group_Name>*
Remove Node/Remove ALL Nodes	1 つまたはすべての管理対象ノードを削除します。詳細については、149 ページの「Remove Node/Remove ALL Nodes」を参照してください。	Nodes *<Node_Name>*
Save	変更を設定に保存します。このアクションは設定に変更を加えた場合のみ、[File] メニューから利用可能です。	ツリーのあらゆる項目 ツリーのあらゆる項目
[Set Configuration Properties] タブ	WLS-SPI 設定プロパティを設定します。詳細については、149 ページの「[Set Configuration Properties] タブ」を参照してください。	*<Application_Server_Name>* Default Properties
[View Current Configuration] タブ	WLS-SPI 設定プロパティを表示します。詳細については、150 ページの「[View Current Configuration] タブ」を参照してください。	ツリーのあらゆる項目 ツリーのあらゆる項目

Add Application Server

WLS-SPI 設定のグローバル プロパティ、GROUP、または NODE レベルで WebLogic Server のインスタンスを追加します。

ノードでサーバー名が重複している (NAME プロパティが同じ値に設定されている) 場合は、(各サーバーを一意に識別するために) ALIAS プロパティ設定のプロンプトが表示されます。ALIAS プロパティの詳細については、153 ページの「プロパティの定義」を参照してください。

アプリケーション サーバーを追加するには、以下の手順を実行します。

1 ツリーの以下の項目の 1 つを右クリックします。Defaults (グローバル プロパティ レベル)、Application Servers (グローバル プロパティ レベル)、*<Group_Name>* (GROUP レベル)、または *<Node_Name>* (NODE レベル) 。次に、**[Add Application Server]** を選択します。

   [WLSSPI Configure Tool: Add App Server] ウィンドウが表示されます。

2 [Application Server Name] を入力します。これは、WebLogic Server で定義されたアプリケーション サーバーの名前で、大文字と小文字とを区別します。WebLogic Administration Console には、ドメインにあるすべての設定されたアプリケーション サーバーのサーバー名が表示されます。これらの名前を [Application Server Name] に使用します。

3 [Application Server Port] を入力します。これは、WebLogic Server がリスンするポートです。WebLogic Administration Console には、ドメインにあるすべての設定されたアプリケーション サーバーのポート番号が表示されます。これらを [Application Server Port] に使用します。

4 **[OK]** を選択します。

   `NAME` と `PORT` プロパティが設定されます。

   アプリケーション サーバーが追加され、そのプロパティが表示されます。このサーバーに追加の設定プロパティを設定することもできます。詳細については、149 ページの「[Set Configuration Properties] タブ」を参照してください。

5 **[Save]** を選択して、変更を保存します。

   このアプリケーション サーバーを追加したくない場合は、アプリケーション サーバー名を右クリックし、**[Remove Application Server]** を選択してから、**[Save]** を選択します。

Add Group

ノードを WLS-SPI 設定で共通プロパティを持っているグループに割り当てます。

グループを追加するには、以下の手順を実行します。

1 ツリーの項目を右クリックし、**[Add Group]** を選択します。

   [WLSSPI Configure Tool: Configuration Editor: Add Group] ウィンドウが表示されます。

2 [Enter the name of the Group] にグループ名を入力します。このグループ名は共通プロパティを持つノード グループを識別し、大文字と小文字とを区別しません。

3 **[了解]** を選択します。

   グループが追加され、そのグループの [Set Configuration Properties] タブが表示されます。

4 **[Add Node to Group]** を選択し、リストからノードを 1 つ選択してグループに追加し、**[了解]** を選択します。すべてのノードをグループに追加し終えるまでこのステップを繰り返します。

5 **[Select a Property to Set]** プルダウン リストを使用して、このグループの設定プロパティを設定します。詳細については、149 ページの「[Set Configuration Properties] タブ」を参照してください。

6 **[Save]** を選択して、変更を保存します。

   このグループを追加したくない場合は、グループ名を右クリックし、**[Remove Group]** を選択してから、**[Save]** を選択します。

Add Node

管理対象ノードを WLS-SPI 設定に追加します。

ノードを追加するには、以下の手順を実行します。

1 ツリーのいずれかの項目を右クリックし、**[Add Node]** を選択します。

   設定に追加できる追加の管理対象ノードがない場合は、メッセージ `All available managed nodes have been added to the configuration` が表示されます。**[了解]** をクリックして、このアクションを終了します。

   そうでない場合は、[WLSSPI Configure Tool: Configuration Editor: Add Node] ウィンドウが表示されます。

2 プルダウン メニューから、追加するノードを選択します。

3 **[OK]** を選択します。

ノードが追加され、そのノードの [Set Configuration Properties] タブが表示されます。

4 **[Select a Property to Set]** プルダウン リストを使用して、このノードの設定プロパティを設定します。詳細については、149 ページの「[Set Configuration Properties] タブ」を参照してください。

5 **[Save]** を選択して、変更を保存します。

このノードを追加したくない場合は、ノード名を右クリックし、**[Remove Node]** を選択してから、**[Save]** を選択します。

Remove Application Server/Remove ALL App Servers

1 つの WebLogic Server またはすべての一覧表示された WebLogic Servers を WLS-SPI 設定から削除します。

アプリケーション サーバーを削除するには、以下の手順を実行します。

1 アプリケーション サーバー名を右クリックし、**[Remove Application Server]** を選択します。

選択されたアプリケーション サーバー名はリストから削除され、その設定プロパティは設定から削除されます。

2 **[Save]** を選択して、そのアプリケーション サーバーを永久に削除します。

[Cancel] を選択して、アプリケーション サーバーの削除をキャンセルします (このアプリケーション サーバー名は、Config WLSSPI を次回実行するときに表示されます)。[Confirm Cancel] ウィンドウで、**[Exit without Save]** を選択します。

すべてのアプリケーション サーバーを削除するには、以下の手順を実行します。

1 [Application Servers] フォルダを右クリックして、**[Remove ALL App Servers]** を選択します。

選択された [Application Servers] フォルダと選択されたフォルダに一覧表示されたすべてのアプリケーション サーバーが削除されます (一覧表示されたアプリケーション サーバーのすべての設定プロパティが設定から削除されます)。

2 **[Save]** を選択して、それらのアプリケーション サーバーを永久に削除します。

[Cancel] を選択して、すべてのアプリケーション サーバーの削除をキャンセルします ([Application Servers] フォルダとフォルダに一覧表示されているすべてのアプリケーション サーバー名は、Config WLSSPI を次回実行するときに表示されます)。[Confirm Cancel] ウィンドウで、**[Exit without Save]** を選択します。

Remove Group/Remove ALL Groups

WLS-SPI グループまたはすべての一覧表示された WLS-SPI グループを WLS-SPI 設定から削除します。

グループを削除するには、以下の手順を実行します。

1 グループ サーバー名を右クリックし、**[Remove Group]** を選択します。

選択されたグループはリストから削除され、その設定プロパティは設定から削除されます。

2 **[Save]** を選択して、そのグループを永久に削除します。

[Cancel] を選択して、グループの削除をキャンセルします (このグループ名は、Config WLSSPI を次回実行するときに表示されます)。[Confirm Cancel] ウィンドウで、**[Exit without Save]** を選択します。

Remove Node/Remove ALL Nodes

1 つの管理対象ノードまたはすべての一覧表示された管理対象ノードを WLS-SPI 設定から削除します。

ノードを削除するには、以下の手順を実行します。

1 ノード名を右クリックし、**[Remove Node]** を選択します。

選択されたノードはリストから削除され、その設定プロパティは設定から削除されます。

2 **[Save]** を選択して、そのノードを永久に削除します。

[Cancel] を選択して、ノードの削除をキャンセルします (このノード名は、Config WLSSPI を次回実行するときに表示されます)。[Confirm Cancel] ウィンドウで、**[Exit without Save]** を選択します。

すべてのノードを削除するには、以下の手順を実行します。

1 [Nodes] フォルダを右クリックし、**[Remove ALL Nodes]** を選択します。

選択された [Nodes] フォルダと選択されたフォルダに一覧表示されたすべてのノードが削除されます (一覧表示されたノードのすべての設定プロパティが設定から削除されます)。

2 **[Save]** を選択して、そのノードを永久に削除します。

[Cancel] を選択して、すべてのノードの削除をキャンセルします ([Nodes] フォルダとこのフォルダに一覧表示されているすべてのノード名は、Config WLSSPI を次回実行するときに表示されます)。[Confirm Cancel] ウィンドウで、**[Exit without Save]** を選択します。

[Set Configuration Properties] タブ

グローバル プロパティ レベルで、または選択したアプリケーション サーバー、グループ (GROUP レベル)、またはノード (NODE レベル) について、WLS-SPI 設定プロパティを設定します。

アイコンのついている項目だけに設定プロパティを設定できます (Default Properties と *<Application_Server_Name>*)。

項目の設定プロパティを設定するには、項目を選択して、右側のペインにある **[Set Configuration Properties]** タブをクリックします。

プロパティの設定

設定のプロパティを設定するには、以下の手順を実行します。

1 [Select a Property to Set] プルダウン メニューからプロパティを選択します。

2 **[Set Property]** を選択します。表にはプロパティと空白値フィールドが表示されます。

3 空白値フィールドをクリックして、値を入力します。

4 設定する各プロパティについて、ステップ 1 ～ 3 を繰り返します。

5 **[Save]** をクリックします。

LOGIN と PASSWORD プロパティについては、**[Set Property]** を選択すると、別のウィンドウが表示されます。このウィンドウにログインとパスワードの値を入力します。

個々のプロパティの詳細については、152 ページの「設定プロパティ」を参照してください。

プロパティの変更

設定でプロパティ (LOGIN 以外) を変更するには、以下の手順を実行します。

1 表でプロパティを選択します。

2 値フィールドをダブルクリックします。

3 値を編集します。

ノードでサーバー名が重複している (NAME プロパティが同じ値に設定されている) 場合は、(各サーバーを一意に識別するために) ALIAS プロパティ設定のプロンプトが表示されます。ALIAS プロパティの詳細については、153 ページの「プロパティの定義」を参照してください。

4 変更する各プロパティについて、ステップ 1 ～ 3 を繰り返します。

5 **[Save]** をクリックします。

設定で LOGIN プロパティを変更するには、以下の手順を実行します。

1 [Select a Property to Set] プルダウン メニューから [LOGIN/PASSWORD] を選択します。

2 [Set Property] を選択します。[Set Access Info for Default Properties] ウィンドウが表示されます。

3 新しいパスワードを入力し、パスワードを確認します。

4 **[OK]** をクリックします。

5 **[Save]** をクリックします。

個々のプロパティの詳細については、152 ページの「設定プロパティ」を参照してください。

プロパティの削除

設定からプロパティを削除するには、以下の手順を実行します。

1 表でプロパティを選択します。

2 **[Remove Property]** をクリックします。

3 削除する各プロパティについて、ステップ 1 と 2 を繰り返します。

4 **[Save]** をクリックします。

AUTO_DISCOVER: ウィンドウの一番下近くに表示される [AUTO_DISCOVER] チェック ボックスで、AUTO_DISCOVER プロパティを設定します。このチェック ボックスを選択するか、または選択解除するかによってのみ、このプロパティを設定できます。

チェック ボックスを選択する (デフォルト) と、Discovery テンプレート (配信されている場合) はサービス マップと設定にある WLS-SPI 設定情報を自動的に更新します。Discovery テンプレートが配信されていない場合、サービス マップは作成されますが更新はされません。

[View Current Configuration] タブ

OVO 管理サーバーの設定で設定されたすべての WLS-SPI 設定プロパティ、または選択されたアプリケーション サーバー、グループ、またはノードの WLS-SPI 設定プロパティが表示されます。

項目の設定プロパティを表示するには、項目を選択して、右側のペインにある **[View Current Configuration]** タブをクリックします。

以下の表は、指定された項目が選択された場合の表示を示しています。

項目名	表示の説明
Application Servers	一覧表示されたすべてのアプリケーション サーバーに設定されたすべての設定プロパティを表示します。
<Application_Server_Name>	アプリケーション サーバーに設定されたすべての設定プロパティを表示します (これらのプロパティは、**[Set Configuration Properties]** タブを選択して変更できます)。
Configurations	OVO 管理サーバーの設定に保存されたすべての設定プロパティを表示します。
Default Properties	設定されたすべての設定プロパティを表示します (これらのプロパティは、**[Set Configuration Properties]** タブを選択して変更できます)。
Defaults	グローバル プロパティ レベルで設定されたすべての設定プロパティを表示します。
Groups	すべての一覧表示されたグループに設定されたすべての設定プロパティを表示します。
<Group_Name>	特定のグループに設定されたすべての設定プロパティを表示します。
Nodes	一覧表示されたノードに設定されたすべての設定プロパティを表示します。
<Node_Name>	特定のノードに設定されたすべての設定プロパティを表示します。

View Inherited Properties

ウィンドウの一番下近くに、[View Inherited Properties] チェック ボックスが表示されます。このチェック ボックスを選択すると、設定プロパティの表示が変わって、選択した項目に影響を与えるすべての継承されたプロパティ (これらのプロパティは、グローバル プロパティ レベルまたは GROUP レベルで定義されています) が表示されます。継承されたプロパティは、プロパティの後ろに「<*>」をつけて表示されます。

このチェック ボックスを選択解除すると、選択された項目のレベルで設定された設定プロパティのみが表示されます。

継承されたプロパティは、そのプロパティが設定されたレベルでしか変更できません。プロパティの後に「<*>」がついている場合、そのプロパティはそのレベルでは変更できません。たとえば、プロパティ HOME がグローバル プロパティ レベル ([Defaults] フォルダの下) で設定されている場合は、[Defaults] フォルダの下で一覧表示される [Default Properties] でしか変更できません。HOME は (後ろに「<*>」をつけて) *<Group_Name>* の [Default Propertie] に表示されますが、このレベルでは変更できません。

ツリーで下位に設定されているプロパティは、ツリーで上位に設定されているプロパティよりも優先されます。たとえば、プロパティ HOME がグローバル プロパティ レベル ([Defaults] フォルダの下) と GROUP レベルで設定されている場合、GROUP レベル プロパティの値が優先されます。

設定プロパティの優先順位は、以下のようになります (高い順に一覧表示)。

1. サーバー固有
2. NODE レベル
3. GROUP レベル
4. グローバル プロパティ レベル

設定プロパティ

153 ページの表 14 には、WLS-SPI 要件によるすべてのプロパティが一覧表示されます。

プロパティ	プロパティ名
要件	特定のコンポーネントのプロパティ要件を一覧表示します。 **R** - 必須 : プロパティを設定する必要があります。 *C* - 条件付 : 一定の条件に合えば、プロパティを設定する必要があります。 O - オプション : コンポーネントが動作するためにプロパティは必要ありません。 ブランク - 適用不可 : プロパティはこのコンポーネントに影響を与えません。
WLS-SPI	WLS-SPI が動作するための設定要件
検出プロセス	検出プロセスが動作するための要件
自動検出	検出プロセスで自動的に設定されるプロパティ
設定のレベル	設定構造でこのプロパティが設定できるレベル
デフォルトプロパティ	設定構造のグローバル、グループ、またはノード レベル
アプリケーションサーバー	設定構造のサーバー固有のレベル

プロパティの説明については、152 ページの「設定プロパティ」を参照してください。

プロパティの定義

表 14　WLS-SPI 要件に一覧表示されるプロパティ

プロパティ	要件		自動検出	設定のレベル	
	WLS-SPI	検出プロセス		デフォルトプロパティ	アプリケーションサーバー
HOME	**R**	O	✓	✓	✓
JAVA_HOME	**R**	*C*	✓	✓	✓
LOGIN	**R**	**R**		✓	✓
NAME	**R**		✓		✓
PASSWORD	**R**	**R**		✓	✓
PORT	**R**		✓		✓
ADDRESS	*C*	O	✓[a]		✓
ADMIN_HOST	*C*		✓		✓
ADMIN_PORT	*C*		✓		✓
ADMIN_PORTS	*C*	*C*		✓	
ALIAS	*C*				✓
AUTO_DISCOVER	*C*			✓	✓
BEA_HOME_LIST	*C*	O	✓	✓	
COLLECT_METADATA	*C*	O		✓	✓
GRAPH_URL	*C*			✓	
HOME_LIST	*C*	*C*		✓	
JMB_JAVA_HOME	*C*			✓	✓
JMX_CLASSPATH	*C*			✓	✓
KEYSTORE	*C*			✓	✓
LOGFILE	*C*				✓
NODE_NAMES	*C*	*C*			✓
PASSPHRASE	*C*			✓	✓
PROTOCOL	*C*			✓	✓
RMID_PORT	*C*			✓	
RMID_START_TIME	*C*			✓	
START_CMD	*C*				✓
STOP_CMD	*C*				✓
USER	*C*			✓	✓
VERSION	*C*		✓		✓
EXCLUDE_SAMPLES	O			✓	✓
MAX_ERROR_LOG_SIZE	O			✓	
TIMEOUT	O			✓	✓
TYPE	O			✓	✓

表 14　WLS-SPI 要件に一覧表示されるプロパティ (続き)

プロパティ	要件		自動検出	設定のレベル	
	WLS-SPI	検出プロセス		デフォルトプロパティ	アプリケーションサーバー
UDM_DEFINITIONS_SOURCE	O			✓	✓

a. WebLogic Admin サーバーが仮想 IP アドレスをリスンしているリモート WebLogic Server を管理している場合、リモート WebLogic Server が動作している管理対象ノードは ADDRESS が自動的に検出されるように OVO のエイリアスで設定する必要があります。OVO で仮想 IP アドレスを設定するには、ADDRESS プロパティの説明の欄を参照してください。

表 15　設定プロパティ

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須 / 条件付 / オプション	説明
ADDRESS	6.1、7.0、8.1	**条件付** サーバーが仮想 IP アドレスで動作している場合、リモート ノードにある場合、またはそのノードのプライマリ IP アドレスを使用していない場合に必要です。	サーバーがリスンしているドメイン名または IP アドレス。設定されていない場合、WLS-SPI はノードのプライマリ アドレスを使用してサーバーに接続します。 **例** : SERVER1_ADDRESS = product.hp.com
ADMIN_HOST	6.1、7.0、8.1	**条件付** Start WLS Console アプリケーションを使用して、WebLogic コンソールの起動と停止を行いたい場合に必要です。	このサーバーを管理している WebLogic 管理サーバーが動作しているノード名。WebLogic Server Console アプリケーションを起動するために設定する必要があります。 **例** : SERVER1_ADMIN_HOST=localhost
ADMIN_PORT	6.1、7.0、8.1	**条件付** Start WLS Console アプリケーションを使用して、WebLogic コンソールの起動と停止を行いたい場合に必要です。	このサーバーの WebLogic 管理サーバーのポート。WebLogic Server Console アプリケーションを起動するために設定する必要があります。 **例** : SERVER1_ADMIN_PORT=7005

表 15　　設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須 / 条件付 / オプション	説明
ADMIN_PORTS	6.1、7.0、8.1	**条件付** WebLogic Admin サーバーのドメイン設定ファイルがデフォルト ディレクトリにない場合に必要です。	ドメイン設定ファイル (config.xml) がデフォルト ディレクトリにない WebLogic Admin サーバーのポート番号を以下に一覧表示します。 *<WebLogic_Install_Dir>*/config/*<WebLogic_Domain>*/ (WebLogic 6.x の場合) *<BEA_Home_Dir>*/user_projects/*<WebLogic_Domain>*/ (WebLogic 7 または 8 の場合) ここで、*<WebLogic_Install_Dir>* は WebLogic Server がインストールされているディレクトリであり、*<BEA_Home_Dir>* は registry.xml ファイルを格納しているディレクトリであり、*<WebLogic_Domain>* は WebLogic のドメイン名です。 WebLogic Admin サーバーが仮想 IP アドレスをリスンしている場合、ポート 番号の前にコロンで区切って、この仮想 IP アドレスを含めます (たとえば、*<virtual_ip_address>*:*<port_number>*)。 WebLogic Admin サーバーに設定された LOGIN と PASSWORD は、NODE ブロック レベルで設定される必要があります (つまり、LOGIN と PASSWORD は、同じノード上で動作しているすべての WebLogic Admin サーバーについて同じである必要があります)。このプロパティで設定するポート番号は、これらの WebLogic Admin サーバーが使用するポートです。

表 15　設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須 / 条件付 / オプション	説明

ALIAS	6.1、7.0、8.1	**条件付**
		システム上で複数のアプリケーション サーバーが同じサーバー名を共有している場合に必要です。
			システム上で複数のアプリケーション サーバーが同じサーバー名を共有している場合は、管理対象ノード上で一意の名前がアプリケーション サーバーに割り当てられます。エイリアスが設定されていれば、これがメッセージ、レポート、およびグラフで使用される名前となります (そうでない場合は、NAME を使用します)。
			エイリアスが変更される場合、古いエイリアスのデータは保存されますが、新しいエイリアスへのマップは行われません。
			例 :
			`NODE petstore.hp.com {`
			`  SERVER1_NAME=dog`
			`  SERVER1_ALIAS=beagle`
			`  SERVER2_NAME=dog`
			`  SERVER2_ALIAS=dachshund`
			`}`
			`NODE flying_ace.hp.com {`
			`  SERVER1_NAME=snoopy`
			`  SERVER1_ALIAS=beagle`
			`  SERVER2_NAME=snoopy`
			`  SERVER2_ALIAS=red_baron`
			`}`

AUTO_DISCOVER	6.1、7.0、8.1	**条件付** Discovery テンプレートによって、設定情報を自動的に上書き*されたくない*場合に必要です。	設定エディタの [AUTO_DISCOVER] チェック ボックスを選択して、サービス マップと設定にある WebLogic Server 設定情報を自動的に更新します。 WebLogic Server 設定を手動で設定していて、Discovery テンプレートによって設定情報を自動的に上書きされたくない場合は、設定エディタの [AUTO_DISCOVER] チェック ボックスを選択解除します。

表 15　　設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須 / 条件付 / オプション	説明
BEA_HOME_LIST	6.1、7.0、8.1	**条件付** WebLogic Server ソフトウェア レジストリが管理対象ノード上に存在しない場合に必要です。	すべての WebLogic 製品が使用するソフトウェア レジストリ。これには、システムにインストールされているすべての WebLogic 製品についての情報が含まれています。 WebLogic Server をインストールするために BEA のインストール スクリプトを使用しなかった場合、ソフトウェア レジストリは作成されません。 Windows 管理対象ノード上では、ソフトウェア レジストリはファイル beahomelist に作成されるか、または BEAHOMELIST レジストリで定義されます。UNIX 管理対象ノード上では、ソフトウェア レジストリはファイル $HOME/beahomelist で作成されます。ここで $HOME は WebLogic Server をインストールしたユーザーのホーム ディレクトリです。 UNIX 管理対象ノード上では、スペースを含むディレクトリ名は現在、サポートされていません。 ソフトウェア レジストリが存在せず、このプロパティが設定されていない場合、Discovery テンプレートはエラー メッセージを生成します (WASSPI-361、WASSPI-362、WASSPI-363、または WASSPI-382)。
COLLECT	6.1、7.0、8.1	**必須**	デフォルト : ON。「ON」を入力すると、WebLogic Server のメトリックが自動的に収集されます。検出プロセスが失敗した場合、このプロパティは「OFF」に設定されます。「OFF」を入力すると、メトリックが収集されないようになります。 **例** : COLLECT = OFF

表 15　設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須 / 条件付 / オプション	説明
COLLECT_METADATA	6.1、7.0、8.1	**条件付** JMX Metric Builder アプリケーションで MBean Exolorer を使用する場合に必要です。	デフォルト : OFF。「ON」を入力すると JMX Metric Builder アプリケーションによって表示されるメタデータ (MBean 情報) が収集されます。このメタデータを使用して UDM (ユーザー定義メトリック) が作成されます。 各 MBean サーバーのメタデータは、/var/opt/OV/wasspi/wls/metadata/<*managed_node*>/<*NAME*|*ALIAS*>.xml、/var/opt/OV/metadata/wls/<*managed_node*>/<*NAME*|*ALIAS*>.xml、または \<*%OvAgentDir%*>\wasspi\wls\metadata\<*managed_node*>\<*NAME*|*ALIAS*>.xml ファイルに保存されます。ここで NAME および ALIAS は管理対象ノードに対して設定されるプロパティであり、ALIAS は設定された場合は必ず使用されます。
EXCLUDE_SAMPLES	6.1、7.0、8.1	**オプション**	デフォルト : false。「true」を入力して、WebLogic Server サンプル プログラムを*検出しない*ようにすると、検出プロセスの実行にかかる時間が短縮されます。サンプル プログラムは、以下のディレクトリにあります。 WebLogic 6.1 <*WL_Install_Dir*>/config/examples <*WL_Install_Dir*>/config/petstore WebLogic 7 と 8 <*WL_Install_Dir*>/samples **例** : EXCLUDE_SAMPLES = true
GRAPH_URL	6.1、7.0、8.1	**条件付** View Graphs アプリケーションを使用する場合に必要です (OVPM がインストールされていなければなりません)。	OVPM を起動するために使用される完全修飾 URL。グローバル レベルのみで設定します。 **例** : GRAPH_URL = http://system1.hp.com/HPOV_Reports/ovpm.htm (Windows 上の OVPM 4) GRAPH_URL = http://system2.hp.com:8080/OVPM/index.html (UNIX および Windows 上の OVPM 5)
HOME	6.1、7.0、8.1	**必須**	WebLogic Server がインストールされているディレクトリ。 **例** : HOME = /opt/bea/wlserver6.0sp1

表 15　　設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須 / 条件付 / オプション	説明
HOME_LIST	6.1、7.0、8.1	**条件付** BEA の registry.xml ファイルが正確でない場合、あるいは見つからない場合 (これが起きるのは BEA のインストール スクリプト を使わずに WebLogic Server のソフトウェアと サービス パック をインストールした場合) に必要です。	WebLogic Server がインストール されている、セミコロンで区切られたディレクトリ のリスト 。このリスト は検出で使用されます。 UNIX 管理対象ノード上では、スペースを含むディレクトリ名は現在、サポートされていません。
JAVA_HOME	6.1、7.0、8.1	**必須** Java がインストールされているディレクトリが複数ある場合に検出プロセスが必要とします。	コレクタによって使用される、Java がインストールされているディレクトリ。Java エンジンは、$JAVA_HOME/bin/java にあります。 **例** : JAVA_HOME = /opt/bea/jdk130
JMB_JAVA_HOME	N/A	**条件付** JMX Metric Builder を使用している場合に必要です。	OVO 管理サーバー上で JMX Metric Builder が使用する Java (JDK 1.4.1 以上) がインストール されているディレクトリ 。JDK のバージョンは 1.4.1 以上でなければなり ません。
JMX_CLASSPATH	N/A	**条件付** JMX コネクタを使用して WebLogic 以外の MBean サーバーを監視している場合に必要です。	JMX を実装している jar ファイルの場所。 **例** : JMX_CLASSPATH = /opt/JMX/Sun/lib/jmxri.jar
KEYSTORE	8.1	**条件付** SSL を使用する場合に必要です。	SSL トラスト キーストア ファイルへの完全修飾パス。 **デフォルト** : WebLogic のデモのキーストア
LAUNCH_DIR	6.1	**条件付** 一定の WebLogic 設定においてのみ必要です。説明を参照してください。	WebLogic Server が起動するディレクトリ名。これは、WebLogic Server 設定で絶対ログ ファイル名が設定されておらず、WebLogic Server が HOME から起動しない場合に必要です。 **例** : SERVER1_LAUNCH_DIR= /opt/wlsapphome

表 15　設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須 / 条件付 / オプション	説明
LOGFILE	6.1、7.0、8.1	**条件付** WebLogic Server が返すログ ファイル名が監視したいログ ファイル名ではない場合にのみ必要です。	WebLogic Server ログ ファイルの完全修飾パスで指定されたファイル名のコンマで区切られたリスト。 このプロパティを設定すると、指定したサーバー上のログファイルに対する監視設定が上書きされます。それによって、このプロパティが設定されていない場合に監視されるログファイルが監視対象外となることがあります。 **デフォルト** : <home>/<NAME>/weblogic.log
LOGIN	6.1	**必須**	他のユーザーが適切な権限で定義されていない場合の admin ユーザー名 (通常は system) (37 ページの「タスク 2 : WebLogic Server ユーザーを設定する」を参照してください)。 デフォルト : guest **例** : SERVER1_LOGIN = janedoe
LOGIN	7.0、8.1	**必須**	インストールで設定された WebLogic Server admin ユーザー。 **例** : SERVER1_LOGIN = johndoe
MAX_ERROR_LOG_SIZE	6.1、7.0、8.1	**条件付** 2MB を超えるエラー ログ ファイルを必要とする場合に必要です。	エラー ログ ファイルに認められる最大サイズ (MB 単位)。エラー ログ ファイルが上限に達した場合、そのファイルはバックアップ ファイルとして名前を変更され、ログ記録が再開されます。新しいバックアップ ファイルで古いバックアップ ファイルが置換されると、古いバックアップ ファイルは削除されます。 **デフォルト** : 2MB **例** : MAX_ERROR_LOG_SIZE = 20
NAME[a]	6.1、7.0、8.1	**必須**	WebLogic Server で定義されるサーバー名。WebLogic Administration Console を使用して、この情報を入手します。システムが同じサーバー名を共有する (NAME が NODE ブロック内で同じ) 場合、ALIAS を使用して各サーバーを一意に識別します。ALIAS が設定されていなければ、この名前をメッセージ、レポート、およびグラフで使用します。 **例** : SERVER1_NAME = exampleServer

表 15　設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須 / 条件付 / オプション	説明
NODE_NAMES	6.1、7.0、8.1	**条件付** リモート WebLogic Server が仮想 IP アドレスで動作している場合に必要です。	サーバーがリスンしている仮想 IP アドレス。リモート WebLogic Server に設定されていない場合は、自動的に検出されません。 **例** : SERVER1_NODE_NAMES = 15.19.20.21
NUM_SERVERS	6.1、7.0、8.1	**オプション**	管理対象ノード上の WebLogic Server の数 **例** : NUM_SERVERS = 3
PASSPHRASE	8.1	**条件付** 設定されているキーストアが読み取り操作にパスフレーズを必要とする場合に必要です。	WebLogic Server 上にキーストアが作成されたときに定義されたパスフレーズ。キーストアをパスワード付きで定義しなかった場合は、このプロパティは設定しません。 PASSPHRASE に入力すると、GUI ではタイプした通りにテキストとして表示されます。プロパティの保存や GUI の表示変更を行うと、PASSPHRASE は暗号化されます。 PASSPHRASE には最低 2 文字を含める必要があります。
PASSWORD	6.1	**必須**	LOGIN のためのパスワード。LOGIN が指定されていない場合は、ユーザー guest が使用されます。 **例** : SERVER1_PASSWORD = janedoe123
PASSWORD	7.0、8.1	**必須**	LOGIN のためのパスワード。LOGIN が設定されている場合、パスワードを定義する必要があります。 **例** : SERVER1_PASSWORD = johndoe123
PORTa	6.1、7.0、8.1	**必須**	WebLogic Server がリスンするポート。WebLogic Administration Console を使用して、この情報を入手します。 **例** : SERVER1_PORT = 7001

表 15　設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須 / 条件付 / オプション	説明
PROTOCOL	8.1	**条件付** アプリケーション サーバー ポートで SSL を使用している場合に必要です。	アプリケーション サーバー ポートが SSL または非 SSL を使用している場合に指定します。有効な値は次のとおりです。 **t3** (非 SSL) **t3s** (SSL) PROTOCOL を設定しない場合、デフォルト値は t3 (非 SSL) に設定されます。PROTOCOL を設定して **[Set Property]** をクリックした場合、デフォルト値は t3s (SSL) に設定されます。 無効な PROTOCOL を設定した場合や、PROTOCOL がアプリケーション ポートと一致しない場合、OVO はアプリケーション サーバーが停止中であるとレポートします。
RMID_PORT	8.1	**条件付** rmid がリスンするデフォルト ポートがすでに使用中の場合に必要です。	**デフォルト** : WebLogic Server: 9240、JMX コネクタ : 9241 rmid がリスンするポート。OVO 管理対象ノードがアプリケーション サーバーと JMX コネクタを使用する MBean サーバーを監視する場合、SPI はデフォルトで 2 つのポート (一方はアプリケーション サーバー用、他方は MBean サーバー用) を使用します。たとえば、WebLogic Server と MBean サーバーを監視する場合、SPI はポート 9240 と 9241 を使用します。RMID_PORT を設定すると、SPI はすべてのサーバーにこの 1 つのポートを使用します (このプロパティは、アプリケーション サーバー レベルでは設定できません)。たとえば、WebLogic Server と MBean サーバーを監視し、RMID_PORT を 9250 に設定する場合、SPI はポート 9250 のみを使用します。 **例** : RMID_PORT = 9250
RMID_START_TIME	8.1	**条件付** rmid の起動に 30 秒以上を要する場合に必要です。	**デフォルト** : 30 (秒) rmid の起動のタイムアウト時間 (秒)。 **例** : RMID_START_TIME = 60

表 15　設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須 / 条件付 / オプション	説明
START_CMD	6.1、7.0、8.1	**条件付** OVO コンソールから WebLogic Server を起動したい場合に必要です。	OVO 登録アプリケーションである Start WebLogic アプリケーションが使用される場合に実行される完全修飾システム コマンド。このコマンドは、Start WebLogic アプリケーションを動作させるために設定する必要のある USER によって実行されます。 注意 : このコマンドは終了する必要があります。つまり、WebLogic Server プロセスはバックグラウンドで、またはサービスとして実行する必要があり、親プロセスが強制終了されないように保護する必要があります。 **例** : `SERVER1_START_CMD = /sbin/init.d/weblogic start`
STOP_CMD	6.1、7.0、8.1	**条件付** OVO コンソールから WebLogic Server を停止したい場合に必要です。	OVO 登録アプリケーションである Stop WebLogic アプリケーションが使用される場合に実行される完全修飾システム コマンド。このコマンドは、Stop WebLogic アプリケーションを動作させるために設定する必要のある USER によって実行されます。 **例** : `SERVER1_STOP_CMD = /sbin/init.d/weblogic stop`
TIMEOUT	6.1、7.0、8.1	**オプション**	**デフォルト** : 120 (秒)。 WLS-SPI が WebLogic Server に接続を試行する時間の最大値 (秒単位)。指定された時間を超えた場合、WLS-SPI はメッセージ ブラウザに WebLogic Server が利用できないことを示す警告通知を送信します。メトリック B002_ServerStatusRep が収集されると、サーバーの利用不能状況がログ記録されます。 時間制限が不要である場合は、このプロパティを 1 に設定します。
TYPE	6.1、7.0、8.1	**オプション** JMX コネクタを設定する場合に必要です。	**デフォルト** : weblogic。 JMX コネクタのタイプ。JMX コネクタを設定する場合は、ovrmi に設定します。WebLogic の MBean サーバーを使用している場合は、この値を変更しないでください。 **例** : `SERVER1_TYPE=weblogic`

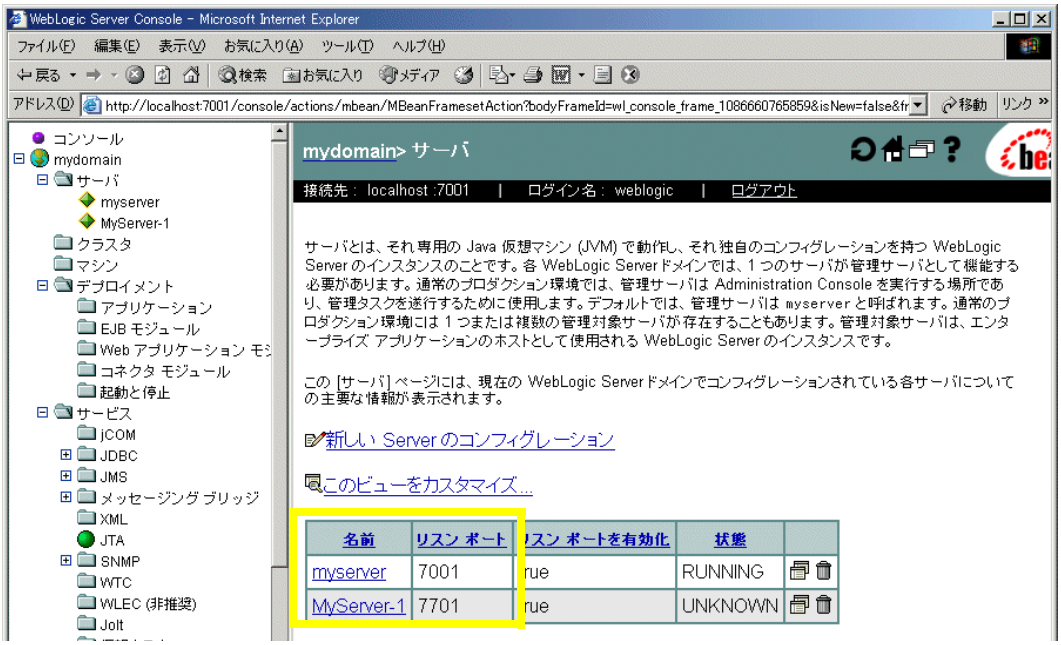
表 15　設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須 / 条件付 / オプション	説明
UDM_DEFINITIONS_SOURCE	6.1、7.0、8.1	**オプション**	**デフォルト** : /opt/OV/wasspi/wls/conf/wasspi_wls_udmDefinitions.xml。 OVO 管理サーバー上のメトリック定義 XML ファイルへの完全修飾パス名またはこのファイルのファイル名。パス名が設定されていると、wasspi_wls_udmDefinitions.xml ファイルは UDM ファイルのファイル名であると見なされます。 **例** : SERVER1_UDM_DEFINITIONS_SOURCE = /opt/OV/wasspi/wls/conf/udm.xml
USER	6.1、7.0、8.1	**条件付** OVO コンソールから WebLogic Server を起動 / 停止したい場合に必要です。	OVO 登録アプリケーションから WebLogic Server の起動と停止を行うためのシステムユーザー名。 デフォルトは、OVO エージェントが実行するユーザー名です。 **例** : USER = weblogic

表 15　　設定プロパティ (続き)

プロパティ	適用可能な WebLogic バージョン	必須 / 条件付 / オプション	説明
VERSION	6.1、7.0、8.1	**条件付** WebLogic Versions 7 および 8 の場合に必要です。	*Major#* [*Minor#*] 形式の WebLogic Server のバージョン番号。 *Major#* - プライマリ バージョン番号 (たとえば、6.1 または 7.0)。 *Minor#* - インストールされたサービス パック (たとえば、SP1 の場合は 1)。 *Minor#* が指定されていないと、デフォルトの 0 に設定されます (サービス パックはインストールされません)。バージョン 6.1 には、サービス パックをインストールする必要があります (サポートされているサービス パックのリストについてのリリース ノートを参照してください)。 **例** : SERVER1_VERSION = 6.1 3

a. WebLogic Administration Console には、ドメインにあるすべての設定されたアプリケーションのサーバー名とポート番号が表示されます。NAME と PORT を定義する場合に、これらの名前と番号を使用します。



サンプル設定

この付録にあるエントリつきの WLS-SPI 設定のサンプルには、さまざまな機能と使用方法が例示されています。

例 1: 単一のノード /2 つのサーバー

以下の例は、単一のノードで管理サーバーと管理対象サーバーの 2 つのサーバーを実行するためのものです。プロパティ HOME と JAVA_HOME は、すべてのサーバーとノードに適用するグローバル デフォルトです。設定が保存されると、パスワードは暗号化されます。

```
HOME = /opt/bea/wlserver6.1
JAVA_HOME=/opt/bea/jdk131

NODE main.rose.hp.com
{
  SERVER1_NAME= adminserver
  SERVER1_PORT= 7001
  SERVER1_LOGIN= system
  SERVER1_PASSWORD = password

  SERVER2_NAME= managedserver
  SERVER2_PORT= 7005
  SERVER2_LOGIN= system
  SERVER2_PASSWORD= password
}
```

例 2: 複数のノード / 繰り返されるプロパティ

以下の例は、多くのプロパティが共通している関連システムのグループを設定する方法を示しています。ただし、異なる設定が必要なプロパティを 1 つか 2 つ持っているノードもあります。このような状況には、以下の 2 つの手順で対応できます。

1. 設定エディタの [Add Group] アクションを使用してグループに名前をつけ、その中のノードを指定して、設定プロパティを設定します。詳細については、147 ページの「Add Group」を参照してください。
2. 設定エディタの [Add Node] アクションを使用して、個々のノードのプロパティを定義します (グループにないノード、または一意 / 別のプロパティを持つグループにあるノード、のいずれか)。詳細については、147 ページの「Add Node」を参照してください。

ノードに設定されたプロパティは、グループに設定された同じプロパティよりも優先されます。プロパティの優先順位の完全な順序については、142 ページの「プロパティ優先順位」を参照してください。

例では、グローバル デフォルト プロパティ `HOME` と `JAVA_HOME` がノード europa.rose.hp.com について無効になっています。起動コマンドは、システム ブートで動作して、すべての WebLogic Server を起動する system init コマンド "`/sbin/init.d/weblogic start`" を使用するため、`USER` をルートに設定します。この環境で、このコマンドは「weblogic」などの適正なユーザーによるサーバーの起動を扱います。

グローバルプロパティ定義

```
HOME   = /opt/bea/wlserver6.1
JAVA_HOME = /opt/bea/jdk131
USER   = root
```

グループプロパティ定義

```
GROUP production
{
  mercury.rose.hp.com
  venus.rose.hp.com
  mars.rose.hp.com
  jupiter.rose.hp.com
}
```

グループノード定義

```
NODE production
{
  SERVER1_NAME= partsserver
  SERVER1_PORT= 7001
  SERVER1_LOGIN= system
  SERVER1_PASSWORD= password
  SERVER1_ADMIN_HOST= earth.rose.hp.com
  SERVER1_ADMIN_PORT= 7001
  SERVER1_START_CMD= /sbin/init.d/weblogic start

  SERVER2_NAME= orderserver
  SERVER2_PORT= 7010
  SERVER2_LOGIN= system
  SERVER2_PASSWORD= moresecret
  SERVER2_START_CMD= /sbin/init.d/weblogic start
}
```

単一ノードプロパティ定義

```
NODE jupiter.rose.hp.com
{
  SERVER1_PASSWORD= different1password
  SERVER2_PASSWORD= different2password
}
```

単一ノードプロパティ定義

```
NODE europa.hp.com
{
  SERVER1_HOME = /opt/bea/wls
  SERVER1_JAVA_HOME = /opt/bea/jdk132
  SERVER1_NAME= testserver
  SERVER1_PORT= 7100
  SERVER1_LOGIN= system
  SERVER1_PASSWORD= mypssword
}
```

例 3: 複数の WebLogic Server バージョン

この例では、単一の管理対象ノード上で 2 つの異なったバージョンの WebLogic Server を実行する環境を設定する方法を示しています。SERVER1_HOME と SERVER2_HOME は、WebLogic Server の異なるバージョンについては異なるディレクトリに設定されることに注意します。

```
NODE callisto.rose.hp.com
{
  SERVER1_HOME = /opt/bea/wlserver6.0
  SERVER1_JAVA_HOME = /opt/bea/jdk131
  SERVER1_NAME= prodserver
  SERVER1_PORT= 7001
  SERVER1_LOGIN= system
  SERVER1_PASSWORD= mypssword

  SERVER1_HOME = /opt/bea/wlserver6.1
  SERVER1_JAVA_HOME = /opt/bea/jdk131
  SERVER1_NAME= testserver
  SERVER1_PORT= 7100
  SERVER1_LOGIN= system
  SERVER1_PASSWORD= mypssword
}
```

例 4: 仮想 IP アドレスを持つ WebLogic Server

この例では、仮想 IP アドレスを持つ WebLogic Servers の設定方法を示します。ADDRESS は、サーバーがリスンしている名前または IP アドレスに設定されます。

```
NODE saturn.rose.hp.com
{
  SERVER1_HOME = /opt/bea/wlserver6.1
  SERVER1_JAVA_HOME = /opt/bea/jdk131
  SERVER1_NAME= partsserver
  SERVER1_PORT= 7001
  SERVER1_ADDRESS= juno.rose.hp.com
  SERVER1_LOGIN= system
  SERVER1_PASSWORD= mypssword

  SERVER2_HOME = /opt/bea/wlserver6.1
  SERVER2_JAVA_HOME = /opt/bea/jdk131
  SERVER2_NAME= orderserver
  SERVER2_PORT= 7001
  SERVER2_ADDRESS= 15.15.1.1
  SERVER2_LOGIN= system
  SERVER2_PASSWORD= mypssword
}
```

例 5: デフォルト以外の WebLogic Server の起動場所

この例は、WebLogic Server を起動するコマンドが起動する前に HOME ディレクトリにディレクトリを変更しない場合を扱っています。WLS-SPI は、監視するために WebLogic Server のログ ファイルの場所を検索することはできません。WLS-SPI がログ ファイルを監視できることを確認するには、サーバーを実行するディレクトリが neptune 上にあるとして LAUNCH_DIR を設定するか、または pluto 上にあるとして LOGFILES を設定します。

```
NODE neptune.rose.hp.com
{
  SERVER1_HOME = /opt/bea/wlserver6.1
  SERVER1_JAVA_HOME = /opt/bea/jdk131
  SERVER1_NAME= exampleServer
  SERVER1_PORT= 7001
  SERVER1_LOGIN= system
  SERVER1_PASSWORD= mypssword
  SERVER1_LAUNCH_DIR = /home/weblogic
}

NODE pluto.rose.hp.com
{
  SERVER1_HOME = /opt/bea/wlserver6.1
  SERVER1_JAVA_HOME = /opt/bea/jdk131
  SERVER1_NAME= exampleServer
  SERVER1_PORT= 7001
  SERVER1_LOGIN= system
  SERVER1_PASSWORD= mypssword
  SERVER1_LOGFILES =
/opt/bea/wlserver6.1/config/mydomain/logs/weblogic.log,
/opt/bea/wlserver6.1/config/mydomain/logs/wl-domain.log
}
```

SERVER1_LOGFILES は、長いですが 1 行で設定され、コンマで区切られます。

C アプリケーション

Smart Plug-in for BEA WebLogic Server (WLS-SPI) アプリケーションには、設定とトラブルシューティングのユーティリティがあります。WLSSPI Admin アプリケーションには、以下のものが含まれます。

- Config WLSSPI
- Discovery
- Init Non-Root
- Self-Healing Info
- Start/Stop Monitoring
- Start/Stop Tracing
- Verify
- View Error File
- View Graphs

WebLogic アプリケーションには、以下のものが含まれます。

- Check WebLogic
- Start WLS Console
- Start/Stop WebLogic
- View Deployed Apps
- View WebLogic Log
- View WebLogic Servers

WLSSPI Admin

以下のアプリケーションは、WLSSPI Admin アプリケーション グループにあります。これらのアプリケーションでは「root」ユーザー権限が必要であるため、このグループは OVO 管理者に割り当てることをお勧めします。

ユーザー定義メトリック (UDM) 用のその他の WLSSPI Admin アプリケーションは WASSPI-UDM-Bldr ソフトウェア バンドルで使用できます。このソフトウェア バンドルおよびその他のアプリケーションのインストール方法の詳細については、『HP OpenView Smart Plug-in User Defined Metrics User Guide』を参照してください。

Config WLSSPI

設定エディタを起動し、WLS-SPI 設定を維持します。

WLS-SPI を初めて設定する場合は、WLSSPI Discover Tool を使用して基本設定プロパティを自動的に設定します。詳細については、第 3 章、「WLS-SPI の設定」を参照してください。

目的

設定エディタを起動することによって、OVO 管理者 が設定プロパティを表示、編集、または設定して WLS-SPI 設定を維持できます。

機能

`Config WLSSPI` は、以下の機能を実行します。

- OVO 管理サーバーと管理対象ノード上の設定を更新します。
- 選択された管理対象ノード上の WLS-SPI が要求するディレクトリとファイルを作成します。
- レポート作成とグラフ作成のためのデータ ソースを設定します。
- 監視のために WebLogic Server ログ ファイルと WLS-SPI エラー ログ ファイルを設定します。

すべての OVO 管理対象ノード上にあるすべての WebLogic Servers の設定情報は、OVO 管理サーバー上で維持されます。OVO 管理対象ノード上の特定の WebLogic Server の設定情報は、その管理対象ノード上で維持されます (各管理対象ノードは、OVO 管理サーバー上で維持される設定情報のサブセットを維持します)。

保存する場合、設定エディタで行った変更は常に OVO 管理サーバーに保存されます。

このアプリケーションを起動するときに特定の OVO 管理対象ノードが選択されていると、その管理対象ノード上の WebLogic Server に影響を与える設定の変更はその管理対象ノードに自動的に保存されます。

このアプリケーションを起動するときにどの管理対象ノードも選択されていないと、設定の変更はどの管理対象ノードにも*保存されません*。

このアプリケーションを起動するときに特定の OVO 管理対象ノードが選択されていて、選択されていない管理対象ノード上の WebLogic Server に影響を与える変更が行われると、その変更は OVO 管理サーバー上の設定に保存されますが、選択されていない管理対象ノードへは*保存されません*。影響を受けた管理対象ノードを選択して、このアプリケーションを再実行する必要があります。既存のアプリケーションでの変更は、管理対象ノードに保存されます。

実行方法

1. OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。
2. **[登録アプリケーション]** を選択します。
3. [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[Config WLSSPI]** を選択します。(項目が表示されない場合は、**[マップ]** → **[再ロード]** を選択します。)
4. [Introduction] ウィンドウが表示されます。

   [Next] を選択します。
5. 設定エディタが表示されます。設定エディタの使用方法については、143 ページの「設定エディタの使用法」を参照してください。
6. オプションで、**[Save]** を選択して、設定に加えた変更を保存することもできます。変更を一度保存したら、自動的に元に戻すことはできません。

7 **[Finish]** または **[Next]** を選択することによってあらゆる変更を保存し、エディタを終了します。

[Next] を選択すると、[Confirm Operation] ウィンドウが表示されます。**[OK]** を選択します。

[Cancel] を選択して、設定に変更を加えた場合、それらの変更は管理サーバー上の設定に残ります。選択した管理対象ノードの設定に変更を加えるには、[登録ノード] ウィンドウでそれらのノードを選択し、Config WLSSPI アプリケーションを起動して、設定エディタで **[Next]** を選択してから **[OK]** を選択します。

8 アプリケーション サーバーを追加するか、または `ADMIN_PORTS`、`HOME`、`HOME_LIST`、および `JAVA_HOME` プロパティ、またはそのいずれかを追加または編集した場合、アプリケーション サーバーまたはプロパティが追加または編集された管理対象ノード上で Discovery アプリケーションを実行します。Discovery アプリケーションを実行すると、サービス マップが更新されます。

Discovery

検出に必要な基本設定プロパティを設定します。

目的

設定エディタを起動することによって、OVO 管理者は最初の設定プロパティを設定して WLS-SPI を設定できます。

機能

`Discovery` は、以下の機能を実行します。

- OVO 管理サーバーと選択された管理対象ノード上の設定を更新します。

すべての OVO 管理対象ノード上にあるすべての WebLogic Servers の設定情報は、OVO 管理サーバー上で維持されます。OVO 管理対象ノード上の特定の WebLogic Server の設定情報は、その管理対象ノード上で維持されます (各管理対象ノードは、OVO 管理サーバー上で維持される設定情報のサブセットを維持します)。

保存された場合、設定エディタで行った変更は常に OVO 管理サーバー上に保存されます。

このアプリケーションが起動されるときには OVO 管理対象ノードが選択されている必要があり、その管理対象ノード上の WebLogic Server に影響を与える設定の変更はその管理対象ノードに自動的に保存されます。

このアプリケーションを起動するときに特定の OVO 管理対象ノードが選択されていて、選択されていない管理対象ノード上の WebLogic Server に影響を与える変更が行われると、その変更は OVO 管理サーバー上の設定に保存されますが、選択されていない管理対象ノードへは*保存されません*。影響を受けた管理対象ノードを選択して、このアプリケーションを再実行する必要があります。既存のアプリケーションでの変更は、管理対象ノードに保存されます。

実行方法

1 OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。

2 [ウィンドウ] メニューで、**[登録アプリケーション]** を選択します。

3 [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[Discovery]** を選択します。(上記が説明のように表示されない場合は、**[マップ]** → **[再ロード]** を選択します。)

4 [Introduction] ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、Discovery アプリケーションについての簡単な情報が記載されています。

[Next] を選択します。

5 2 つ目の [Introduction] ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、検出プロセスが機能するために必要と思われるプロパティについての情報が表示されます。

この情報を読んでから **[Next]** を選択します。

6 WLS-SPI の `LOGIN` と `PASSWORD` プロパティを設定していない場合、[Set Access Info for Default Properties] ウィンドウが表示されます。

`LOGIN` と `PASSWORD` のプロパティをすでに設定してある場合、設定エディタが表示されます。次のステップへ進みます。

`LOGIN` と `PASSWORD` のプロパティを、37 ページの「タスク 2 : WebLogic Server ユーザーを設定する」で設定した WebLogic Server のログインとパスワードに設定します。

このウィンドウで設定した `LOGIN` と `PASSWORD` のプロパティは、デフォルトの WebLogic Server のログインとパスワードとして使用されます (これらはグローバル プロパティのレベルで設定されます)。つまり、NODE レベルやサーバー固有の `LOGIN` と `PASSWORD` のプロパティが設定されていない場合、WLS-SPI は、すべての WebLogic Server にアクセスするのにこの WebLogic のログインとパスワードを使用するということです。設定構造の詳細については、141 ページの「構造」を参照してください。

WebLogic Server のログインとパスワードが、すべての OVO 管理対象ノード上のすべての WebLogic Server について同じである場合、以下の手順を実行します。

a [Set Access Info for Default Properties] ウィンドウで `[LOGIN]` と `[PASSWORD]` プロパティを設定します。

b **[Next]** を選択します。

c ステップ 9 に進みます。

WebLogic Server のログインとパスワードが WebLogic の各インスタンスで異なる場合は、`LOGIN` と `PASSWORD` プロパティをノードまたはサーバー固有のレベルで設定して、WLS-SPI 設定をカスタマイズする必要があります (設定構造の詳細については、141 ページの「構造」を参照してください)。

a [Set Access Info for Default Properties] ウィンドウで、`[LOGIN]` と `[PASSWORD]` プロパティを、最もよく使用される WebLogic のログインとパスワードに設定します。

b **[Customize]** を選択して、設定エディタを開きます。

7 設定エディタで、設定プロパティを設定します。設定エディタの使用方法については、143 ページの「設定エディタの使用法」を参照してください。

8 **[Next]** を選択することによってあらゆる変更を保存し、エディタを終了します。

9 [Confirm Operation] ウィンドウが表示されます。**[OK]** を選択します。

[Cancel] を選択して、設定に変更を加えた場合、それらの変更は管理サーバー上の設定に残ります。選択した管理対象ノードの設定に変更を加えるには、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択して、Discovery アプリケーションを起動し、設定エディタで **[Next]** を選択してから **[OK]** を選択します。

Init Non-Root

選択された管理対象ノードで /var/opt/OV/bin/instrumentation/wasspi_wls_platdef.pm ファイルを更新し、wasspi_wls_sudoers 設定ファイルを生成します。

目的

UNIX 管理対象ノードで非 root HTTPS エージェントを簡単に設定できるようにします (OVO 8.x のみ)。UNIX 管理対象ノードでの非 root HTTPS エージェントの設定に必要な手順については、48 ページの「UNIX 管理対象ノードでの非 root HTTPS エージェントの設定 (OVO 8.x のみ)」を参照してください。

機能

Init Non-Root は、選択された管理対象ノードで以下の操作を実行します。

1. wasspi_wls_perl -S wasspi_wls_makePlatdef -force コマンドを実行して SPI パスを正しく設定し、/var/opt/OV/bin/instrumentation/wasspi_wls_platdef.pm ファイルと wasspi_wls_platdef.prop ファイルを更新します。
2. wasspi_wls_sudoers 設定ファイルを生成します。

実行方法

1. OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。
2. [ウィンドウ] メニューで、**[登録アプリケーション]** を選択します。
3. [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[Init Non-Root]** を選択します。

Self-Healing Info

HP のサポート担当者に送信するデータを収集します。

HP サポート契約では、HP OpenView セルフヒーリング サービス Web サイト (http://support.openview.hp.com/self_healing.jsp) から相互参照情報にアクセスできます。データベースを検索して、ご自分の SPI の問題と同様の問題やその解決策を参考に、効率よくトラブルシューティングを進めることができます。詳細については、『HP OpenView Smart Plug-ins CD for OpenView Operations for UNIX Installation Guide』の「The Self-Healing Services Client Software」の項を参照してください。

必要な設定

再現可能な問題に関するデータを収集する場合、`Self-Healing Info` アプリケーションを実行する前に、以下の手順を行ってください。

1. `Start Tracing` アプリケーションを実行します。詳細については、182 ページの「Start/Stop Tracing」を参照してください。
2. 問題を再現します。

目的

OVO 管理者は、HP のサポート担当者が使用するデータを収集できます。

機能

`Self-Healing Info` は、すべての管理対象ノードに対して以下の機能を実行します。

- **Verify** アプリケーションを使用して、データを実行し、保存します (詳細については、182 ページの「Verify」を参照してください)。
- 以下のディレクトリで、すべてのファイルを再帰的に一覧表示します。
  - `<OV_AGT_DIR>/bin/OpC/actions/`
  - `<OV_AGT_DIR>/bin/OpC/cmds/`
  - `<OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/`
  - `<OV_AGT_DIR>/wasspi/wls/`
- 以下のファイルの内容を表示します。
  - `<OV_AGT_DIR>/conf/OpC/nodeinfo`
  - `<OV_AGT_DIR>/wasspi/wls/conf/SiteConfig`
  - `<OV_AGT_DIR>/wasspi/wls/conf/SPIConfigCfgFiles`
  - `<OV_AGT_DIR>/wasspi/wls/conf/SPIConfigLogFiles`
  - `<OV_AGT_DIR>/wasspi/wls/conf/version`
- 以下のコマンドを実行します。
  - `opcagt -status`
  - `codautil -obj`

  - *<OV_AGT_DIR>*/bin/OpC/monitor/wasspi_wls_ca -m 5 -x print=on
  - *<OV_AGT_DIR>*/bin/OpC/monitor/wasspi_wls_ca -m 5 -x print=on -debug
- 以下のディレクトリにあるすべてのファイルをコピーします。
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/log/
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/tmp/
- 以下のファイルをコピーします。
  - *<OV_AGT_DIR>*/conf/OpC/le
  - *<OV_AGT_DIR>*/conf/OpC/msgi
  - *<OV_AGT_DIR>*/conf/OpC/monitor
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/conf/version
- 管理サーバー上に、以下のディレクトリが存在することを確認します。
  - /opt/OV/wasspi/wls/bin/
  - /opt/OV/wasspi/wls/conf/
- 管理サーバー上に、以下のファイルが存在することを確認します。
  - /opt/OV/wasspi/wls/bin/parseDefs.pl
  - /opt/OV/wasspi/wls/bin/startWLSConsole.pl
  - /opt/OV/wasspi/wls/bin/wasspi_wls_app_graphs
  - /opt/OV/wasspi/wls/bin/wasspi_wls_editcfg
  - /opt/OV/wasspi/wls/bin/wasspi_wls_lib.pl
  - /opt/OV/wasspi/wls/bin/wasspi_wls_optaction_graphs
  - /opt/OV/wasspi/wls/bin/wasspi_xterm
  - /opt/OV/wasspi/wls/conf/SiteConfig
- 管理サーバー上に、以下のファイルをコピーします。
  - /opt/ov/wasspi/wls/conf/SiteConfig

Self-Healing Info は、Windows の管理対象ノードに対して以下の機能を実行します。

- 以下のファイルの内容を表示します。
  - <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/install/opcinfo
  - <OV_AGT_DIR>/conf/dsi2ddf/ddflbd.mwc

Self-Healing Info は、UNIX の管理対象ノードに対して以下の機能を実行します。

- 以下のファイルの内容を表示します。
  - /opt/OV/bin/OpC/install/opcinfo
  - *<OV_AGT_DIR>*/conf/dsi2ddf/ddflbd.rc
- 以下のコマンドを実行します。
  - ps -ef
  - *<OV_AGT_DIR>*/bin/OpC/cmds/wasspi_wls_osinfo

- `df -k`
- `uname -a`
- `hostname`

- 以下の情報を収集します。
  - アップタイム
  - OS バージョンの詳細
  - ulimit 値

ここで、*<OV_AGT_DIR>* は以下のようになります。

- UNIX 管理対象ノード上にある場合 : `/var/opt/OV`
- Windows 管理対象ノード上にある場合 : インストールされている製品によって異なります。

データは以下のファイルに保存されます。

- UNIX 管理対象ノード上にある場合 : `/tmp/wasspi_wls_support.tar`
- Windows 管理対象ノード 上にある場合 : 以下のディレクトリ (正確な場所が表示されています) のいずれか 1 つの `wasspi_wls_support.zip`
  - `%TEMP%`
  - `%TMP%`
  - `%SystemDrive%¥temp¥`
  - `C:¥temp¥`
  - JAVA_HOME または SERVER<n>_JAVA_HOME が定義されている場合は、`%temp%`
  - `%temp%¥wasspi_wls_support¥`

このファイルは、Windows 管理対象ノードの設定によっては表示されなくなっている場合があります。ファイルが表示されない場合は、Windows エクスプローラを開き、[ツール] メニューから **[フォルダ オプション]** を選択してください。**[表示]** タブをクリックします。[ファイルとフォルダの表示] の下の **[すべてのファイルとフォルダを表示する]** を選択してください。

実行方法

1. OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。
2. [ウィンドウ] メニューで、**[登録アプリケーション]** を選択します。
3. [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[Self-Healing Info]** を選択します。

Start/Stop Monitoring

管理対象ノード上の 1 つまたはすべてのアプリケーション サーバーのメトリックの収集を開始または停止します。

目的

OVO 管理者は、WLS-SPI がアプリケーション サーバーからメトリックを収集することを開始または停止するようにできます。

これらのメトリックは、警告通知を生成し (しきい値を超えた場合)、レポート (自動的にまたは手動で作成) とグラフを作成するために使用されます。レポートとグラフは、サーバーの用途、可用性、およびパフォーマンスの傾向を分析するために使用されます。

通常、OVO 管理者はすでに明らかになっている理由 (たとえば、保守のためのノード停止) で管理ノードが動作していないと、管理ノードの監視を停止します。監視を停止することによって、不要な警告通知が生成されないようにします。

`Verify` アプリケーションを実行して、監視を開始または停止するかどうかを決定します。デフォルトでは、監視機能は有効になっています。

機能

`Start Monitoring` によって、管理対象ノード上の 1 つまたはすべてのアプリケーション サーバーのメトリック収集を開始します。

`Stop Monitoring` によって、管理対象ノード上の 1 つまたはすべてのアプリケーション サーバーのメトリック収集を停止します。

実行方法

1. OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。
2. [ウィンドウ] メニューで、**[登録アプリケーション]** を選択します。
3. [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[Start Monitoring]** または **[Stop Monitoring]** を選択します。

Start/Stop Tracing

メトリックの収集のトレース記録を開始または停止します。

目的

メトリックの収集についてのファイルへのトレース記録を開始または停止します。このアプリケーションは、HP のサポート担当者に指示された場合のみ実行するようにしてください。

Self-Healing Info アプリケーションを実行して、HP のサポート担当者が使用するデータの一部としてこのツールで作成されたファイルを収集します。

機能

`Start Tracing` によって、メトリックの収集についての情報をファイルに保存します。

`Stop Tracing` によって、メトリックの収集についての情報の保存を停止します。

実行方法

1. OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。
2. [ウィンドウ] メニューで、**[登録アプリケーション]** を選択します。
3. [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** を選択し、**[Start Tracing]** または **[Stop Tracing]** をダブルクリックします。

Verify

WLS-SPI がサーバーまたは管理対象ノードに正しくインストールされていることを確認します。

目的

OVO 管理者は、WLS-SPI がサーバーまたは管理対象ノードに正しくインストールされていることを確認できます。

機能

`Verify` は、すべての管理対象ノードに対して以下の機能を実行します。

- WLS-SPI の名前とバージョンを出力します。
- 管理対象ノードに設定されたすべての環境プロパティを出力します。
- 以下の設定プロパティの設定を確認し、その値が有効であることを確認します。
  - `SERVER<n>_HOME`
  - `SERVER<n>_JAVA_HOME`
- シグナルとシグナル ハンドラのリストを表示します。

- 以下のディレクトリが存在することを確認します。
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/conf/
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/datalog/
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/history/
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/lib/
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/log/
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/tmp/
- 以下のファイルが存在することを確認します。
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/conf/MBeanReports.dtd
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/conf/MBeanReports.xsl
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/conf/MetricDefinitions.ser
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/conf/MetricDefinitions.dtd
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/conf/MetricMap
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/conf/OVTrace.sample
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/conf/ReportsHeader.xsl
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/conf/SiteConfig
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/conf/SPIConfig
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/conf/SPIConfigLogFiles
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/conf/SPIConfigCfgFiles
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/conf/trigger
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/conf/ReportsUtil.xsl
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/lib/GraphSP.xsl
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/lib/JspiCola.jar
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/lib/MetricMap.xsl
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/lib/xalan.jar
  - *<OV_AGT_DIR>*/wasspi/wls/lib/xerces.jar

Verify は、Windows の管理対象ノードに対して以下の機能を実行します。

- 以下のファイルが存在することを確認します。
  - *<OV_AGT_DIR>*/bin/OpC/cmds/wasspi_wls_admin.exe
  - *<OV_AGT_DIR>*/bin/OpC/cmds/wasspi_wls_debug.exe
  - *<OV_AGT_DIR>*/bin/OpC/cmds/wasspi_wls_spiapps.exe
  - *<OV_AGT_DIR>*/bin/OpC/cmds/wasspi_wls_udmgraphs.exe
  - *<OV_AGT_DIR>*/bin/OpC/cmds/wasspi_wls_verify.exe
  - *<OV_AGT_DIR>*/bin/OpC/monitor/wasspi_wls_ca.exe
  - *<OV_AGT_DIR>*/bin/OpC/monitor/wasspi_wls_config.exe

- — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/wasspi_wls_files.exe
- — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/wasspi_wls_le.exe
- — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/wasspi_wls_logdata.exe
- — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/wasspi_wls_setpath.exe

- 以下のファイルが存在し、そのバージョンが A.01 より上であることを確認します。
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/ddfcomp.exe
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/ddfcomp_coda.exe
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/ddflog.exe
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/ddflog_coda.exe
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/ddfutil.exe
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/ddfutil_coda.exe

Verify は、UNIX の管理対象ノードに対して以下の機能を実行します。

- 以下のファイルが存在することを確認します。
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/cmds/wasspi_wls_admin
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/cmds/wasspi_wls_debug
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/cmds/wasspi_wls_spiapps
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/cmds/wasspi_wls_udmgraphs
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/cmds/wasspi_wls_verify
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/wasspi_setpath
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/wasspi_wls_ca
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/wasspi_wls_config
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/wasspi_wls_config.pl
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/wasspi_wls_files
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/wasspi_wls_le
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/wasspi_wls_lib.pl
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/wasspi_wls_logdata
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/wasspi_xterm
- 以下のファイルが存在し、そのバージョンが A.01 より上であることを確認します。
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/ddfcomp
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/ddfcomp_coda
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/ddflog
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/ddflog_coda
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/ddfutil
  - — <OV_AGT_DIR>/bin/OpC/monitor/ddfutil_coda

ここで、*<OV_AGT_DIR>* は以下のようになります。

- UNIX 管理対象ノード上にある場合 : `/var/opt/OV`
- Windows 管理対象ノード上にある場合 : インストールされている製品によって異なります。

実行方法

1. OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。
2. [ウィンドウ] メニューで、**[登録アプリケーション]** を選択します。
3. [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[Verify]** を選択します。

View Error File

WLS-SPI エラー ログ ファイルを表示します。

目的

OVO 管理者は、エラー ログ ファイルの内容を表示できます。

機能

WLS-SPI エラー ログ ファイル *<OV_AGT_DIR>*`/wasspi/wls/log/errorlog` の内容を表示します。ここで、*<OV_AGT_DIR>* は、通常、以下のようになります。

- `/var/opt/OV` (UNIX 管理対象ノード)
- `/Program Files/HP OpenView/Installed Packages/{790 ...}` (Windows 管理対象ノード)

実行方法

1. OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。
2. [ウィンドウ] メニューで、**[登録アプリケーション]** を選択します。
3. [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[View Error File]** を選択します。

View Graphs

OpenView Performance Manager (OVPM) グラフを Web ブラウザに表示します。

必要な設定

OVPM をインストールする必要があり、このツールを正常に実行できるようにするには `ovweb.conf` ファイルを編集する必要があります (詳細については、33 ページの「タスク 1: 管理サーバーを設定して Web ブラウザを起動する」を参照してください)。

Netscape Navigator を使用している場合は、バージョン 6.0 以上を使用してください。このアプリケーションでは Netscape Navigator 4.79 は使用しないでください。

目的

OVO 管理者は、OVO コンソールから OVPM の WLS-SPI グラフを表示できます。

機能

Web ブラウザを起動して、OVPM グラフで WLS-SPI メトリック データを表示します。

実行方法

1. OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。
2. [ウィンドウ] メニューで、**[登録アプリケーション]** を選択します。
3. [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WLSSPI Admin]** → **[View Graphs]** を選択します。

WebLogic

以下のアプリケーションは、WLSSPI WebLogic アプリケーション グループにあります。

Check WebLogic

選択された管理対象ノード上の WebLogic Server についてのステータス レポートを表示します。

目的

OVO 管理者は、管理対象ノード上で動作している各アプリケーション サーバーのステータスをすぐに確認できます。

機能

`Check WebLogic` は、選択されたノード上の各アプリケーション サーバーについて以下の情報を表示します。

情報	説明
Server Name	WebLogic Server で定義されるサーバー名
State	WebLogic Server のステータス
Listen Address	着信接続をリスンするために使用される名前と IP アドレス
Health State	WebLogic Server の現在のステータスを数値で表したもの
Health State String	WebLogic Server 自身によるヘルス モニタリングの結果

WLS-SPI が WebLogic Server のメトリックを収集しないように設定されていると、メッセージ `Collection is temporarily OFF for <server_name>` が表示されます。

実行方法

1 OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。

2 [ウィンドウ] メニューで、**[登録アプリケーション]** を選択します。

3 [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WebLogic]** → **[Check WebLogic]** を選択します。

Start WLS Console

OVO コンソールから、WebLogic Administration Server コンソールを起動します。

必要な設定

`ADMIN_HOST` と `ADMIN_PORT` 設定プロパティは、このツールを正常に実行できるようにするために設定する必要があります。

目的

OVO 管理者は、OVO コンソールから WebLogic Administration Server コンソールを起動できます。OVO 管理者は、選択された管理対象ノード上の 1 つまたはすべてのアプリケーション サーバーのコンソールを起動できます。

機能

`Start Console` によって、選択されたノード上の 1 つのまたはすべてのアプリケーション サーバーの WebLogic Administration Server コンソールを Web ブラウザで起動します。

実行方法

1. OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。
2. [ウィンドウ] メニューで、**[登録アプリケーション]** を選択します。
3. [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WebLogic]** → **[Start WLS Console]** を選択します。

Start/Stop WebLogic

OVO コンソールから WebLogic Servers を開始または停止します。

必要な設定

`START_CMD`、`STOP_CMD`、および `USER` 設定プロパティは、このツールを正常に実行できるようにするために設定する必要があります。

目的

OVO 管理者は、OVO コンソールから WebLogic Servers の開始と停止ができます。OVO 管理者は、選択された管理対象ノード上の 1 つまたはすべてのアプリケーション サーバーの開始と停止ができ、この機能を実行するために各 WebLogic Administration Server にログインする必要はありません。

機能

`Start/Stop WebLogic` によって、選択された管理対象ノード上の 1 つまたはすべてのアプリケーション サーバーを開始または停止します。

実行方法

1. OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。
2. [ウィンドウ] メニューで、**[登録アプリケーション]** を選択します。
3. [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WebLogic]** → **[Start WebLogic]** または **[Stop WebLogic]** を選択します。

View Deployed Apps

WebLogic Server で実行中のアプリケーションを表示します。

目的

WebLogic Server インスタンスで実行中の配布済みアプリケーションを OVO 管理者が表示できるようにします。OVO 管理者は、WebLogic Server を実行中のシステムにログインする必要はありません。

機能

`View Deployed Apps` は、選択された管理対象ノードの各 WebLogic Server インスタンスに関して以下の情報を表示します (「WLS のバージョン」列は、各情報に該当する WebLogic Server のバージョンを示します)。

情報	WLS のバージョン	説明
Application	6.1、7.0、8.1、9	アプリケーション インスタンス
Name	6.1、7.0、8.1、9	アプリケーションの名前
Version	9	アプリケーションのバージョン (アプリケーションにバージョンがない場合、「null」と表示されます)
Module Type	9	CAR、EAR、EJB、RAR、WAR などの J2EE モジュールタイプ

実行方法

1. OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。
2. [ウィンドウ] メニューで、**[登録アプリケーション]** を選択します。
3. [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WebLogic]** → **[View Deployed Apps]** を選択します。

View WebLogic Log

WebLogic Server ログ ファイルを表示します。

目的

OVO 管理者は、WebLogic Server が動作しているシステムにログインせずに、WebLogic Server ログ ファイルを選択して、表示できます。

機能

`View WebLogic Log` は、以下の機能を実行します。

- パラメータを入力しないで View WebLogic Log を実行すると、管理対象ノードに利用できるログ ファイルの番号リストが表示されます。
- パラメータを入力して `View WebLogic Log` を実行すると、パラメータが無効である場合には (数値以外が入力されたり、利用可能なログ ファイルのリストに対応しない数字が入力された場合)、管理対象ノードに利用できるログ ファイルの番号リストが表示されます。
- 有効なパラメータを入力して `View WebLogic Log` を実行すると、管理対象ノードの対応するログ ファイルの内容が表示されます。

パラメータ フィールドには、1 つの数値しか入力できません。これはログ ファイルを指定して、選択されたすべての管理対象ノードについて表示するために使用される番号です。管理対象ノードごとに 1 つのログ ファイルを選択し、アプリケーションを起動するたびに表示します。

[Application Status] ウィンドウを開いたままでこのアプリケーションを再起動すると、[Application Status] ウィンドウでの出力が蓄積されます。

実行方法

1 OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。

2 [ウィンドウ] メニューで、**[登録アプリケーション]** を選択します。

3 [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WebLogic]** → **[View WebLogic Log]** を選択します。

4 WebLogic Server ログ ファイルを表示したい管理対象ノードを選択します。

5 **[Launch]** を選択します。[Edit Parameters] ウィンドウが表示されます。表示したいログ ファイルの番号がわかっている場合は、[Parameters] フィールドに入力します。そうでない場合は、このフィールドは空白のままで、表示可能なログ ファイルを一覧表示します。

6 **[Launch]** を選択します。[Application Status] ウィンドウが表示されます。

7 [Launched Applications] フィールドで、各ノードのアプリケーションの [Status] を確認します。

- Started/Starting - アプリケーションは動作中です。
- Succeeded - 利用可能なログ ファイルのリストが表示されます。[Launched Applications] フィールドのノードを強調表示し、[Application Output] フィールドをスクロールして利用可能なログ ファイルのリストを表示します。
- Failed - ツールは作業に失敗しました。[Launched Applications] フィールドのノードを強調表示して、[Application Output] フィールドをスクロールして問題の詳細を表示します。

8 **[View WebLogic Log]** をダブルクリックします。

9 WebLogic Server ログ ファイルを表示したい管理対象ノードを選択します。

10 **[Launch]** を選択します。[Edit Parameters] ウィンドウが表示されます。

11 [Parameters] テキスト ボックスに、表示したいログ ファイルの番号を入力します。1 つのログ ファイルのみを選択できます。

ログ ファイルの番号を覚えていない場合は、[Application Status] ウィンドウへ進んで、[Launched Applications] フィールドのノードを強調表示し、[Application Output] フィールドをスクロールして利用可能なログ ファイルのリストを表示して、[Edit Parameters] ウィンドウに表示したいログ ファイルの番号を入力します。

12 **[Launch]** を選択します。

13 [Application Status] ウィンドウで、選択されたログ ファイルを表示するノードを強調表示し、[Application Output] フィールドをスクロールしてログ ファイルを表示します。

14 表示したい各ログ ファイルについて、ステップ 8 ～ 11 を繰り返します。

15 **[Close]** を選択して、[Application Status] ウィンドウを閉じます。

View WebLogic Servers

WebLogic のドメイン設定、クラスタ情報、および物理コンピュータを表示します。

目的

OVO 管理者が WebLogic のドメイン設定、クラスタ情報、および物理コンピュータを表示できるようにします。OVO 管理者は、WebLogic Server を実行中のシステムにログインする必要はありません。

機能

`View Deployed Servers` は、選択された管理対象ノードの各 WebLogic Server インスタンスに関して以下の情報を表示します (「WLS のバージョン」列は、各情報に該当する WebLogic Server のバージョンを示します)。

情報	WLS のバージョン	説明
Domain	6.1、7.0、8.1、9	WebLogic ドメイン インスタンス
Admin Server	9	WebLogic 管理サーバー インスタンスの名前
Version	9	設定のリリース ID
Server	6.1、7.0、8.1、9	WebLogic Server インスタンス
Name	6.1、7.0、8.1、9	サーバー インスタンスの名前。Administration Console に表示され、サーバーの識別に使用される名前です。
Listen Port	6.1、7.0、8.1、9	WebLogic Server インスタンスが通常の (非 SSL) 着信接続をリスンするために使用するデフォルトの TCP ポート
Listen Address	6.1、7.0、8.1、9	WebLogic Server インスタンスが着信接続をリスンするために使用する IP アドレスまたは DNS 名
Cluster	6.1、7.0、8.1、9	クラスタ インスタンス
Name	6.1、7.0、8.1、9	ユーザー指定のクラスタ インスタンス名
Type	9	クラスタ内のサーバーがクラスタ間レプリケーションの最適化のために使用するデータ送信方法。man (metro area network)、wan、none などです。
Address	6.1、7.0、8.1、9	クライアントがクラスタに接続するときに使用するアドレス。EJB ハンドルとエンティティ EJB フェールオーバー アドレスの生成に使用されます。
Multicast Address	6.1、7.0、8.1、9	クラスタのメンバが相互通信するために使用するアドレス
Machine	6.1、7.0、8.1、9	コンピュータ インスタンス
Name	6.1、7.0、8.1、9	ユーザー指定のコンピュータ インスタンス名

実行方法

1. OVO コンソールで、[登録ノード] ウィンドウのノードを選択します。
2. [ウィンドウ] メニューで、**[登録アプリケーション]** を選択します。
3. [登録アプリケーション] ウィンドウで、**[WLSSPI]** → **[WebLogic]** → **[View WebLogic Servers]** を選択します。

索引

記号

A

Add Application Server アクション , 145, 146

Add Node アクション , 145, 147

ADDRESS プロパティ , 44, 154

ADMIN_HOST プロパティ , 154

ADMIN_PORT プロパティ , 154

ADMIN_PORTS プロパティ , 44, 155

ALIAS プロパティ , 156

Application Servers ツリー項目 , 144

AUTO_DISCOVER, 150

AUTO_DISCOVER プロパティ , 156

B

BEA_HOME_LIST プロパティ , 157

C

Cancel ボタン , 145

Check WebLogic アプリケーション , 17, 187
- 機能 , 187
- 実行方法 , 187

CODA
- 使用法 , 72

COLLECT_METADATA プロパティ , 158

COLLECT プロパティ , 157

Configuration ツリー項目 , 144

Config WLSSPI
- Add Application Server アクション , 145, 146
- Add Group アクション , 145, 147
- Add Node アクション , 145, 147
- Application Servers ツリー項目 , 144
- Cancel ボタン , 145
- Configuration ツリー項目 , 144
- Default Properties ツリー項目 , 144
- Defaults ツリー項目 , 144
- Exit アクション , 146
- Finish ボタン , 145
- Groups ツリー項目 , 144
- Next ボタン , 145
- Nodes ツリー項目 , 144
- Remove ALL App Servers アクション , 146, 148
- Remove ALL Groups, 146, 148
- Remove ALL Nodes アクション , 146, 149
- Remove Application Server アクション , 146, 148
- Remove Group アクション , 146, 148
- Remove Node アクション , 146, 149
- Save アクション , 146
- Save ボタン , 145
- [Set Configuration Properties] タブ , 146, 149
- [View Current Configuration] タブ , 146, 150
- アイコン , 143
- アクション , 145
- 使用法 , 143
- ツリー , 143
- ボタン , 145

Config WLSSPI アプリケーション , 16, 174
- 機能 , 174
- 実行方法 , 174

D

Default Properties ツリー項目 , 144

Defaults ツリー項目 , 144

Deploy UDM アプリケーション , 19

Discovery アプリケーション , 16, 42, 175
- LOGIN と PASSWORD の設定 , 43
- 機能 , 175
- 実行方法 , 175

E

EXCLUDE_SAMPLES プロパティ , 44, 158

Exit アクション , 146

F

Finish ボタン , 145

G

Gather MBean Data アプリケーション , 19
GRAPH_URL プロパティ , 158
Groups ツリー項目 , 144
GROUP ブロック , 141

H

HOME_LIST プロパティ , 44, 159
HOME プロパティ , 158

I

Init Non-Root アプリケーション , 17, 177
    機能 , 177
    実行方法 , 177

J

JAVA_HOME プロパティ , 44, 159
JMB_JAVA_HOME プロパティ , 159
JMX_CLASSPATH プロパティ , 159
JMX Metric Builder アプリケーション , 19

K

KEYSTORE プロパティ , 159

L

LAUNCH_DIR プロパティ , 159
LOGFILE プロパティ , 160
LOGIN プロパティ (WLS バージョン 6.1), 160
LOGIN プロパティ (WLS バージョン 7.0 および 8.1), 160

M

MAX_ERROR_LOG_SIZE プロパティ , 160

N

NAME プロパティ , 160
Next ボタン , 145
NODE_NAMES プロパティ , 44, 161
Nodes ツリー項目 , 144
NODE ブロック , 142
NUM_SERVERS プロパティ , 161

O

ov.envvars.sh, 33
OV_CONF 環境変数 , 33
OVPA, 71
OVPI レポート , 76
OVPM
    WLS-SPI に統合 , 33, 77
ovweb.conf
    OV_CONF 環境変数 , 33
    設定 , 33

P

PASSPHRASE プロパティ , 161
PASSWORD プロパティ (WLS バージョン 6.1), 161
PASSWORD プロパティ (WLS バージョン 7.0 および 8.1), 161
PORT プロパティ , 161
PROTOCOL プロパティ , 162

R

Remove ALL App Servers アクション , 146, 148
Remove ALL Groups アクション , 146, 148
Remove All Nodes アクション , 146, 149
Remove Application Server アクション , 146, 148
Remove Group アクション , 146, 148
Remove Node アクション , 146, 149
Reporter
    WLS-SPI に統合 , 72
Reporter レポート , 73
RMID_PORT プロパティ , 162
RMID_START_TIME プロパティ , 162

S

Save アクション , 146

Save ボタン , 145

Self-Healing Info アプリケーション , 17, 178
- 機能 , 178
- 実行方法 , 180
- 必要な設定 , 178

[Set Configuration Properties] タブ , 146, 149

[Set Configuration Settings] タブ
- AUTO_DISCOVER, 150
- プロパティの削除 , 150
- プロパティの設定 , 149
- プロパティの変更 , 149

START_CMD プロパティ , 163

Start Monitoring アプリケーション , 17, 181
- 機能 , 181
- 実行方法 , 181

Start Tracing アプリケーション , 17, 182
- 機能 , 182
- 実行方法 , 182

Start WebLogic アプリケーション , 18, 188
- 機能 , 188
- 実行方法 , 188
- 必要な設定 , 188

Start WLS Console アプリケーション , 18, 187
- 機能 , 188
- 実行方法 , 188
- 必要な設定 , 187

STOP_CMD プロパティ , 163

Stop Monitoring アプリケーション , 17, 181
- 機能 , 181
- 実行方法 , 181

Stop Tracing アプリケーション , 17, 182
- 機能 , 182
- 実行方法 , 182

Stop WebLogic アプリケーション , 18, 188
- 機能 , 188
- 実行方法 , 188
- 必要な設定 , 188

swinstall, 21
- テンプレートの再インストール , 60

swremove, 22, 26

T

TIMEOUT プロパティ , 163

Trace JMB アプリケーション , 19

TYPE プロパティ , 163

U

UDM_DEFINITONS_SOURCE プロパティ , 164

UDM Graph Disable アプリケーション , 19

UDM Graph Enable アプリケーション , 19

USER プロパティ , 164

V

Verify アプリケーション , 17, 182
- 機能 , 182
- 実行方法 , 185

VERSION プロパティ , 165

View Applications アプリケーション , 18

[View Current Configuration] タブ , 146, 150
- View Inherited Properties, 151

View Deployed Apps アプリケーション , 188
- 機能 , 189
- 実行方法 , 189

View Error File アプリケーション , 17, 185
- 機能 , 185
- 実行方法 , 185

View Graphs アプリケーション , 17, 186
- 機能 , 186
- 実行方法 , 186
- 必要な設定 , 186

View Inherited Properties, 151

View WebLogic Log アプリケーション , 18, 189
- 機能 , 189
- 実行方法 , 190

View WebLogic Servers アプリケーション , 18, 190
- 機能 , 191
- 実行方法 , 191

W

WASSPI-35, 109, 110, 111, 112

wasspi_wls_ca コマンド , 55
- パラメータ , 56

WebLogic Server ユーザー
- 設定 , 37

WebLogic アプリケーション グループ , 17
WLS-SPI
　概要 , 12
　コンポーネント , 16
WLSSPI Admin アプリケーション グループ , 16
WLSSPI Discovery テンプレート グループ , 20
WLSSPI-Logfiles テンプレート グループ , 19
WLSSPI-Messages テンプレート , 20
WLSSPI-Metrics テンプレート グループ , 19
WLSSPI-Monitors テンプレート グループ , 20
WLS-SPI ノード グループ
　ノードの追加 , 46
WLS-SPI レポート アプリケーション グループ , 18

あ

アクション
　オペレータ起動 , 53
　カスタマイズ , 52
　自動起動 , 52
　分配 , 41
アップグレード , 25
　WLS-SPI グラフ作成 パッケージ , 31
　WLS-SPI レポート パッケージ , 24, 30
　管理サーバー , 27
アプリケーション , 16, 173
　Check WebLogic, 17, 187
　Config WLSSPI, 16, 174
　Deploy UDM, 19
　Discovery, 16, 42, 175
　Gather MBean Data, 19
　Init Non-Root, 17, 177
　JMX Metric Builder, 19
　Self-Healing Info, 17, 178
　Start Monitoring, 17, 181
　Start Tracing, 17, 182
　Start WebLogic, 18, 188
　Start WLS Console, 18, 187
　Stop Monitoring, 17, 181
　Stop Tracing, 17, 182
　Stop WebLogic, 18, 188
　Trace JMB, 19
　UDM Graph Disable, 19
　UDM Graph Enable, 19
　Verify, 17, 182
　View Applications, 18
　View Deployed Apps, 188
　View Error File, 17, 185
　View Graphs, 17, 186
　View WebLogic Log, 18, 189
　View WebLogic Servers, 18, 190
　WebLogic グループ , 17
　WLSSPI Admin グループ , 16
　WLS-SPI レポート グループ , 18
アプリケーション サーバー
　ステータスの確認 , 37
アプリケーション サーバーのステータス
　確認 , 37

い

インストール , 21
　swinstall, 21
　WLS-SPI レポート パッケージ , 72
　バンドル , 22
　ファイルセット , 22

え

エラー メッセージ , 96 to 137

お

オペレータ
　作業範囲の割り当て , 27, 34
オペレータ起動アクション , 53
オペレータ作業範囲の割り当て , 27, 34

か

確認
　アプリケーション サーバーのステータス , 37
　検出プロセス , 45
カスタマイズ , 12
　アクション , 52
　期間 , 52
　しきい値 , 52
　重要度 , 52
　メッセージ テキスト , 52
監視
　サポートされていないプラットフォーム , 66
　リモート システムのログファイル , 69
監視テンプレート , 20
管理サーバー
　設定 , 39
管理対象ノード
　WLS-SPI ノード グループへの追加 , 46
　設定 , 37

き

期間
カスタマイズ , 52

く

グラフ
OVPM, 71
オペレータ アクション , 81
警告通知条件の表示 , 78
状態の表示 , 78
生成 , 81
生成に使用するメトリック , 78
日付の範囲 , 81
例 , 15, 77
グラフ メトリックの表示 , 33
グローバル プロパティ , 141

け

警告通知
変更 , 53
検出テンプレート , 20
検出プロセス
確認 , 45

こ

構造
設定 , 141
構文
設定 , 141
コマンド
分配 , 41
コレクタ
wasspi_wls_ca コマンド , 55
コレクタ テンプレート , 20
コンポーネント , 16

さ

サーバー固有のプロパティ , 142
再インストール
テンプレート , 60
削除
swremove, 22, 26
WLS-SPI, 22
サポートされていないプラットフォーム
監視 , 66

し

しきい値
カスタマイズ , 52
個々のサーバーについて設定 , 58
リセット , 54
リセットなし , 54
しきい値のリセット , 54
指示
場所 , 13
自動アクション レポート , 62
自動起動アクション , 52
自動生成レポート , 63
収集間隔
選択したメトリックの変更 , 58
変更 , 57
重要度
カスタマイズ , 52
手動生成レポート , 63
条件付きプロパティ
設定 , 47, 48
使用法
Config WLSSPI, 143

せ

制限
リモート システム , 70
設定
OVPM, 33
ovweb.conf, 33
WebLogic Server ユーザー , 37
管理サーバー , 33, 39
管理対象ノード , 37
構造 , 141
構文 , 141
条件付きプロパティ , 48
前提条件 , 33
プロパティ , 152
リモート システム , 67
設定エディタ
「Config WLSSPI」を参照してください。, 141
設定例
仮想 IP アドレス , 170
グループとノード プロパティ , 167
単一のノード /2 つのサーバー , 166
デフォルト以外の WLS 起動場所 , 171
複数の WLS バージョン , 169

前提条件
設定 , 33

た

タグ オプション
カスタム テンプレート グループの作成 , 59

つ

追加
ノードの WLS-SPI ノード グループへの , 46

て

テンプレート , 19
WLSSPI-Messages, 20
カスタマイズ , 51
監視 , 20
検出 , 20
コレクタ , 20
再インストール , 60
しきい値のリセット , 54
分配 , 46
変更 , 51
メッセージ , 20
メトリック , 19
リセットなしのしきい値 , 54
連続生成 , 54
ログファイル , 19

テンプレート グループ , 19
WLSSPI Discovery, 20
WLSSPI-Logfiles, 19
WLSSPI-Metrics, 19
WLSSPI-Monitors, 20
カスタマイズ , 59
収集間隔の変更 , 58

と

登録アプリケ―ション
レポート , 64

は

バンドル , 22

ひ

表示
レポート , 62

ふ

ファイルセット , 22

プロパティ , 152
WLS-SPI 要件に一覧表示 , 153
グローバル , 141
サーバー固有 , 142
条件付きの設定 , 47, 48
定義 , 153 to 165
優先順位 , 142

分配
アクション、モニター、およびコマンド , 41
テンプレート , 46

へ

変更
警告通知 , 53
テンプレート , 51

編集
警告通知 , 53
テンプレート , 51

め

メッセージ
指示 , 13
メッセージ ブラウザ , 13

メッセージ テキスト
カスタマイズ , 52

メッセージ テンプレート , 20

メトリック
収集データ , 11
～から生成された OVPI レポート , 76
～から生成された Reporter のレポート , 73
～によるグラフの生成 , 78

メトリック テンプレート , 19

も

モニター
分配 , 41

ゆ

ユーザー
WebLogic Server ユーザーの設定 , 37

ユーザー定義メトリック
グラフ作成 , 90

よ

要件
リモート システム , 66

ら

ライセンス数 , 70

り

リモート システム , 66
エージェント配布の要件 , 67
概要 , 66
制限 , 70
設定 , 67
設定の要件 , 67
テンプレートの要件 , 67
動作の仕組み , 66
要件 , 66
ログファイルの監視 , 69

れ

レポート
OVPI, 71, 76
OVPI で生成に使用するメトリック , 76
Reporter, 71, 73
Reporter で生成に使用するメトリック , 73
警告通知から生成された , 18
自動アクション , 62
自動生成 , 63
手動生成 , 63
登録アプリケーションによって生成された , 61
登録アプリケ―ション , 64
表示 , 62
含まれた , 14
レポート (自動アクション)
生成される仕組み , 61
レポート パッケージ
インストール , 30, 72
削除 , 24

ろ

ログファイル テンプレート , 19